部報

昭和四十七年度

北海道大学馬術部

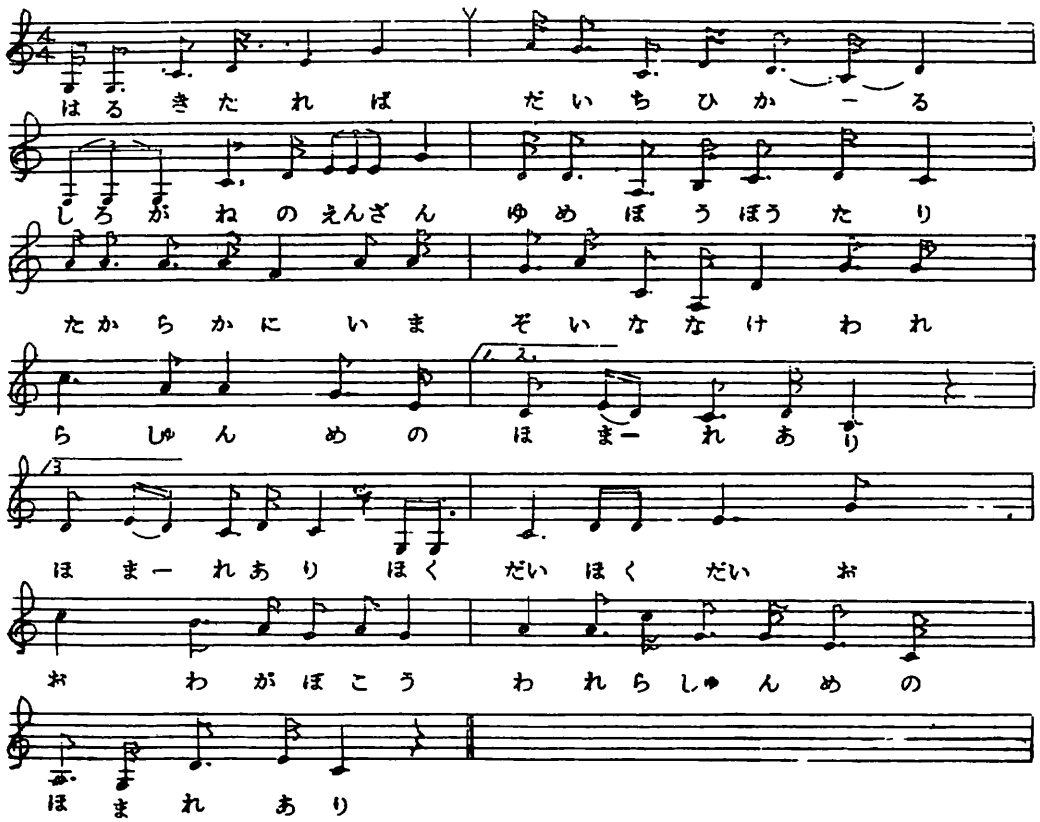
人生は「試み」の連続である。
そして、「試み」の結果は「敗北」の連続である。
しかし、我々は「敗北」に呻吟する必要はない。
また、「敗北」を弄するべきでもない。

〝馬術〟は我々にとって「試み」の一つである。
そして今、我々は「試み」に挑んでいるのである。
「敗北」でない結果を把捉するようにと。

礼　俊

北大馬術部讃歌

作詩　三浦清一郎
作曲　滝沢南海雄



北大馬術部讃歌

一、

春来たれば、大地光る
銀の遠山、夢茫々たり
高らかに　今ぞ嘶け！
われら駿馬のほまれあり

二、

時来たれば　旗をかざせ
奇雲の旅路に　意気軒昂たり
高らかに　今ぞ嘶け！
われら駿馬のほまれあり

三、

雲流れて　旅路遥か
奇春の孤杖　泥濘はばめど
凛然と　進みて行かむ
駿馬のほまれあるかぎり

北大！　北大！　おゝ我が母校
われら駿馬のほまれあり

目　次

○ 巻頭言　部長　半沢道郎 …… 1

○ 主将の抱負　「今」　主将　則近　彰 …… 2

○ 役員報告

主務報告　主務　柴田　好 …… 3

文化報告　文化　添田昌一 …… 5

会計報告　会計　花谷　馨 …… 5

行事及び戦績報告　渉外　景山博文 …… 9

○ 新馬紹介　「こんにちは新顔君」 …… 13

○ 各馬の調教報告

北隼号　「全日本学生馬術大会参戦記（中障）」より …… 17
四年目　西村正二郎

北秀号　「北秀号と試合と私」　三年目　則近　彰 …… 18

北武号　「北武号紹介」　二年目　吉野勝之 …… 21

北勇号　「北勇号」　二年目　江口州志 …… 21

「おもいで」　五年目　桝井　明 …… 22

千里馬号　「千里馬の調教」　四年目　横山豊昭 …… 25

リヒト号　「リヒト報告」　三年目　南部孝一 …… 26

天竜山号　「天竜山の報告」　三年目　南部孝一 …… 26

カムイ号　「カムイ伝」　四年目　田崎拓昭 …… 26

疾風号　「疾風」　四年目　西村正二郎 …… 27

羊蹄号　「羊蹄号御報告」　五年目　桝井　明 …… 28

スターライト号　「スターライト報告」　六年目　松井　亮 …… 29

○ 離厩馬の過去 …… 30

北瓔号　「北瓔号と私」　監督　岡田光夫 …… 35

「北瓔号の思い出」　部長　半沢道郎 …… 36

北　晨　号「北晨号のこと」　四年目　田崎拓昭……37
北　凛　号「北凛号に対する総括」　六年目　松井　亮……39
北　驃　号「夢まぼろしの如くなり」　四年目　西村正二郎……41
「驃さんと私」　四年目　近森憲助……43
「思　い　出」　五年目　桝井　明……44
○ 先輩寄稿……46
おハガキより　昭和四十年　卒　吉田賢一……47
三十九年卒　三浦清一郎……47
三十年　卒　鎌田正人……48
四十五年卒　太田清澄……48
十三年　卒　渋谷周平……48
四十四年卒　田中　力……49
三十八年卒　岡田征至……49
三十四年卒　山本　智……50
四十七年卒　梶村哲世……50
四年　卒　平山常介……51
三十六年卒　高林嬉子代……51
二十六年卒　斉藤善一……51
「自馬と貸与馬」　二十六年卒　斉藤善一……51
「無　題」　八年　卒　武田朝男……52
四十年　卒　荒木伸也……53
三十一年卒　千田哲生……54
○ 同好会より　「あの頃の馬たち」　同好会幹事　佐合義弘……55
卒業生観察録……57
現役部員　他己紹介のコーナー……60
文　芸　簡　「馬乗り文士」……75
名　簿……110

巻頭言

部長　半沢道郎

顧問教官として部報の巻頭に　文を載せるのもこれが最後となった。誠に感慨無量である。私が北大の予科に入学したのが昭和二年の四月、馬術部の前身である北大乗馬会に入会したのが、翌年の一月で、以来実に四十五年の長い間を馬と共に過ごして来たのである。予科時代の三年間は北大乗馬会の会員として、学部に入った昭和五年には自分達で、当時北大にあった文武会の馬術部を創設し、馬術部々員として、また卒業後はOBとして、更に松本久喜兄が北大を去られた昭和三十七年の秋からは顧問教官（部長）として部の活動に微力を尽して来た。

戦争の為に馬術部が報国会騎道班と呼ぶことになったり、乗馬がいなくなって部の活動ができなくなってしまったり、復活して体育会馬術部になってからも、繋養場所や経費の問題、馬の所管の問題、厩舎や馬場の移転問題等多くの難問題に遭遇し、中には部の存続を危うくする問題もあった。農場との関係でも農場に非常に迷惑をかけて、暫々窮地に追い詰められた。然し多くの方々の厚意と援助により、また、馬を愛し、馬術を好み、部を愛する人達の熱意と努力に支えられて、切り抜けて来られたのであった。

この長い間、私個人および馬術部に賜わったご厚誼と援助に対し感謝の気持で一ぱいである。北大乗馬会当時お世話になった先輩諸兄、旧陸軍の歩兵第二十五聯隊、旭川にあった騎兵第七聯隊で教えを受けた、将校、下士官、調教師の方々、昔あった札幌愛馬会（武田忠幸氏）、札幌競馬場の方々、道内の各乗馬クラブ、馬術団体、乗馬連盟、日馬連、学馬連、道や市の体育関係の方々文部省、文化庁、大学の本部、学生部、農場、実験牧場の方々、近い関係では馬術部歴代の部長、OB、後援会の会員諸兄、同好会の諸兄、部員諸君、さらに馬を寄贈して下さった方や、多大の犠牲を忍んで飼糧を納めて下さる方、装蹄師の方、競技会に援助を頂いた方々等、数え上げれば限りが無く、一々お名前を記してお礼を申し上げたい気持である。

大学に於ける課外活動としての運動部の在り方、運営の方法、指導の要領、予算や施設等多くの問題があり、特に馬術部のような経費のかゝる活動には、他の部とは違った困難な問題があって学生部の指導と援助による、部員学生の自主的な活動だけでは、充分な運営は不可能であり、大学全体の関係のあるところで、厚意的に積極的な協力が必要であり、先輩や部の関係者、馬術に関

係ある方々の援助が必要である。学業の勉強の邪魔になるような無理なアルバイトを強いることなく、良い施設と良い馬によって心身の鍛練を行ない課外活動の目的を達成することが出来る様にする必要がある。

在職中になお実現したいと考えていた沢山の事があったが、微力で実現を見ないまゝ、退官することは誠に心残りであるが、部員諸君は後を引き継いで下さる新しい顧問教官の下に団結し、一層の努力によって益々立派な北大の馬術部を築き上げて頂き度くそれによって私の在任時代に賜わった多くの方々の厚意に酬いて下さることを心から期待して顧問教官退任の挨拶と致します。

今

主将　則近　彰

創立以来四十数年の歴史の中で、近き数年の明星西村さんと北隼のコンビは将来も忘れられぬものとなるであろう。部室に於ける喧　で殊更意識されぬ程、多大なものである。技術的進歩をめざす者のいる限り、西村さんの日々の研究と努力は今後の部に残らねばならぬところである。

我々は常に前進してゆかねばならぬ。前進とは、常に何かを模索し続けることであり創出してゆくことである。唯やみくもに信ずる過去形はノスタルジアである。過去は何故に、何如にあったかそして現実は何如様であるか考えねばならない。問題の放棄に結論を求めるのはプラグマティズムである。我々はリベラルにラショナルに進まねばならぬ。

練習の内容と計画が、日々刻々と変わる馬術界の状況をも包摂し得る一般として、基本になるべく創られねばならぬ。その為に日々の練習過程で起こる具体事象の反省が為されねばならぬ。そしてそれは一人や二人の内迫ではダメなのである。内迫の次元が部として高まらねば過去のもつ意味は重く、将来の発展が考えられねばならぬこの現在で、個人ひとりで創り出すものなど、四年の部生活では蟷螂の斧にも如かない。馬術は一個と一頭の競技ではあるけれども、下馬した時はそうであるはずがない。組織であるからである。

様々な個人の集まりが様々な関り方で存在する時、それらは本当に多彩な色相を呈するであろう。クモの巣は広ければ広い程獲物のかゝる数は増えてくる。偶然が必然となる。今はこの力こそが必要であるまいか。又この極みは専ら個人に帰することである。

現在新馬が五頭、Bの人達にも騎っていただいて調教は進んでいるが、OBの人達にかゝる負担は、更なる我々の努力で現在を乗り切らねばならぬ。常に自分に帰る問題となるはずのものがムリへんにゲンコツや安逸如き中途で低迷してはならない。これ等新馬は、さ来年をめざしているのだから。

白刃前に交われば流矢を救わず

最後に、この度長年に亘って顧問教官をやっていたゞいた半沢先生が御退官なされるに当り、我々としても常日頃の甘えは好むと好まざるに拘らず廃除せねばならぬ。半沢先生には今までの幾多の御援助に深謝致すと共に今後も部室にお見えになって欲しいものです。

当番日誌より

4月4日　今日昼、小田しゃんと地下街ユックにトマトアンドチーズピッザを食べに行ったが、ありゃ食えん！豚のエサだ。口直しにラーメンを食ろうてかえった。

役員報告

主務　　柴田好

0

昭和三十九年度からの部報のマネージャー報告を読むと先輩のマネージングの御苦労が手に取るように分り、私などはまだまだ苦労を惜しんでいるような気がします。

昨年十月に役員交代をし、まだ半年も務めていないので主務の責任の重さを感じていないというのが本音です。これは今年度より「渉外」という役職が設けられ、先輩関係、後援会関係、日馬連、道馬連の仕事を一手に引き受けてくれていますし、「文化」として一年目ながら有能な添田君が部報、その他の諸事を努めてくれているかも知れません。

ともかく、この身軽さを生かしてどしどし仕事をやりたいものです。

1　部財政

会計から詳しい報告があるので概要を述べるにとどめます。

支出の中で一番大きな比重を占めるのは何といっても飼料代で

す。ところが飼料の世界的な値上がり（不作、買占め？）のために、さらに大きくアップすることが避けられません。燕麦一袋を例にとっても現在千六百円程ですが、最低二千百円に値が上がるということです。学生部、学馬連の援助金が今年度並となるならば、部馬の離厩という最悪の事態を考えなければならないでしょう。目下、学生部に飼料代六十万を何とか増やしてもらうよう鋭意交渉中です。なお今年度に関しては渡部商店に対する赤字は十万以内に済みそうです。

会計も強調していることですが、馬具、備品、薬品等の出費を極力抑えるつもりでおります。

収入の主なものは、学馬連、学生部、アルバイト、部費、後援会ですが、競馬場等のアルバイト約五十万は、部員の限度です。先輩が開拓してくれたダンスパーティは、過当競争気味で、うま味が薄く、赤字を出したクラブもあります。この上は不定期のアルバイト（アンケート調査、場内整理等）を不本意ながら部員に押し付ける覚悟です。

昭和四十年当時の部の予算百万から現在二百万と部の台所も大きくなりましたが、苦しさは変わらないようです。

2　電話設置

元主務の横山さんから申し渡されたことは学生部の飼料代を上げてもらうことゝ、悲願ともいうべき電話設置です。新厩舎に移転した後は、備品の完備を目指すことが肝要という半沢先生に従い、私も役員交代後そのように留意してきました。

現在運動部は全て学生部に新設された体育掛の管轄となっています。したがって厩舎の備品は学生部から渡されるものというのが立て前です。私は体育会の常任委員を一年間続いていますのである程度学生部の中は知っておりました。まず最初に役員交代コンパに学生課長、体育掛長、体育掛の三名を招待しました。このとき無断で建てた飼料庫のことがばれてしまったのは慮外のことではありました。次に合宿を利用して防火訓練を北消防署の指導を仰いで行ないました。もちろん学生部から視察に来ました。緊急時における電話の必要性を訴えた訳です。その後、何度も学生部へ足を運びました。一クラブのための電話設置は相当な反対が学生部内にもあったようですが、半沢先生からも頼んでいただき（実はこのことが一番効果があったと思います。）、なんとか今年度中に電話が設置されることが内定しました。この交渉の余剰産物(?)として、ガス湯沸器が取り付けられました。

この部報ができ上がるころには電話番号をお報せできることゝ思います。

3　半沢先生退官記念行事

幾多の変遷があった馬術部と常にともにあったと言っても過言ではない半沢先生が、退官なさることになり、私達も大きな支えを失うような思いです。

部としても盛大な行事を行ないたいと考えております。

五月のある一日を、午前中は記念植樹、午後は当馬場で半沢杯争奪記念試合、その後レセプションという予定ですが、今のとこ

ろ計画の段階で日時は未定です。
記念アルバムに後援会事務局の加藤公敏さんを中心に編纂を進めていますので、どうか御協力をお願いします。これらはいずれ決定した段階で後援会、または当部からお報せします。
また、半沢先生を当部より日本馬術連盟に功労人馬の表彰推薦をさせていただくつもりです。

4 所　感

二年生の私を主務としてたてゝくれる先輩の皆様を裏切らないよう頑張るつもりです。いろいろな面で至らない私達ではありますがどうかこれからも暖かく御指導お願いいたします。

我・文化活動委員也

文化活動ということで、今まではなかったため自分の思った様にやって行きたいと思ったが、何をやったらよいかわからない。今の所みんなに言われる様なことをやるのがせいいっぱいである。普段に於てやることの多い、又個人が個人であることの少ない馬術部において、いろいろな意味で豊かな大学生活を送りたいと誰しも考えることであろう。
そういう場をもうけるのが役目であろうと思う。不肖な一年目である僕にこの役が回ってきたのも、まだ馬術部生活にもどっぷりとはつかってはいないという意味も含まれているのだろう。
以前馬術部にも文化活動の動きがあったがそのようにきばった形ではないが、仲間と共通のものとして、人の情緒にふれる様なものをもって行きたいと思う。

昭和47年度　会計報告

昨年の9月から、近森兄より会計職を引き継ぎ、何もわからないまゝ、年額2百万円強にものぼる部の財政を引き受けております。別表に詳細に示しました通り、学馬連よりの援助が増え（一頭あたり年間6万6千円、九頭分で申請）、また競馬場のアルバイトの一日の単価が値上げになって、幾分収入の面で楽になりましたので、強制的なバイトとしては、今年度は秋の競馬場だけですませました。しかし、装蹄代や飼料代が次々と値上がりし（また最近は、乾草をキロ当たり　円の安いものを使っているから、馬が太らないのではないかと言われ、検討中。）
また、今年度は新旧馬の入れ替わりが多く、そのロ

スや頭数が二頭増えたこともあって、当初の楽観的気分から、一度に緊迫した情勢になりました。しかしながら、我が北大馬術部もこゝ数年の低迷状態を脱して、今年は昨年の西村兄に優る成績を収めたいと、部員一同張り切っている状況なので、現在の頭数はどうしても維持したく、こゝに後援会、OBの皆様の援助をお願い致します。また現役部員の皆様は、以上の事を鑑みまして、部費等の滞納金を至急完済して下さるようお願いします。

ちなみに、現在我が部の馬一頭を飼育しますのに、一ヵ月約一万円かゝります。これは飼料代と装蹄代という最低限の費用だけでの試算であります。これに、馬具備品や事務費などクラブとしての費用が加算されていくことをお含みおき下さい。

なお今年度は、馬具として、ドイツステューベンの新鞍一基と練習用の鞍一基を計十万円で購入致しました。これは昨年末、則近主将が全日学生大会で上京された折に、千葉先輩の御好意により、かような廉価で手に入れることができました。こゝに、紙面をお借りして、一言御礼申し上げます。

昭和48年3月

当番日誌より

5月14日　岩坪氏談「自負をもて。
目的地に何としても到着せよ。
賤夫が牛柔き帰るうしろ影　」

乗馬用ズボン専門店
松田屋

田辺洋服店

札幌市豊平四条六丁目平岸通り
TEL (811) 7341

昭和４７年度　収支計画

（Ｓ４７．９月～Ｓ４８．８月）

収入の部		支出の部	
○ 学生部	６００,０００	○ 飼料	５００,０００
（物品援助）		○ 乾草	３００,０００
○ 学馬連	６９４,０００	○ 装蹄代	５００,０００
（学校割１０万を含む）		○ 馬具	１５０,０００
○ アルバイト	４８５,０００	○ 備品	１００,０００
（競馬場のべ２５６日）		○ 薬品	１００,０００
○ 部費・入部金	１５０,０００	○ 事務文化	１００,０００
（部員２０人、入部者３０人）		○ 遠征	１５０,０００
○ 小野氏より	６０,０００	○ 雑費	２００,０００
（一馬房分）			
○ 後援会	１３０,０００		
○ 体育会	３５,０００		
○ その他	３０,０００		
（学園祭等）			
計	２９０４,０００	計	２１００,０００

決　算　報　告

	4月		6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	計
収入合計	28345	79467	77290	60200	17400	112180	698412	601800	206440	10000	84370	1,975,904
部費	12500	34500	35500	41200	17400	41800	21800	0	22020	0	34370	261090
アルバイト	0	0	0	0	0	0	495238	0	0	0	0	495,238
後援会	0	0	0	0	0	0	0	7000	2000	0	50000	59,000
学馬連	0	0	0	0	0	3480	100000	594000	9100	0	0	706,580
道馬連	10000	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	10,000
雑	5845	44967	41790	19000	0	66900	81374	800	173320	10000	0	443,996
支出合計	129417	216417	237206	145448	129947	149031	121432	315451	252474	33900	102254	1,832,977
飼料	35200	127000	18000	35250	56350	30750	30150	39550	24850	28000	68600	493,700
鉄代	0	0	64400	0	0	100000	0	0	122000	0	0	286,400
馬具	0	0	0	0	0	0	0	113150	12480	0	120	125,750
備品	6300	7179	14167	3850	8050	700	1654	4180	689	1000	0	47,769
薬品	1448	3460	2300	0	11820	0	1920	8450	16560	600	11000	57,558
事務	340	4000	1550	21278	10000	6881	25500	14462	25543	4300	18100	131,954
雑	86129	74778	136789	85070	43727	10700	62208	135659	50352	0	4434	689,846

注　2月の決算は、3月10日までの分を含む。

47年度行事及び戦績

4月 9日	旧1年目テスト明け　合宿突入コンパ
11～16日	合宿（新2年目対象）
23～29日	1年目講習会
5月 5日	遠乗会（盤渓）
21日	第9回対酪農学園大学定期戦
6月 3日	北大祭
18日	札幌地区自馬馬術大会
24日	北海道自馬馬術大会
7月 2日	大草刈り大会
15～20日	3・4年目合宿
	1年目日高合宿
24日～	帯広へ遠征
8月	北日本学生馬術大会
18～20日	北海道馬術大会兼国体予選
28～9／3日	1年目合宿
9月13日	北晨離厩
10月 1日	役員交代
6日	役員交代コンパ
8日	緑地開き試合（於　札幌競馬場）
10日	運動会
11月16～20日	全日本学生3大競技
12月 3日	北瓔号離厩式
11日	北駿離厩
12日	北瓔離厩
18～25日	強化合宿

1月　2日	初乗り
27日	新年会
3月　3日	追い出しコンパ
18日	対帯広畜産大学戦（於　北大馬場）

◎　対酪農大定期戦（5月21日　於　江別市井上愛馬クラブ）

○　中障碍飛越競技

1位	北隼号	（西村）
失権	北晨号	（横山）
失権	北駿号	（近森）
失権	スノードン号	（田崎）<オープン>

○　パルワールド・シャス

2位	北晨号	（則近）
4位	北隼号	（西村）

○　小障碍飛越競技

1位	千里馬号	（横山）
3位	北駿号	（景山）
3位	北勇号	（西村）
5位	北駿号	（江口）
失権	北凛号	（南部）

失　権　　北　晨　号　（吉野）

◎　第３回北日本学生馬術大会（８月１２日～１６日、於　帯畜大馬場）

○　中障碍飛越競技

１１位　　北　隼　号　（西村）

失　権　　北　秀　号　（則近）

○　総合馬術競技

７　位　　北　隼　号　（西村）

失　権　　北　秀　号　（則近）＜余力審査にて失権＞

失　権　　上　晨　号　（田崎）＜余力審査を棄権＞

失　権　　北　騮　号　（近森）＜スティーブル中途にて棄権＞

失　権　　北　凛　号　（南部）＜スティーブルにて失権＞

○　小障碍飛越競技

失　権　　北　勇　号　（田崎）

◎　北海道馬術大会兼国体予選（８月１８日～２０日　於　帯畜大馬場）

○　総合馬術競技

７　位　　北　隼　号　（西村）

失　権　　北　秀　号　（則近）＜余力審査にて失権＞

６　位　　ジョリー号　（鎌田正人、北大同）

失　権　　モアーナ号　（鎌田正人、北大同）

○　中障碍飛越競技

６　位　　北　秀　号　（則近）

７　位　　北　隼　号　（西村）

１　位　　スノードン号　（小野忠、北大同）

１２位　　北　武　号　（加藤正昭、北大同）

失　権　　ジョリー号　（鎌田正人、北大同）

○　小障碍飛越競技

2　位　　スノードン号　（吉野）

4　位　　北　武　号　（江口）

5　位　　北　秀　号　（景山）

6　位　　北　勇　号　（桝井）

○　壮年自馬中障碍飛越競技

3　位　　スノードン号　（半沢道郎、北大同）

○　六段飛越競技

2　位　　モアーナ号　（鎌田正人、北大同）

3　位　　スノードン号　（小野　忠、北大同）

3　位　　ジョリー号　（鎌田正人、北大同）

◎　全日本学生三大競技会（１１月１４日～２０日　於　東京馬事公苑）

○　中障碍飛越競技

２０位　　北　隼　号　（西村）

○　総合馬術競技

２０位　　北　隼　号　（西村）

こんにちは、新顔君

疾風号（トキカゼ）

昭和45年5月31日生

沙流郡門別町美原産

父　ア　オーバーマイン

母　ア・ア　ミスメビハヤ

騸　ア・ア　栗毛

一説によると去勢したのが、いけなかったのか、覇気がなくなったと言われる。とても人なつっこく、噛むことを知らず、ひたすらなめる。すばらしいズブトサがある。

カムイ号

獣医学部の実験用としてやってきた、出生は定かではない、いつのまにか我部に出現していた抜け忍である。モクシ抜けの術が得意で当番泣せだ、そのすばらしい飛越ぶり、駈足、まさしく本名である。

騸　サラ　栗毛

天龍山号

昭和43年3月6日生

浦河郡浦河町産

父　サラ　ネヴァービート（英産）

母　サラ　カンキヒメ

　　サラ　黒鹿

まさに大器晩生型だ、ボケーッとしている、ヌケテンなんてみんなに言われるが、いまにみていろ俺だって、右前肢が完治すればしめたもの。

血統名　サン・アンドリウス

リヒト号

昭和３６年６月１３日生

勇払郡早来町産

父　サラ　カルガドール

母　サラ　トキチドリ

牡　サラ　栗毛（全身刺毛）

大阪は服部緑地からやって来たのが、昨年１１月、寒くて、震えがとまりませんでした。フェリーでは猫をかぶっていたが、落ち着くと大あばれ奇声を発する。北隼とは異母兄弟です。

スターライト号

昭和４１年生

沙流郡門別町産

父　トモスベビー

母　銘　乾

此　　ア・ア　　栗毛

カミソリのような切れ味、軽々とそう軽い感じである。四六時中首を上下に振っている、おじぎでもしているのかな、牧場ではやさしいお母さんだっただろう。

羊蹄号

昭和44年3月4日生

音更町十勝種畜牧場産

父　サラ　ハマテツソ

母　　ア・ア　久亭

此　　ア・ア　鹿毛

十勝の山中から出てきました両親からもらった亭浜を改名され、面白くないが、がんばります。カモシカのようなバネをもっておりますから。

当番日誌より

5月15日　今日から草刈りの予定だったが鎌の用意がまだなのと、草のたけが短かいのと、そういう理由で来週からに延期された。何はともあれホットした当番諸氏。そろそろ草もたべごろだ。

GET BACK!

あなたのレジャー計画に
お友達と家族でグループで
フロンテア　ライディングパークを
加えて下さい。

☆フロンテア乗馬クラグ
☆ドライブインフロンテア
☆フロンテアフイッシングルレーク

札幌市より石狩街道北へ25㎞石狩河口大橋より３㎞
駅より車で30分国道231号線沿いTEL石狩(01336)２－8239

＊学校馬術部合宿歓迎＊

“ウマ好き、ウマ乗りが集るリラックスルーム„

スナック喫茶『ジョウバ』

◈会合、コンパには貸切で開放します〔酒原価〕

◈サービスメニュー
コーヒー＆スパゲティ
コーヒー＆カレー
コーヒー＆チャーハン
¥200

◈洋酒ボトル
ブラックニッカ　¥1,500
サントリー角　¥2,200
サントリーオールド　¥2,700
チャージ　¥　100
チャーム　¥　200

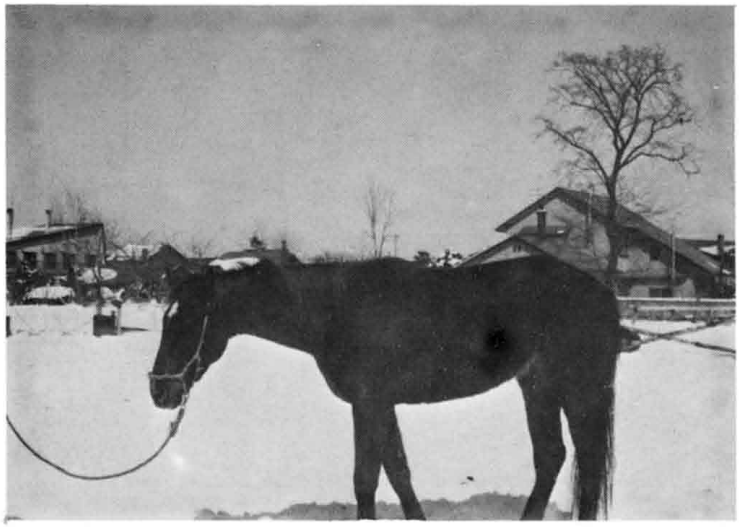
北６西６本通北向ＴＥＬ711－9427・741－9403

リ ヒ ト 号

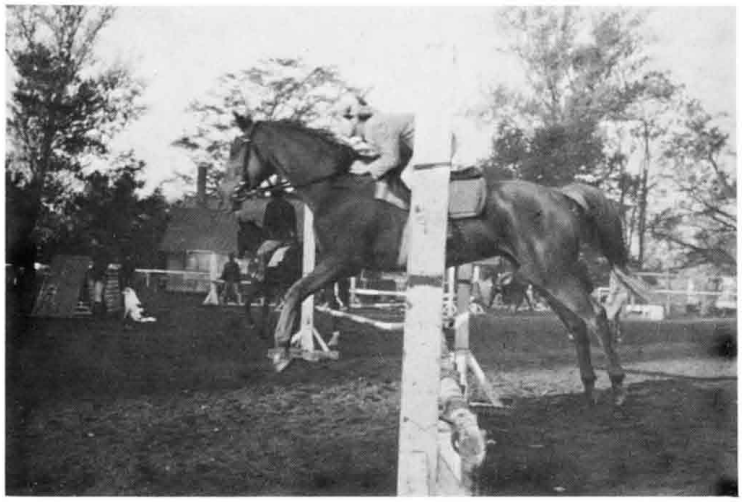
天 龍 山 号

カムイ号

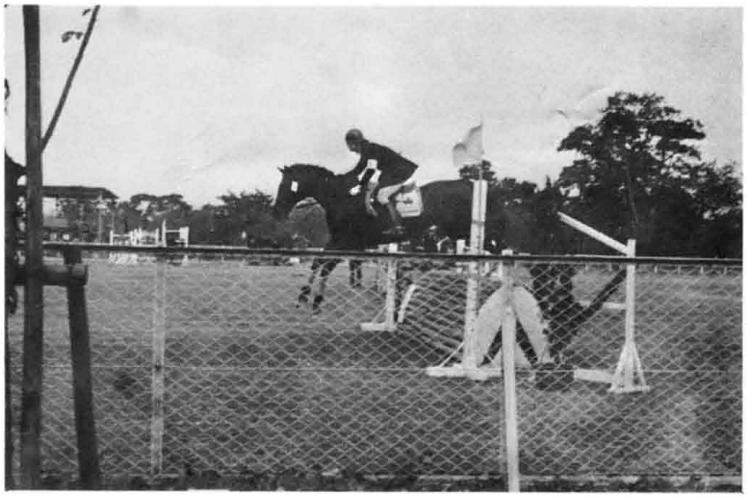
羊蹄号



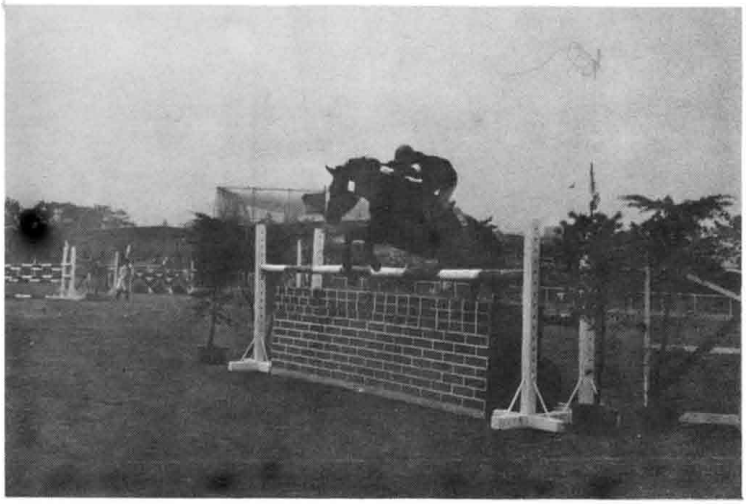
疾風号



スターライト号



全日本学生馬術大会（中障）　西村兄と北隼号



同　上　最終障碍

各馬の調教報告

北隼号

全日本学生馬術大会参戦記（中障）より

西村　正二郎

いざ競技場に入ってしまうと、どうってことはないんだが、そこに至る迄の忌避すべき幾時間、何度経験しても嫌なものだ。微かな気負いと精神の高揚。ふっとよぎる不安、暗い思い。種々雑多な感情のないまぜ。然し、現集にあるのは俺と〝おまえ〟だけ。十二歳の牡馬北隼、ヒッカケル程の向う意気と、障碍をぶち毀してでも超えてゆく勇気がたまらなく頼もしい。準備運動もうまくいった。殊更興奮もしていない。呼出し、入場、もう一度思う。〝おまえ〟だけと。兎も角抑えてゆこう。最初が肝心だ第1、第2は殊に抑えて抑えて。北隼のストライドなら、抑えていってもそうタイムは食わないはずだ。それに落下も防げるだろう。第1通過、うんイイ調子だ、大きくゆっくり右へ回転して第2、向けたトタンに俄然もの凄い前進気勢。第2、第3と直線になって出口に向っているせいもあるのか、もの凄い力で拳にかかってくる。然し狂奔的なそれではない、寧ろイイ状態だ。第2通過、第3通過。第4カマボコバー、これは絶対落さない。右へ回転して第5120の正オクサー苦手な障碍だ。安の定一歩踏み過ぎて落下。さあ次の第6、第7が問題だ、第6140の垂直レンガ、一生懸命抑え様とするのだが、手綱を握る手が痺れる程に前に出る。やはり焔み切り近すぎて前肢で落下、続く第7は130をズラリと並べたトリプル、トリプルAは慎重に抑えてゆこう。なかなかどうして、凄い力で前に出る。こうなりゃもう馬任せ、後はついてゆくだけ、A、B、Cともクリア。ホッと一安心して大きく左回転、この辺で北隼を愛撫して一息入れさせる余裕があって然るべきなのだが、騎手は惟だ無我夢中、北隼も波にのってひたすら前へ前へ。人馬共にそのゆとりはない。だが、第8ついたて、第9ビラビラ、第10レンガ、第11A石垣、B六角とイイ調子で無事通過。そのまゝ直線で第12水濠、えらく伸び切ってしまって制御が効かない、脚を留守にして手綱だけで操作しようとするから猶更だ。結局右へ曲り切れず、第18最終のレンガバーを一反抗して一走行目は、一反抗二落下タイム減点でマイナス13.5。

二走行目、出番は午後三時頃、変に神経が高ぶって相変らず嫌な気持だ。相川が家から梅酒を持って来た。誰ともなく飲むか、という事になった。出番迄には醒めるだろう、と軽い気持で二杯くらい飲んだ。暫らくして準備運動を始めたが一向に醒めやしない。途中、乗馬の千葉さんが側を通られたが、実に体裁悪かった。吉野は赤い顔でボンヤリつっ立っているし、僕は僕で、吉野に輪をかけた赤い顔を目深にかぶったヘルメットで半分隠しはしているものゝ、上半身は下着一枚という不様さ。さすがに水野は強い。ケロッとしている。体の表面はホテッて熱い。頭の芯は朦朧と霞がかった様であり、試合が何だ、と変に開き直っている。時折心臓が、こんな不屈きな事をして、と冷たい脈を打つ。結局酔いの

完全に醒めやらぬうちに出場して、一反抗一落タイム減点でマイナス8.5。反抗は第一日目と同じケース、おそまつとしか云い様がない。落下はトリプルのB、Aを飛んで手綱が弛み過ぎた為に飛越の弾道が低すぎ、後肢で落下。北隼は僕をかばって実に勇敢だった。苦言、試合の前に酒飲むな。

千葉さん始め、東京の諸先輩にはいろいろと御世話して戴き、どうも有難う御座居ました。

西村選手は北隼号（サラ12才）に騎乗し、見事北日本予選を通過し、東京馬事公苑で行なわれた全日本学生馬術大会には中障害飛越競技・総合馬術競技に参戦しました。参加数八〇頭近くの内半数以上が失権する中でともに二〇位の成績でした。

北秀号と試合と私

則近　彰

北秀に主に僕が騎乗するように言われた時、内心ひどく嬉しかった。それは、我部で一番のり易く僕の未熟な脚の作用でも、左右へ動いてくれ、しかも飛越すれば弾発力あるキレイな体形をとる馬であるからで、その上一年の時から乗りたいとばかり思っていたことが叶ったからだった。当初松井さんや田崎さんからの注意で乗り始めた頃は、「こりゃまあよく動くなあ」と思うことのみならず、実に嬉しいものだから馬上で頬ばかりゆるんでいた。自分の思うところを自分ながらにできたと思った時などはもうおかしくっておかしくて、自分でも何やらわけのわからぬデコに対する愛しさとでもいうような情があふれ満つのを感じたことだった。それが七月の初め。

かくいう人の精神状態と状況下で誠に不埒にも、日々ノーノーと騎馬していたのであるが、ある日の経路走行のこと、練習時今まで極めて恐れ気もなく障碍を飛越していたこのデコが僕にとっては思いもよらぬかっこうを示したのである。経路走行の馬場に入ったとたん頭頸と腹筋が硬直してしまったのである。第二障碍で拒止。前肢をつっぱってテコでも動かずという見事な急停止を呈したではないか！この時の私の内心は、天が崩れ地がゆがみ、皇大神は御隠れになり、地獄の断末魔よろしきうめきをあげたのであった。デスピリット、消沈、崩壊、不信、否定、スッポン、

ありとあらゆる消極的言辞を弄しても始まらぬ程の痛恨の一事であった。この日より暗たんたる思いと不安と焦りとが湧き起ってきた。騎手の精神的不慣れと、所謂技術的未熟は当然のことながら、当時の自分の目からみれた、馬の状況判断による理由の探索を始めねばならぬと思った。

一、親が北彗とグレースであって、かつ彼女は極めてよくその両親の特性を良きにつけ悪しきにつけ受け継いでいるらしい。従って過去のこ両馬に関して調べられるだけ調べてみる必要有。自分ながらで判明せしことは、前軀機動であるということ。後軀の踏み込みによるバネと落ちつきがないこと。

二、馬の人への信頼のし方における精神上の甘えと、その反面の人への恐怖、及び障碍恐怖心の存在。

三、頭頸は低下してあれども伸展の本来の意味をもっているや否や。

四、全般的に地道な再行の要あり。

ところがである。こゝら辺で僕の心境にも変化が生じ、ニッチもサッチもゆかないと思った問題が起こった。自分自身の馬に対する（広く言えば全生物に対する）精神的基盤に関してである。動物界は弱肉強食の世界、人間界は実力主義、二者のからまるところに馬術部がある。僕にはどちらも苦手なものである。馬を馬と見れない。赤軍派のリンチ事件も首肯できる一面があるのじゃないか。人が馬に乗る以上……云々

かく大げさに（誇大妄想の症状なのだが）　悩みつゝ活動していた時、いみじくもN君より焦り過ぎだと言われた。

経験が高まれば高まる程、浅い者の観ることができる変化以上のものを意味づけて観ることができるものではあるけれども、しかし何如程のこともない内容に於て結論を急ごうとする個人的性格の所以と外的条件の為につまり、北秀に関して目の当りにみえる変化が体中で感得できないとその日一日の練習がむだだと思えて仕方がなかった。

進退のわからぬまゝ北日本大会へ貨車積。帯広での一月、この期程焦りと充足とが入り混じった時はなかった。固癖となりそうな恐れを抱きつゝ当時の北秀に対して、ハミ受の強さと脚の力とがどの辺でどういう具合に相互関連するのかは最後までわからなかった。唯北大の他馬よりかなりきついものではなかったろうか。

中障第一日目　第一障碍でハミと脚とから馬が抜けてしまった。失権。

総合第一日目調教審査。アビュイエは顔が曲がって全然だめ。駈歩伸長に落ちつきなし。二日目野外騎乗。人馬転したがこれ程うまくゆくとは思ってなかった。下見の時こんな穴あり絶壁あり川あり凸凹あり曲がりくねった路を果してゆくものだろうかと思ったことは全く杞憂であった。（因みに、後日全日学の大会で総合を観戦してみてこれなら本大会は北海道でやるべきだと思った）この時デコに対する思いも少々好転した。（こゝら辺が馬を馬と見れない証しである。）三日目余力。少し疲れ気味だったが体調は大したことはなかった。ところが昨日人馬転した六角でガクリ亦亦ドン底へ。

さて次は道大。もう障碍は出たくない心境であった。第一日目総合野外騎乗まで。野外騎乗では少し余裕があったかもしれない。最後の障碍で二拒止した時も、別に何とも思わなかった。アッサ

り飛んだ。見ていた方がハラハラしたそうだ。二日目余力。これは前半よかったが先の六角バーで失権。速歩でゆくことを体中で覚えた一事であった。二年目の時の北彗と同じケースだったのでそれを胆に命じていなかったという自分に腹が立った。二日目小障で景山君出場。景山君にはこの間ずっとつきっきりで早朝の練習も自分が乗っているような気持でつき合ってくれた。それだからこの私メの不甲斐無さに心中発憤していたことであったろう。だから是非先ず帰ってもらいたかった。帰った満点で。どうだあのハレバレとした顔。よかった。先ず経路を廻って帰った。後は高さだ。しかし景山君はうまかった。クソッタレメと思うのはそれから。これ程考えてみてもどうもうまくない。これは一体何だろう。景山君の快挙で亦々々、失意のドン底の壁を破って地獄へ落ちた。三日目中障。既に希望とか意欲とか凡そ、動物的指向感情は皆無であった。又絶望などという人間的感情も通り越して落ち込んでいた。最早頼るのは、自分の腕と脚と北秀という馬に対する思考のみ。鞍下にいるのは馬か？常に意識上に全ての状況判断をのぼらせようとした。田舎臭いと言われるなと思いつゝ回転の多い前半は速度。バンケットおりたところで駈歩。持続。今日は拍車に従順で緊張のし過ぎはないと判断してカマボコからWへ。城壁で拒止。ナーニこれは俺が悪い。右脚の使用と、駈歩の所以。ここら辺で馬に気を変えさせてみるか。速歩飛んだ。トリプル。左回転して駈歩飛越。バーをバラバラ落とす。馬の奴びっくりしたな。ではもういっちょう気分を変えてやろう。最後は六角。怨念の六角。速歩にムリに落とす。トンダ。ゴール。涙が出た。ここで一辺に人間に戻った。クソ、チクショー、ヤリャアガッタ。思わず「ヨーシデコチャンヨクヤッタネ。」と愛撫。抱きしめたくなった。如何せん彼女の体重は五百キロ近かった。

涙、そは全ての始まりなり。

レポートより苦しきは部報の原稿なり。

レポートにて、7枚も書いたのは、たったの一度もない。

当番日誌より

6月3日　北大祭　茶房「北馬」本日開店

店、部員諸兄ごくろうさまでした。

部員諸姉の奮闘ぶりは大したものです。可成りの売上げがあったもよう。吉野兄以下数人はクラーク像付近で鉄を売っておられたそうで、真黒に日焼けしておられました。

北武号紹介

2年目　吉野勝之

北武号が再入厩致しました。冬期の練習馬不足を補うために、加藤さんの御好意で貸して頂ける事になった次第です。

僕が1年目の春に北武という馬がいたのを覚えているので、1年半ぶりに帰ってきた事になります。北武について知っている事と言えば、とにかく手入れの時にすごく暴れるという事・頭絡ぬけの名人でありよく採草地の方へ逃走し散歩するという事くらいです。それでも夏の帯広の大会の時、我が部馬と仮厩を共にしていたので見知ってはいましたが。

とにかくよく肥えた馬です。まるまると肥えて〝肥満児ブー〟の異名をとる程です。肥えているためか、スタミナが無くすぐにバテますが、徐々に運動量を増やしてゆきスタミナを養成しようと思います。

以上

北勇号

江口州志

小生が北勇と契りをかわして、まだ半年となっておりません。それに10月～11月の2ケ月間は右後肢のケイクンで、まったく運動できずという状態でした。元来、この馬は性質温好で、とてもおとなしかったのが、2ケ月の治療とか運動不足で、ややうるさくなったというあまり良い状態でありませんでした。かようなケイクンごときで2ケ月もということでありますが、この馬は抵抗力がなく、ちょっと油断すると右後肢の球節をはらすという事態でした。しかし、このケイクンも手入れのかいありまして、どうにか運動もできるようになり、現在は、元気にがんばっております。ただ、ちょっとけがが多く、気をつけなければならないと思っております。

前にも述べましたように、性質は温好ではありますが、左目がまったく見えないというハンディーを背負っております。このためでしょうか種々の欠点がみられます。①障碍飛越の際の踏切りの不安定　②中障碍のにがて　③駈歩のぎこちなさ（特に左手前）④駈歩飛越のまずさ（特に前進気勢の欠如）、これらにもまして馴致が充分ではなく外に出てもおどおどして、常歩の歩幅も狭くすぐに物音に驚ろくという具合です。

実際問題として、これをどうかしなければならないですが、まず第一には、馴致を充分といってほど充分せねばならないと思っ

ております。そして、ただ外を歩くだけではなく、小規模なスティーブルをやる如く、外を走り廻るのも考えております。合わせて障碍、馴致（中障碍etc）もしなければならないでしょう。

第2の問題として、この馬は、まったくといっていいほどハミを知らない、つまりハミをかんでくれないのです。特に障碍前においてはこの傾向が大となり、馬の口との連繋がなくなってしまうことがあります。これをなおすにはということになると、まだまだ迷いながらやっておる次第で、なかなか良い方法がみつかりません。しかし、不整地キャバッレティー等を充分なる推進と柔軟なる挙でやることを心がけております。

かように申しましても、この馬が性質沮好だということが救いになります。そして、非常に騎手を信頼してくれるので、現事点では効果は上がっておりませんが、きっと馬がこれに答えてくれると信じております。とにかく、この馬はやりがいがある馬だと思っておりますし、なんとかしていくつもりです。きっと、片目のハンディをのりこえてくれるでしょう。がんばれ、北勇！

北勇号報告

桝井　明

前号の部報にて北勇号のことを報告致しましたが、その後（昨年四月～九月）の経過について報告します。雪が消えるまでは果してどこまで頑張ってくれるものか全くと云っていい程判りませんでした。砂馬場が現われてからは、障碍通過も本格的に行なえる様になり、冬場の頃とはうって変ってたくましく育っていった様にみえました。気候も良くなってから外を歩く機会が増え、練習の前後に消遙することで馴致の時間が多くなりました。春先の対酪農定期戦では千里馬と共に回数飛越で他馬を圧倒。札幌地区自馬大・道自馬大では小障で好成績でした。印象に残るのは回転が早く案外タイムが短かいことでした。夏の北日本学生新馬戦では田崎君に騎乗してもらいました。試合毎に人馬も慣れてきた様です。それまでには、毎日曜日に簡単な経路走行を行なっていましたから試合にも、それと同じ様にして出場しました。今ふり返ってみますと、無理な処もありました。特に馬の基本的な姿勢などについては、不安定というか未だに頸つきがしっかりしていない状況で、とにかく飛ぶということに重点を置きすぎたこと反省せねばならない点だったと思います。現在の北勇の様子をみていますと、土台がしっかりしていないためか、初期の頃と比べて、まずい面も出てきた様にみえます。大変すまないと思っています。未熟ながらも自分達で一頭の馬を何とか育てようとすれば、独り

の熱意と細心の配慮が当然ながらも必要になってきます。一代限りで出来る訳はなく二代三代と引き継がれつつ目標に向かって育て上げてゆくところにこそ学生馬術の心髄があるのだと思います。長い部の歴史の中の、ほんの少しの分担とでもいえる役目を遂行しているとでも云いますか、流れの中で或る時は不振の淵に打ち沈み、或る時は栄光の花道に進めるのでしょう。苦しい時にこそ我々の真価が問われる時なのではないかと考えます。少し横道にそれました。北勇号は、まだ新馬であって、これからが今迄以上に気を払って騎乗しなければならない時期だということに間違いはないと思います。北勇号を調教していかれる方へ。

①片目であるという事について

普通の馬以上に練習（訓練）が要求される場合もあります。特に障害飛越における踏切の問題は人の配慮できる代物ではありません。慣らす以外、数をこなす以外に道はないと思います。飛び易い障害で何回もくり返すのみでしょう。目の悪い左手前の駈歩は右手前とまるで異なっていた様に憶えております。左手前は後肢をひきずる様なアセリ気味の歩様であったと思います。他馬の様にスッキリと乗れないところもあるでしょうが無理に、この歩様をどうこうすると考えずに物静かに随伴してやってもらいたい。

②口との関係について

私が騎乗し始めた時には既にアゴを巻き込む、いわゆる鎌クビのスタイルをとり、余程拳が柔和で、しかも常に連絡されていませんと非常にうるさかった事を憶えています。春に岩坪氏が来部の折「もっと積極的に語りかける様な拳であって下さい」と注意されたのを思い出します。下級生の練習に使われる今日、特に、このことを注意して欲しく思います。拳にうるさい彼に対して最適な補助手段は口笛の利用です。拳に対して非常に神経を使いますから口笛はこの上ない手助けとなります。もっと利用すべきです。私が乗る以前に誰かが根気よくしつけて居てくれた賜物と、いつも感謝しながら騎乗しておりました。

③障碍飛越について

運動中には、さ程バネのある感じは受けないのですが飛越に際しては天性のバネと云いますか後肢の弾発力には素晴しいものがある様です。初めの頃は拳が口に当るのを極度に恐れてブラブラ輻が殆んどでした。ハミを外した状態で弾発力に任せて跳ね上るので鼻づらは天を向いていました。馬口との接触の放棄は余程のことでない限り避けなければならないと前々から云われて居ったのですが、実際面ではいつも口に当らないかと懸念が先に立っていました。頸がふらつくのはこのことに起因しているのでしょう。彼はハミを外しても百二〇や三〇くらいは飛びますが、ハミを噛んで通過できたのは皆無に近かったと思います。低くても支点を取って飛んでいる馬の方が美しいです。程度を急ぐより馬の体勢改善に力を注いで下さい。

④訓致について

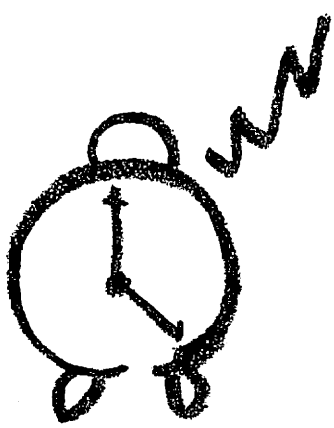
私が騎乗していた時には外を歩く時間がありましたが最近は練習（部員の）のために余り外へ行く機会も少ない様に思います。外を歩いて一番気をつけて欲しい事は沈静を破らないことだと思います。何かに驚いても興奮させる事を極力避けて無理せぬことだと思います。左側の視野が狭いのでキョロつくことはいつもです。構内を歩く他に出来れば外で騎乗できる時間をもって下さい。

昨春、野外騎乗する機会があった時、馬場の中では平気だった障害を見てビックリした事がありました。色々原因はあると思いますが野外での障害馴致も必要だと思いました。環境が変っても騎手に従順ならば問題は少なかったでしょうが。一つ一つ書いても所詮は騎乗する人の努力に待つのみですので頑張って下さい。北勇はまだまだ新馬であるということを忘れないで乗って下さい。おしまいに、期間中いつも索き馬馴致に当ってくれたTさん他の一年生、頑張って自分達の北馬を育てて下さい。現役部員は四年間という限られた中で未熟ながらも（失礼！）或る程度の技術を身につけて試合場に臨み、勝利してゆかなければならない訳ですが、そこに於て技術以外に、しかも技術以上に要求される人馬の姿（精神的なつながりとでもいいますか）は索き馬・散歩といった人と馬との語らいの場面で養われていく方が多いと思います。学生の特権（？）余裕な時間の幾分かを馬との語らいに回したら今迄以上に親しみがわいてくると思います。私達の技術の未熟さをカバーするためにはもっと馬と共に過ごす時間をもってゆくことから始めた方が良いと思います。学生の本文は勉強です！当然です！パチンコ、麻雀、酒　etc。大いに結構！　練習の時だけが馬と接する機会では、必要な時に乗り回す様な車と一緒に居るみたいです。少なくとも自分達の仲間は、そうであってはならないと思います。練習時にしか顔を出さない人よりも、索き馬などで馬と親しんで居る人を見る時の方が救われる感じがします。変ですね。北勇号の報告から大きくはずれました。すみません。

当番日誌より

7月2日　大草刈り大会、腰痛、手のマメ、草のやま、あしたから晴れるといいな。

7月22日　合宿並当番終了、一年生帰札なれど、帰部室ならず。非常にシニカル、活淡といおうか、冷たいといおうか、疲れているといおうか、卒直であるといおうか、・・・・何とでも言え。ゴクロウサン！　また飲もうぜ。



千里馬の調教

横山豊昭

千里馬には二月以来約8ヵ月間本田先輩といろいろ議論したし教えてもらったりして一緒に教えてみた訳ですが、ここにはその概要を記します。

まずその短所

一、鞭及び拍車にまだ反抗的であること

二、右手前の駈歩が出にくいこと

三、直進歩行が不安定なこと

四、馬が自分勝手な行動を突然とること等。

次にその長所

一、性質が、適当に桿威がありかつ緩かであること

二、障碍を尊重すること等。

僕が一番強く思ったことは、何故に馬が直進できなかったり、勝手な行動をとったりするのだろうということで、これを矯すために、とにかく騎手は、目標を定めて真直ぐに歩かせることに努め、また、鞭に不従順な結果の現れだなと思い、円陣を通るようにして後駆の統轄をしてみました。それからまた常に馬を激励してやり、少しでも良いところがあれば大いに愛撫してやり、馬に話しかけ、言い聞かせるようにして燕麦などをやるのです。

あとは各歩度間における停止（この場合は口笛使用）後退・前進・旋回・回転を無理なく徐々に鋭角に回れることを目指したのと、時間の許す限り、燕麦をたくさんポケットにつめて、索馬に行くことで、馬の動作を見ていて少しでも良いことがあったり、馬が不安なく一緒に歩いていれば、馬に微笑みかけたりして、愛撫してやり燕麦をやるのです。ただ注意することは、索馬中でも馬の勝手な行動は厳しく許さないようにしました。

右手前が出にくいことは気にしなくてもいいと思います。そのうちに出るようになるでしょう。

馬口との関係は重要です。引っぱるのは最も不可ないし、また弛めっぱなしでも駄目です適度の緊密な関係が必要であり、飛越前にはその緊張度はグーンと増大すると云われています。引き継ぎ者は、この辺までを考えて、努力して下さい。

馬は装鞍装靷して乗るものとは限っていません。寧ろもくしに索綱をつけた裸馬に乗ったときの方が、その調教できていない個所や馬の癖などがよく解かるように思います。一度試してみてください。

馬術において馬は最高の先生です。自分と馬とで実行してみて下さい。

最後に、部員は学生の一途さも結構ですが同じ位に謙虚さも兼ね備えて下さい。

次期引き継ぎ者の南部君の努力健斗を期待して止みません。

リヒト報告

南部孝一

サラブレット、栗毛、牡

入厩当初非常に気の荒い馬との前宣伝の為か、部員一同戦々恐々としていたが、昨今の様子を見るにつけどうやらその恐怖心を取り除いてくれたようである。骨格はガッシリしており、現在少々肉付きが悪いが、それでも545Kgあり、肉が付くと素晴しい体になると思う。

性質は少々神経質であり、ちょっとしたことですぐ首筋に血管を浮き出させる。また、咬癖があり、やたらと物をかじっている。（パドック内の立木をガリガリ柵をガリガリ）飛越能力はさすがに素晴しく、騎手次第で戦果の期待出来る馬である。

天龍山の報告

南部孝一

去年の8月競馬場より入厩、サラブレッド、黒鹿毛、5才、、12月いっぱいは右前肢球節部故障（競走馬時代のもの）の為休ませました。その間、ガリガリに痩せていたのを、ホンのチョットツマミ食いさせまして、やっと馬らしい体つきになりました。（飼育係にはかなりおこられましたが）、性質は非常に温和であり某女史に言わせますと、小生そっくりの人畜無害だそうでありまして、只、異うところは天竜君には甲斐性があるそうです。口の悪い部員に言わせますと、ヌケ天などと申しておるようでありますが、これは他馬との争いを好まず、相手から一発くらって後やっとヤル気をおこす所から来ているようであります。

一月より主に小栗コーチが乗られ見違えるように良くなってきました。騎乗致しますと、さすがにサラブレッドらしい悍性をみせます。外乗しましても、まだ慣れてないせいか、少々興奮は致しますが、溝でも小川でも濠でも素直に通過します。

〃カムイ伝〃

田崎拓昭

十二月から北大馬術部馬連に新規加入しましたカムイです。
「カムイ」なんてあまり気に入らなかったのですが部員諸兄のくださった名なので満足することにしています。ボクは昭和四十四年六月十七日生まれ。父はラーカスバー母はインズキーです。でもボクは競馬はキライだったのです。走らないですむ方法はないものかと思案したあげくゲイトで寝るという妙案を思いつきました。見事成功。ボクは再び牧場へ帰ることができました。ここで白井とかいう人がボクを再調教しはじめました。おまけに、アー悲しいかな！ボクは男性でなくなってしまったのです。そしてついに少しでも未来の獣医師の役にたてばと、北大獣医学部にもらわれたのです。出合いとはかくも激的なものでしょうか、そこでボクは北大馬術部を知ったのです。　以上　カムイいわく

入厩に際し「タダ」であるということであまり期待していなかったのですが、実物を見て意外と大きいのにびっくり。騎乗して二度びっくり。小栗コーチの指示をあおぎつつ小生が騎乗したのですが、一歩一歩くごとにハミの手ごたえが感じられ、重くはありましたが速歩の伸びもよく、駈歩はダイナミック。馬歴浅く新馬調教などやったことのない小生の感想は、前述のごとくでした。小栗コーチも非常に気に入られ、結局、部として入厩させることになりました。現在（三月）ではすでに速歩駈歩での障碍通過飛越を行なっていますが、拒止することはまずありません。ただ踏切飛越態勢は未だ不安定です。非常に悪いのが停止それに推進が弱いと右へと寄ってくるのが欠点といえます。

彼の血に敗けない飛越馬としたい

将来の楽しみなカムイ号です。

疾風

西村　正二郎

調教報告とは、大それています。

何が何やら訳が解らんのです。

去年の4月玉つき3歳で入厩（部費購入・全くの新馬）、近づくのも恐しいやんちゃ坊主でした。馬場に放して追うと、実に伸びやかな軽やかな美しい駈歩を見せてくれました。

堤さんが、10月まで調教に当られ、おっとりした好意的な馬に変身しました。然しおっとりは鈍重に近接し、稍々発剌さに欠けた感なきにしも非ず。9月の去勢で、いやまして彼の勢いは削がれる。事情があって10月で堤さんが降りられ、これから暫し空白状態。

2月頃から僕が騎り始めた。前へ出せないから、勢い拍車に、鞭に頼る。然し拍車も鞭も瞬間的な刺激でしかない。普遍的な合図とはなり得ない。馬が開き直ってしまえば、それっきりだ。現にその兆しが見え、日々重くなってゆく様な気がする。何でもいい、恐怖心を駆り立ててでも前へ出したい。前へ、前へ、ひたすら前へ、それだけだろう。

羊蹄号報告

桝井　明

昭和47年10月3日　入厩

十勝の山奥から小栗コーチの努力で、若々しい元気な馬が入ってきたのは、昨年の秋でした。私は用事で大阪に居て直接この田舎娘に会えませんでしたが、世間知らずのおっとりしたタイプということは聞いておりました。騎乗しましたのは10月17日からです。初めは装蹄・装勒の馴致と馬背への負重に馴らすことが重点でコーチに索いてもらいながらノタノタ歩いたり、止ったりして10分20分と次第に時間を伸ばしていく様にしました。10月21日、馬場ラチに蹄が触れた途端地面にたたきつけられてしまいました。以来日に数度の落下経験は当り前となり、首から腰のあたりまで何だか様子がおかしくなり、心配になり北大病院脳神経外科で診察を受けに行ったこともありました。何とかまだ生きているところをみると大丈夫なのでしょう。

「これが本当の新馬だ、こんな馬には二度と乗れないぞ！」とユーウツな頭をかかえて自分に言い聞かせていた訳です。初めはとにかく何でも馴致ということを常に頭に入れて乗る様にしていました。11月に入ってからも、まだ跳ねることがありましたが、人が急にバランスを崩したりしないで静かにしていると、徐々にではありますが落ち着いてきたようです。常歩であれ、速歩であれ運動を始めると共に不斉地騎乗に移り、頭を下げて歩行することに重点をおきました。初め心配したのは、人を乗せて動き回ることから足に故障が出てこないかということでした。幸いこの心配は一週間もすれば殆んどなくなりました。次に問題となったのはハミになじまず舌がハミを越えることでした。歩いている時は、時々点検してハミを舌の上に直し、エン麦を与えることにしました。一時はハミを丁度、舌の上に浮かせるようにして、ヒモでとめたこともありました。これが良かったのかどうか知りませんが舌がハミを越えているのが少なくなりハミを越していない時にはエン麦を与えて印象を良くするようにしていますと、そのうち舌を越すこともなくなりました。

その頃には、もう不斉地バンケットの常歩飛び上り、降りと速歩にての地上バーの通過を主な課題としていました。不斉地での常歩、速歩では基礎的な体力（特に四肢の筋肉づくり）をしっかりつけることを考えて、何回も方向を変えてバンケットを登ったりおりたりしました。

細々としたことはまだまだあるのですが、紙面の都合がありますので現在とこれからのことを簡単に報告します。1時間30分準備沈静に30分の割です。目標は総合馬で現在は障害練習のみ。運動は全て障害通過と結びついています。障害間に停止、後退などの操作を多く行なうようにしています。まだハミを噛んで運動するには安定していませんが、不斉地や低障害はどんどん通過しています。駈歩運動では左右回転運動を多く、時に沈静をやぶることがあり反省しています。今一番気になるのは、噛んでない状態で（噛まそうとしている状態で）どんどん運動を進めていっても

良いものか。雪が消えても運動自体に変化はないですが、恵廸裏辺での草地不斉地騎乗を多くやってみようと思っています。物件馴致については一度何らかの形で、馴れた分にはビクともしない何かに驚いたとしてもしばらくするとすぐ順応するみたい。春になったら伸び伸び外でも歩き回るつもりです。

技術的報告を書くには未熟すぎて書けませんでした。すみません。

当番日誌より

7月26日　今日は一日中トキを馬場へ放しておいた。さぞかし日焼けしたことであろう。北瓔に今朝は5人も乗った。この夏を彼女は果して越せるかどうか……？

スターライト報告

松井亮

昭和47年9月25日入厩。前肢両膝に骨折後腫瘤があるが歩行はなかった。いつまでもつかわからぬが、ともかくチーフとなった。当初よりおちつきが余りなく外へいくと常に興奮していた。7才であるし、人をのせた経験もあるのでバランスは比較的よかった。やゝ神経質である。常歩、速歩で走りまわり、回転、停止、発進、30cm程度の障害をくりかえした。馬場内では比較的おちついているようである。頭が高いのと歩様が小さいのが難点であった。障害は徐々に程度を上げ現在高さ80～100cm巾最大130～140くらいまでとんでいる。銜は古馬と同程度にうけ、その状態で頭を下げさせようとしている。左回転のとき口がやゝ硬く外へふくらむ癖がある。それから、拇に対する反応がまだ十分でない。歩様はその時によって良悪があり、まだまだである。後退も最初は2歩しか下がらず頭をぐっと上げていたのだが気長にやった結果スムーズに下がるようになっている。3月に入ってから外へいってもみちがえるほどおちつくようになったのでほっとしている。その他当然ではあるが馬に対して決して粗暴にふるまうことのないよう留意している。故障を承知で買ってきた馬だけに絶対離厩させぬよう作ってゆきたいと思っている。

離　厩　馬　の　過　去

北瓔号　　（旧名　ナグサ号）

生年月日　　昭和３０年４月２８日

産　　地　　北海道三石郡三石町

サラとの中半血　アラブ血量7.０３％

鹿毛、体高１６３cm、管囲１９cm牝

昭和３７年１１月２９日	入厩	
３９年４月１８、１９日	国体予選	
	一般自馬複合	１位
９月１２．１３日	北海道馬術大会	
	婦人小障碍飛越競技	２位
４１年７月２４日	札幌市民大会	
	パルクール・ド・シャス	１位
	小障碍飛越	２位
９月１０．１１日	北海道馬術大会兼国体予選	
	小障碍飛越競技	３位
１０月１６日	札幌自馬馬術大会	
	パルクール・ド・シャス	２位
	中障碍飛越競技	２位
４２年８月５～８日	北日本馬術大会	
	パルクール・ド・シャス	６位
	壮年障碍飛越競技	１位
９月９．１０日	北海道馬術大会兼国体予選	
	一般自馬中障碍飛越競技	２位
	婦人障碍飛越競技	２位

昭和４２年１１月8.　９日	全日本学生王座決定戦	
	パルクール・ド・シャス	１６位
４３年６月２日	札幌地区自馬大会	
	中障碍Ｂ　飛越競技	１位
	小障碍飛越競技	２位
８月１～４日	第４回北日本馬術大会	
	一般自馬標準中障碍飛越競技	１位
	一般パルクール・ド・シャス	３位
１１月１7.　１８日	第１１回全日本学生自馬大会	
４４年１１月４～１０日	全日本学生自馬馬術大会	
４５年８月２３～２６日	北日本学生馬術大会	
	婦人障碍飛越競技	６位
４６年５月１６日	対酪農定期戦	
	中障碍飛越競技	４位
４７年１２月１２日	雛　戯	

北晨号　（旧名　ミストヨサカエ号）

生年月日　昭和３５年４月２０日

産　地　浦河郡浦河町

父　ア・ア　タカトシ

母　中半血　ニュークラック

牝　軽半血　栗毛

昭和３８年１０月７日	入戯	
３９年１１月2.　３日	東北北海道学生馬術選手権	
	小障碍飛越競技	
４０年８月２８.　２９日	北海道自馬大会	

	一般自馬中障碍飛越競技	2位
	一般自馬複合飛越競技	3位
昭和40年10月25～28日	国民体育大会（岐阜）	
	中障碍飛越競技	22位
41年6月10、11日	東日本馬術大会	
	パルクール・ド・シャス	4位
42年8月10～11日	北海道自馬大会	
	中障碍飛越競技	1位
46年5月16日	対酪農大学定期戦	
	中障碍飛越競技	1位
7月30～8月3日	北日本学生馬術大会	
	総合馬術	失権
	※余力審査時ゴールした後下馬して退場したので失権と見なされたが全日本学生馬術大会の出場権は得た。　しかし（左後肢飛節内腫悪化のため出場）せず。	
8月14～15日	北海道馬術大会	
	中障碍飛越競技	10位
47年5月21日	対酪農大学定期戦	
	パルクール・ド・シャス	2位
8月12～16日	第8回北日本学生馬術大会	
	総合馬術競技　　余力審査にて棄権	
9月13日	左前肢冠骨剝離、骨折のため離厩	

北凛号　（旧名　ネルソン号）

生年月日　昭和３９年３月２０日

産　地　勇払郡早来町

父　サラ　クリノハラ

母　サラ　タカクイン

サラ　栗毛

昭和４２年９月１７日　入厩

４５年５月１７日	対酪農大学定期戦	
	中障碍飛越競技	２位
	小障碍飛越競技	２位
５月３１日	北海道自馬大会	
	小障碍飛越競技	３位
８月２３～２６日	北日本学生馬術大会出場	
４６年７月４日	北海道自馬大会複合出場	
７月３０～８月３日	北日本学生馬術大会総合出場	
４７年８月１２～１６日	北日本学生馬術大会総合出場	
１０月１５日	離　厩	

北驤号　（旧名　プレスミンポー号）

ア・ア　鹿毛

昭和４１年８月２７日　入厩

４３年８月１８日	札幌市民体育大会	
	婦人障碍飛越競技出場	
９月２２日	開道百年記念馬術大会	
	関門通過	１位　２位
４５年８月２３～２６日	北日本学生馬術大会	

	小障碍飛越競技	2位
昭和46年7月4日	北海道自馬大会複合出場	
7月30～8月3日	北日本学生馬術大会総合出場	
47年5月21日	対酪農大定期戦	
	小障碍飛越競技	3位　5位
8月12～16日	北日本学生馬術大会総合出場	
		スティーブル中途にて棄権
12月11日	離　厩	

北瑛号と私

岡田光夫

永い間馬術部のために活躍した北瑛号が遂に離厩しました。今迄多くの馬が馬術部で繁養されましたが北瑛号は本当の意味で私が選定した最初にして恐らく最後の馬であろうと思います。昭和三八年丁度八木君が主将のとき「道営競馬に居る馬を買いたいけれど見てくれないか」と頼まれ土曜日に見に行った事が昨日の様に思い出されます。

八木君に案内された厩舎には黒鹿毛の馬が馬栓棒の所から顔を出して居ました。丁度二十九年の国体で部に払い下げになった当時の白川。後の北瑛の様に感じました。調教師に話しをして外に出してもらい八木君に乗ってもらいましたが、八木君はどうも少しにぶい様だとクレームをつけますし、厩舎でも丁度東京オリンピックの近代五種の馬を購買に来ていた事と、合憎その日の競馬で今迄になく一鞍とったと云う事で値段をつり上げてきて部の予算では買えなくなってしまいました。

私の見た限りでは全体に非常にのびのびとした体型であり、頭頸も低くきっとよい練習馬になる事を確信して八木君に「あまりほしい様な顔をしてはいけない札幌から函館に持って行くなら持って行かせなさい。函館で走ってもあまり勝て相もないから、その時に値段を下げる交渉をしたらよいだろう。」と云って一応あきらめた顔をして帰ってきました。案の常函館でもよい成績が得られず部の予算で手に入り函館から貨車積みで札幌に来ました。

口幅ったいいい方ですが乗った時頭頸の高い馬は烈悍の馬が多く騎手の手の中に入らず調教に手こずる事が多いと思って居りましたので、私も八木君に「これは名馬とは云えないけれどもきっとよい練習馬になる馬だ」と申して購買をすゝめましたが案の定名伯楽八木君の調教よろしきを得て幾度か困難な故障を克服して立派な成績を収め、静かに馬術部を去って行きました。多くの人の愛惜の情に包まれて北瑛号もさぞ満足であったろうと心ひそかに今静かに思い出にふけって居ります。

北大馬術部の近年の名馬

その障碍に対する従順さ、その優しさ人なつっこさ、とにかく、よく跳んでくれた、ありがとう。なぐさよ、安らかに

部員より

北瑛号の思い出

半沢道郎

昨年の夏、北日本学生馬術大会、北海道馬術大会が帯広畜産大学の馬場で開催され、部では人馬を挙げて長期遠征をすることになった。私は在職中の最後の道大会ということで、思い出に出場しようかと考えていた。部員諸君は私の為に練習用馬が居なくなっては困るだろうとの温かい配慮で、私と最も付き合いの長い北瑛を残し、その上部員四、五名を付けて呉れた。小野さんのノースクイン、スノードンの二頭と共に静かな馬場で毎日の練習をすることになった。既に老令となって晴れの大会に出すことは無理であり、慣れない畜大の仮厩舎で暮すよりは楽であったとも考えられるが、北瑛にとっては可成り過重の運動であったと思う。

厩舎から曳き出した時の歩様は見るも気の毒な位に前肢のコズミがひどく、知らない人ならこんな馬に乗れるかと思う位であった。部員諸君に十分～十五分曳き馬で常歩をして貰ってから、乗馬して十五分位常歩と速歩で準備運動をして漸くいくらか軽快に動くようになる有様で、その後は速駈し乍ら諸運動をやったが、反抗もしないで忠実に動いて呉れた。手綱を離して落付いた駈歩をしたり、可成り強い収縮運動にも応じて実に良く動いた。障碍も低いのは何れでも心配なく飛び、最後は一m35位の三段横木にも自分から向って行く様にして平気で飛越し、以前の元気な頃と会り変りの無い様な飛び方であった。次の日に肢を傷めたり、疲労が甚しいのでは無いかと心配して行くと、案外元気でいたのには驚く程であった。帯広の大会には小野さんのスノードンを拝借して、やっとゴールすることが出来たが、これも北瑛のお蔭であった。注意して乗れば未だ練習には使える状態であったが、若い馬と入れ替えなければならないことで昨秋遂に離厩させることになった。何時も乍ら悲しく淋しい運命である。

昭和三十六年の晩秋に道営競馬に出ていたナグサ号を六万円で購入し、「北瑛」という良い名をつけて八木君が調教に当った。順調に調教が進んだが、前肢が弱く、内臓も弱く直ぐ下痢をしたり、故障が多く休んでいる方が長い位であった為に三十九年にはアキラメて廃馬の候補に挙がり、八木君が部報に詫び言を書いた程であった。然し幸に他の馬が出ることになって命拾いをした。その後も故障が多く、何度も廃馬の候補に挙げられたが、奇珍に残されて十一年間部員に愛され生き永らえた。後半の北瑛は新しい部員の良い練習馬であり諸大会に出場して優秀な成績を挙げた。仙台で開かれた第四回の北日本馬術大会には春田君が乗って中障害に優勝し、大障害にも出場した。ともかく近年の功労馬である。

私は暫々北瑛で競技会に出場して、何度か入賞することができた。昭和四十一年の北日本馬術大会が帯広の畜大で催された時に壮年中障害にも北瑛で出た。非常によく飛んで呉れて無事にゴールに入って、ホット安心したとたんに出入口の方に急に曲られて見事に落馬した、惶てゝ乗馬して退場して事無きを得たが、帯広乗倶の笹川氏と同点でバラージュをすることになった。北瑛の調子が良いので安心して障害に向った、数個に減らされた、少し高

くした障害も無過失で飛んで優勝することができ、道に自分で交渉して出して頂いた道知事賞のカップと賞状を頂戴したのは一生一代の思い出である。

翌年、北大の旧馬場で催された、道大会にも北瓔で出場したが優勝を目前にし乍ら、余りタイムを気にして、近く廻り過ぎた為に、助走不足で最終障害で急に停止され、その上落馬をして勝利を逸した、北瓔には大変相済まなかった。

強過ぎる
10数年間よくウンがついていた。
怒哀の馬
部班の時は、号令を良く聞いていました。

部員より

北晨号のこと

田崎拓昭

まずもって北晨号を離厩せざるを得なくなったことに対して、深くお詫び申し上げます。離厩に至るまでの北晨について思いつくまゝに書いてみました。

北晨は、通常より飛節内腫の為か練習開始後しばらく跛行したり、又速歩の伸びが悪くすぐに駈歩になってしまうなどの点が目立っていたのですが、遠征貨車積もせまった七月十九日、総合馬術競技を想定して北大構内に3Km程の野外騎乗コースを設定、走行しました。草地・不整地が多くスピードの調節が肝要であることを痛感したのですが、翌日軽い跛行、しかしながら特別熱感はなく、飛節管にも異常は発見されなかった。余力審査のつもりで少々冒険とは思いながらも簡単な経路走向を試みる。以後跛行がみられ、七月二十四日帯広へ出発するまで馬休にしたら常歩騎乗に限ったりした。帯広へ着いてからも、軽い跛行はありましたが試合も近いある日思いきって普通の運動つまり速歩・駈歩を十分やり障害飛越をも試みてみました。H100W100程度の平行にて拒否され数回くり返しても満足な飛越が得られずついつい運動量が多くなってしまった。翌日明らかに跛行、熱感は顕著でなくこの時左前肢蹄冠部やゝ上の両側に圧痛のあるのを発見、しかしながら骨瘤ではない。後でわかったのですが、多分この時すでに、骨折

に関する何かが進行していたのではないでしょうか。その時点で自分には跛行の原因が何か全く見当がつかず、馬を休ませ冷湿布のみを根気よく続けました。跛行はしだいに軽減してはきましたが、満足な回復をみないうちに試合の日がきてしまいました。調教状況はともかく馬体状態から判断して試合に出るべきではなかったのです。北日本学生馬術大会における二走行の中障碍、三審査のある総合競技これらすべてに出場することが不可能ならば、入賞の可能性の強い方一つにしぼろうと考え中障碍を捨てました。逆だとは思いましたが先日の障碍拒否がちらつき逃げてしまったのです。

とにかく事実経過だけを述べますと、三日目八月六日午前中の調教審査を終え、午後の耐久審査、前日迄引き運動のみをやっていたのですから馬は興奮ぎみでした。前半2Km程は障害少なく草地の疾走でしたが、スピードのコントロールができず馬はすごいスピードで走りました。障害前はともかくあえて抑えることはやりませんでした。後半、急回転・不整地・登降坂・川・溝・林の中など変化に富むコースでしたがこゝでの沈静が極めて不十分、馬は突走っていきました。残り障碍3〜4個距離にして1Km弱になったころ晨はいくら伸ばそうとしても全く伸びません。ただ惰性のようにゆっくりした駈歩をするだけでした。跛行を感じだしたのは最終障碍の手前の直線コース走行中でした。「棄権」自分にはどうしてもできませんでした。何が何でもという気持ちで最終障碍へ晨は飛越するというよりも障碍にとび込んでいったという方が正しい様な格好で通過、終了後引き運動もそこそこに馬房へ入れたのですがすぐ横臥してしまった。起立するようになったのは翌々日でした。すごい跛行である。球節沈下が著しい。あらゆる対症療法を施す。もし腱断裂ならば予後不良といわれたが、北海道馬術大会の終わった八月二十日馬運車にて札幌へ運ぶ。翌日北大獣医でレントゲン撮影を行なう。典型的剝離骨折との診断左前肢両側浅屈腱付着部である。腱の激伸・腱付着部骨の異常が原因であり、つまるところ不整地での過度のスピード、急回転ということになろう。半年もすれば運動できるようになるかも知れないとは言われたが、熟考の上九月十三日離厩。

後日一先輩に、「馬を知らない」と言われた。言うべきことばがなかった。結局自分の決断力のなさが晨を殺してしまった。ということなのである。愛馬精神。空々しくてしかたがなかった。大事な時期に大事な馬を失なってしまって、来期を目ざす現役部員諸兄にすまないと思っています。

北大の厲人(?)もいまはいない。
女らし過ぎる。否、否。　シンコ女史タル馬。
神経繊細 or 過敏
暑かった帯広の夏、いっしょうけんめい、いっしょうけんめい
太くなった足を冷やしてやりました。
けれども……最後の雄姿しかと見とどけた。

北凛号に関する総括

松井　亮

三年目の終りから離厩するまで一貫して乗ったわけではないが一応経過をふり返ってみたい。

ひきつぎが急だったので前のことはよくわからないが、その時は口が硬く、鈍く、鞭に反抗的だった。それで、発進の鞭をあてると反抗し、口が硬いのでそれまでの運動は馬場を大きく走りまわるだけであった。

小栗コーチの指示の回転運動を数多くやったのがよくて口はかなり軟かくなった。鞭に対する反抗も乗っているうちになくなってきた。ただ難点は逃癖であった。これは人間が十分緊張を与えなかったこと、準備運動不足なども一因となっている。馬自身の性質も勿論あったが、止まるようになったのは、逃癖にもとづくものであり、騎手の推進不足にもよる。

四年目の末ごろから約10ケ月殆んど乗ってないがその間にかなり馬は鈍くなった。放っておけばそうなるのは当然である。どこえ行っても無類のおちつきがあるのは結構だが、鞭を使っても動かぬというのは困ったことであった。その後ずい分のりこんだのであるが、浅念ながら以前の軽快な歩様を回復することはついにできなかった。

膠着癖がひどくなっていたのは恐らく騎手がなめられていたからであろう。私が現役時代にのり始めたときは鈍くて反抗的だったので強い鞭で動かした。そして、そうするうちに軽い鞭で済むようになった。

一般に軽い鞭で動くようにしてゆくのが正道かも知れない。しかし、鞭があたれば頭をあげて反抗するような馬にいつまでも軽い鞭で対応して馬が動くはずがない反抗を助長するだけである。どういう鞭であれ馬が動いたという事実のつみかさねがなければ馬はかわってゆくまい。

先人の言葉にもあるように、動物といえども弱い者には従わない。勿論あらゆる場合に力をもっておさえつけることは良くない。しかし、馬術は人と馬との協調ではなく人が馬という動物を操るものである以上は馬になめられぬだけの備えが必要である。

どういう馬でも激しい運動をする場合や大きな障害をとぶ場合には、それ相当の緊張を与えてやらねばならない。特にこういうボンヤリした馬においてはなおさらである。然るにそれだけの緊張を与えることのできぬ騎手が大きな障害に向けることは明らかに誤りである。

理屈はどうあれ、鈍い馬にのるには絶対的に鞭力は必要である。最近女性の騎手がかなり増えているが、鈍重な馬にのって活躍している女性にはついぞお目にかかったことがない。

極端なことをいえば軍隊において、いかに人馬間の信頼が強かろうと、ここをとばねば殺されるというときには誰だって満身の力をこめて鞭をぶちこむであろう。

離厩まぎわに、使えもせぬ大勒を装したのはより高い緊張を作りだすためであり、強引に指示に従わせるためであった。結果と

して確かに緊張は増したが、膠着癖は相かわらずであった。鞭を使っても動かぬ程悪くなっていたのであるから、治らぬのは当然かも知れない。
この馬の反抗癖の原因はよくわからない。ただ、まともに競馬ができなかったというから競争馬時代にいやなことがあったのかも知れない。競馬シーズンに競馬場へ入ると非常に興奮して帰りたがることからもそうではないかと思われる。
一頭の馬に3年も5年もかけることは許されない現状からして私の至らなかった原因は、あの馬に十分な緊張を与えるだけの鞭、更に大きくいえば力量がなかったということになると思う。
最後に、調教にあたる際、先にその馬を調教した人がどのようにやってきたのか、どこがよくてどこが悪かったのかをよく吟味して先人より大きな成果を得るべく努力せねばならない。二年や三年の経験しかない者がひとりよがりになることは愚かであるばかりか部の発展を妨げるものである。

いとしのネルよあまり人を困らせるなよ
ネルの目はいつもかわいかったなあ
僕が入部して最初に乗った馬。大きくて格好
よかったなあ

いじけ過ぎる
難解な馬　柔軟ナル馬
いやだけどよかった。

当番日誌より

8月5日　衛生研のちかくでいい草があった。時間が少ないのにとても効率よく草刈りができた。きっと明日は草を刈らずにすむであろう。
8月6日　今日は刈らずにすむというはかない希望は残念ながらダメ、やっぱり草刈りは必要だった。

夢まぼろしの如くなり

—火驢に捧ぐ

時雨がとほり過ぎた澄みわたる
大氣のなかに僕と彼は居た
萌黄の縁にあふれる程に雨露を
湛えたあやかな紅(名ーバ)馬肥を無心に
彼は食む

時折唐突に首をもたげて藻岩山
のかなたに見晴るかすやうな眼
な差しを向ける　詩人のやうに
澄んださびしい哀しい眼だった

彼は耳を歌てて空の極みを一心
に見つめていた　秋特有の吸い
込まれそうなおおぞらの高みに
何が見えると云うのだ
それでも猶ほ彼はひとみを凝ら
して鰯雲が凝集してゆく青空の

一隅を息をひそめて見つめていた

彼の眼には白日の蒼空の極みから光芒を放ちつつ落ちてゆく無数の閃光が見えたし
彼の耳には天駆ける有翼天馬(ペガソス)の羽音にも似た一種厳粛とした重音が聞えた

奥深深れきった詩人には冷たく乾いた日射しのなかにたゆたう枯葉と風響樹(ポプラ)の梢をふるはせる秋風の声とは寂寥のなかに漂う虚無であった

ややあって彼は項垂(うなだ)れた
僕は頬をなぶる秋風のなかにかすかにため息を聞いたやうに思った

驫さんと私

近森憲助

みんなから驫さんとして親しまれていた北驫号に乗りはじめたのは、去年の一月からであった。年が年だけに、色々な所に無理がかかっていたけれども、割合と今まで彼に乗ってきた皆さんがいじらずに乗られていたせいでしょうか、非常に素直ないい馬で父入厩以来、十日間原因不明の跛行で休んだ他は、今まで、一度も休まず、無事是名馬という言葉を体現した馬であった。ただ乗り手の方は、まじめな馬術部員とは、とても言えない代物で、結局は驫さんにみんな負担をかけてしまい、彼が結局離厩してしまった後もこんな愚にもつかない文章を書いて生き恥を曝している。

忘れもしない、あの八月帯広であった北日本学生のスティープルで、下見の際、少し不安であった第二障害をやっと通過できた私と驫さんは、第三旗門を通過して、採草地のはじの方を、疾走していた。あのときの何ともいえない快いはりつめた気分と、真青にぬけるような夏空と、緑の牧草と、たずなの感触を今でも私ははっきりと思い出すことができる。突然、左にすこし傾いたかと思うと、とても今まで経験したこともない横ゆれの反撞に私は一瞬どうしてよいか、何がおこったのかわからず速歩におとした。驫さんは、人間で言えばねんざのひどいやつをおこし、今思えばもっとやりようがあったように思うけれども、とにかく治療のかいもなく、跛行は残ってしまった。北大馬術部の縁の下の力持ちと言うべき彼に報いるにはあまりにもお粗末すぎる私であった。驫さんどうもこれまでありがとう。今の私にはこんなことしか言えない。

部報の誌上を借りて、これまで北驫の育成、調教されてきた皆様に対して、深くお詫び申し上げます。

驫さんよ、あなたは強かった！

じいさん、馬とは思えなかったなあ

部員より

駄馬と云われながら、桝井、西村両兄の努力で、驫は、北大の名馬となりました。驫は、部員に馬術の面白さを教えました。

北驫・・・悲し過ぎる
悟りの馬
ものすごく恐い目をしていた時もありましたねえ。

前略　特に彼が私を車に載せて引いていってくれる時に私はつくづく彼に感心する。私が鞭で殴りつけると、彼は足を早める。私が止れというと、ちゃんと私の車を止めてくれる。・・・中略・・・彼を見ていると、私は心配になり、恥ずかしくなり、そして可哀いそうになる。彼はやがて、その半睡状態から覚めるのではあるまいか？そして容赦なく私の地位を奪い取り私を彼の地位に追い落すのではあるまいか？彼は何を考えているのだろうか？・・・・後略・・・・

ルナール著「博物誌」　より

思い出

桝井　明

「無事是名馬也」という言葉があります。私の知る北驫号は、この意味で我が馬術部に於ける名馬であったと思います。私が入部した頃はもう十二～三歳くらいで北瓔号とほぼ同じくらい老いていました。それでも瓔よりは丈夫で若そうでした。昨秋、相前後して天馬となったのは因縁かも知れません。彼についての思い出は私が二年生の秋（今から四年前になると思いますが）当時の太田新主将からチーフ（と云っても手入れ責任者みたいでしたが）を命ぜられて以後、三年生の秋までの約一年間にほぼ集約せられています。当時は一頭の馬の責任を任されたということで、何か嬉しい反面、不安でたまりませんでした。繋養馬としては、新馬に力・雄・凛、現役馬として瓔・晨・翔・彗・練習専門に驫とルイシーが居ました。驫君はいつも下級生の良き教師として、踏み台となって黙々と耐えるが如く馬場の中を、大学構内を駈けていました。彼の事を語り出すと何故か、いじらしさが先に立って他馬にはみられない、愛着を感ぜずには居られなくなります。

夏、現役の馬が遠征に出かけた後、ジリジリ照りつける日ざしの中で、居残組下級生の面倒を独りでみていました。冬、故障や風邪ひき馬の分まで下手な下級生を駒せてはく息が白く、凍る道路をハーハー云いながら、走っていました。春、どっと押し寄せる

新入部員を次から次へと老いの背に乗せてやりました。秋、天高く肥ゆる処か夏バテ気味でした。試合疲れの遠征馬が休んでいても、バテた体を引きずって次第の部員の練習に頑張りました。

一年中息つく暇もない程彼は練習に参加しました。それでも人の眼はやはり試合で活躍する馬の方を向いてしまいます。私が今でもいじらしさを感じるのはこういうことがあったからなのだろうと思います。

とても利口でした。そのためか無茶な騎手には頑固な処をみせました。下手な騎手には身の不安を感じたのか自分の意のままに動いたこともありました。これといった技術もなかった当時の私が彼のチーフとして、一体何をどうやれば良かったのか、皆目判りませんでした。「良い馬になって欲しい。」「下手でも自然馬術の原則に反したことをしなければ、良くなることは（たとえ目に見える形となって現われないにしても）有っても悪くなることはないだろう。」唯、それだけを心に念じつつ未熟ながらも、チーフとしての役目を果そうとしたように思います。私の力不足で彼の真価を発揮する処までに到りませんでしたが、彼から受けた諸々の教訓は以後の私を支えてくれました。

「技術よりも尊いものは、馬との心の触れ合いだ」ということを驃は教えてくれました。〃人と馬との心の触れ合い〃というと何かしら恰好良さそうで「俺はこいつの気持ちが伴るんだ」などと気負った様な処もありますが、往々にして自分の好意を押しつけて（この場合真の意味で好意といえるか疑問なのですが、独りよがりとでも言おうか）〃判ってくれない〃と言ったり、〃信じていたのに〃ということもありました。彼も生き物、嬉しい時もあれば寂しい時もあったのでしょう。まるで他人と接するような気になってみると、今度は〃やっぱ、お前は馬だった〃なんてことにもなりました。

勝手な想像をめぐらせて彼を困らせたこともありました。困らせようと思ってもみなかったのですから会計に不幸な時もありました。心残りなことが一つあります。どんな小さな試合でもよかったのです、驃と共に優勝したかったことです。

馬術部の中では試合を通じて人馬の心の触れ合いをもち得る人も居るでしょう。でも、そうではなくとも、日頃の中からより強烈な絆をつくり出すことは十分に可能だと思います。学年の如何を問わず。

卒業の日も迫ってきましたが、この時点で振り返ってみて思い出を分かち合えるパートナーの持ち得たこと、そして、これからも心の中に持ち続けられるような部員であって下さい。馬術部に属したからには馬との間に乗り物以上の、試合で勝つための道具以上の関係しか見出せないのでは夢がなさ過ぎると思い出す。正直な人間は居ずとも正直でない馬は居ません何かに幻滅して独りになりたい時、馬術部員の側にはいつも清らかな心をもったパートナーがついているのではないですか。逃避するのは弱い人間だなどと気負ってみても所詮は独りで生きていけない動物なのです。

変な処に筆がいきましたが、とにかく驃は私が精神的に悩んだ時にいつも側にいた奴なのです。今ポプラ並木に来たら一面の雪景色です。でも夕日に照る白銀をみていると伸び出したばかりの青草の中で驃が独り黙々と食べている光景が、浮かんできます。雪が消えたらポプラ並木を歩いてみたいと思います。そしたら、

璦や曼や驫が走り寄って来るかも知れませんね。

驫には離厩式がなかった様です。私は大変寂しく思いました。

私と西村君とで驫の離厩式をしました。酒に涙がまじって変な味でした。驫はきっと笑っていることでしょう。「お前達、まだ下手くそだなあ。」って。

先輩寄稿

ここは、卒業生の方々からの御手紙と原稿のページです。

懐しい先輩、同輩、後輩の寄稿です。

尚、お忙しい中、多数の方々より、お便りを頂きました事、この紙面を借り厚く御礼申し上げます。

吉田賢一　昭和40年卒

拝啓　元気ですか。鮭のあがった中央ローンでひらめいたことを書いてみますが、これは多分掲載しない方がよいでしょう。

私は昨年研究室を考える所あって飛びだし、今は企画部にいます。そして仕事上最近国内外のいろいろな情報から、ローマクラブのいう、いわゆる資源の枯渇が、実際もうそう遠い未来でないことがわかってきました。例えば石油について言えば、現在のままの消費を続ければ、多分あと30年でなくなるといわれてきております。石油の大部分を輸入にたよっている日本は、石油がなくなったらどうなるでしょう。いろいろの事態が考えられますが、その中の一つに現在日本中で使われている暖房用灯油がなくなることが考えられます。最近、札幌では、昔のように石炭ストーブはなくなり、ほとんど灯油ストーブと聞いております。もし、この灯油がなくなったら、冬札幌に住めるでしょうか。私は住めないと思います。人が住まなくなるか又は極端に少くなれば、環境汚染は必ずなくなります。そうすれば多分、また中央ローンの小川に鮭がのぼってくるでしょう。この想像が、喜んでいいことなのか悲しむべきことなのか、皆さんで、当番の夜でも話してみたらと思います。小生、住所が左記に変更しました。それではさようなら。

三浦清一郎　昭和39年卒

振り返れば、みんな懐しいことばかり。多忙な部生活の中で音楽もやりたい、演劇もやりたいと己れのエネルギーにまかせて様々な友人をたずね歩いた。思えば当時の馬術部には二つの人間の型があった。いわゆる求道者と認識者である。部員の大部分は求道者であった。その中で自分は明らかに認識者であった。馬術の道に己れを埋没させて可とする求道的な生き方はどうもできなかった。当時の部がとにかくも認識者の存在を許したことは有難かった。

今はどうだろうか。求道者も認識者もその他諸々の人間を包摂しているだろうか。異端のいない集団は決して成長しない。馬術部も例外ではあるまい。

鎌田正人　昭和30年卒

落ちついて書く事も出来ませんので一ことだけ申上げます。

家族は、父、母、妻、長男（中三）、長女（中一）、次女（小六）皆元気です。女の小供二人は、スポーツ少年団で乗馬をしています。

馬術部について色々言われて居りますが、乗馬とは何か、馬とはどんな動物か、一度基本的なものを良く考えて見る研究してみることが必要と思います。巨練自得で感覚は、鍛えられたりするものではありませんか。指導の方針、進んでゆく方向、乗馬を、マクロに考える事が分る様になって欲しいと思います。非常に感覚的な乗馬を進上のあらゆる段階で科学的分子様にするのは大変な事ですが、北大馬術部の大きなテーマにして欲しいと思います。

以上

太田清澄　昭和45年卒

前略　御連絡有難とうございます。

今でも、私にとって馬術部での生活は何であったかと自問する事があります。確かに、そこに居た事で得た事も多かった。併し、そこに居たが為に自己を余りにも惨めにしてしまった事も事実であった。天秤にかけてどちらが重かっただろうか。分らない。

でも、これも又事実だった。

それは、いつでも想い出すのは馬術部での毎日だけだったと云う事も。

元気でやって下さい。

渋谷周平　昭和13年卒

我々の時代は軍馬を借りて乗ったので、乗馬ズボンと革の長靴さえあればよかったが、それとても高価なものなので文武会の中では特殊視されていたようにおもう。

土曜に月寒の連隊に練習に行くのに、帰りの電車賃が無くて、西二十丁目の下宿まで歩くことも屢々で、元気であった若い頃がなつかしまれる。親が日高でサラブレッド牧場を経営していたのと卒業後は農林省の馬牧場に就職を志していたので、乗馬は極く自然なことであり必要によったので、競技には特別な関心も無く、余り良い部員ではなかった。インターハイには仕方なく池内、佐藤（医）と出て惨敗し、現役の諸君の前で鼻を高くするようなものは何も無い。

それのお医者様。最初は近よるのに、大分抵抗を感じたもの。しかし今では、個性も見分け、能力差もいくらかわかるようになった。「人には沿ってみろ、馬には乗って見ろ、牛には触ってみろ・・・・」である。

今年は牛（丑）年、北大馬術部の確実な一歩一歩の前進を祈る。そのうち新厩舎を訪問したいと思います。

田中　力　　昭和44年卒

部員諸兄姉の今年の御健斗を祈ります。毎年部報への寄稿を頼まれながら、いつも失礼していた事をお詫びします。

「馬を牛に乗り換えた話」

小生の学生生活の4年間は馬術の技術は別として、愛馬心だけは他人に決して、ヒケはとらなかったと自負していたものでした。それが、同期の春田君に「趣味と仕事は別だ」と注告され、中央競馬会をあきらめ、雪印乳業に就職した次第（もっとも、注告した主は、中央競馬会へ就職したのだが）。

牛というのは、ヨダレを垂し、ネットリした糞をする。小生は

岡田征至　　昭和38年卒

前略

部報原稿の依頼がありましたが小生の書くものより役立つと思われるものが引越しの際でて来ましたのでコピーして送らせて戴きます。

「馬術の基礎知識」という部出版のガリ版づりです。現役の方でもっている人がいれば無駄ということになりますが。・・・・最近はこういったお便りをたびたび戴きながら失礼していますが今年は雪がとけたら、何とか乗れそうです。　敬具

山本　智　　昭和34年卒

拝啓　暖かい冬の今年、部員の皆様は毎日練習に忙しい事と存じます。私、前任校浦臼高校から此の小清水高校へ転任して来ましてはや一年が過ぎようとしています。当地には馬が多く、乗馬をするチャンスも多いと楽しみにして来たのですがまだ土地の者と知り合いになるチャンスがなく一度も馬とふれていません。今年こそはなんとか乗ってみたいと今から雪のとけるのを心待ちにしています。

今年の正月新しい部室の方へ行ってみましたら何もかも新しく立派でびっくりしました。丁度馬術練習が始まる所で久しぶりに馬に乗った学生の姿を見て、遠いすぎし日の我が青春時代を想い出しました。それに幸いなことに一緒に国体へ出場しました先輩の鎌田氏も乗馬して居られて、涙の出る程なつかしく思いました。手元にあります馬術部三十年史を時々出しては読んでいます。そろそろ四十年史か五十年史が出るのでは？と心待ちしています。

敬具

梶村哲世　　昭和47年卒

部員諸兄　お元気ですか。

部を離れて、早や一年が過ぎようとしていますが、今でも馬の事は忘れられません。

東京に来て勤めに出ていると、馬に乗るチャンスが仲々つかめないものです。僕と同じだった桝井兄が今でも馬に乗れるというのが、うらやましくてなりません。先日彼に電話をしたら、数頭いる新馬のほとんどに毎日乗っているとの事でした。でも相当疲れているようでした。小栗さんにいたれば、いわずもがなである。

昨年の夏頃から千里馬の調子がよくないと聞いていましたが、現在はいかがですか、今では彼女を新馬として扱かってくれないようですが、それでは、あのチビチャンかわいそうだと思います。

何はともあれ、今年は是非とも全日学に団体を組める様頑張ってください。

今年も又その気になれば、東京を飛びだして、札幌へ行くかもしれません、その時はよろしく。

北大馬術部々員諸兄へ

平山常介　　昭和4年卒

拝啓　ご丁重なお便り有難うございます。

皆様の元気な活躍、たのしく、嬉んでいます。私達の時代は、同好の士の集りで、札幌の聯隊のお馬をかりて日曜や休み日に乗馬を楽しんでいました。冬の雪には反動が大きくなって、それだけに楽しみも大きく、それが春になって雪がなくなると皆んなすっかり上手に乗れるようになった、雪の馬場はよい練習になったことを思い出します。スキーなどに行きたいことを我慢して月寒迄歩いて出かけた若き日をなつかしく思います。

この頃は馬とは縁がなくなり、又こちらでは馬の姿も見なくなりました。テレビで乗馬姿を見ると、やはり楽しくなる。

皆様の益々ご発展を祈ります。

敬具

高林嬉子代　　昭和36年卒

前略

昨年七月よりジャカルタえ在住しております。昭和四十九年春には帰国いたしますので、留守中何かと御世話様かけると存じますがよろしく御願い申し上げます。

一月十九日

斉藤善一　　昭和26年卒

別便

自馬と貸与馬

時々、札幌に戻るので、その度に馬場に行ってみました。施設

にも恵まれ、益々発展の様子、何よりです。部に対する意見という訳でもありませんが、馬術界は自馬競技中心で、貸与馬競技廃止、あるいは軽視の方向にある事を苦々しく思っていますので、この問題について、私見をのべてみます。貸与馬競技は馬術にあらず、などと極言する人もおりますが、それでは、馬術的な意味で、「自馬競技とは何か」を考えてみたいと思います。みづから見つけ出した馬を、自分で永年調教し、競技会で、その成果を披れきする事が自馬競技で、こうして優勝することは、馬乗りにとって最高の喜びでしょう。いい馬（障碍馬について言うならば、とぶ事の好きな馬）を探し求める事が勝負どころですから、馬の資質を見抜く力と資金がないといけないし、馬の気持に合わせて長期間調教を続ける忍耐力、競技場で能力を充分に発揮させるための技術も伴なわなければなりません。まさに、馬術の真髄とも言うべきものが自馬競技でありましょう。しかしながら、こういう意味で、真に自馬といえる馬に乗って競技に出ている選手は、沢山な参加者のうちの、ごく一部にすぎない事は残念です。大部分の選手は、たまたま、自分の属する団体が所有する馬に乗って自馬競技という名の種目に出場しているから、自馬選手といわれるだけに過ぎません。これは、経済事情からみても、中間過程として、やむを得ないと思いますが、貸与馬競技の試乗期間が非常に長いのと同じ状況下にありながら、貸与馬競技をけいべつする事は、身の程知らずというべきでしょう。

貸与馬競技は、馬を知るために最もよい競技だと思います。出来るだけ多くの馬に乗り、いろいろなくせを知るのは、馬を理解する上にもっとも大切な事で、すぐれた自馬選手となるための基礎訓練だと思います。この基礎が出来ていないと、ただ、理想にはしり、理論に溺れ、あまりいい事はないと思います。大学では4年間という限られた期間に、一通りの事を経験する必要がありますから、たとえ短期間でも、自馬に相当する馬を受持って、自分の思う様に仕込んでみるのも必要ですが、部全体としては、貸与馬競技も重要な行事として、大切に育てて欲しいと思います。

武田朝男　　昭和8年卒

無題

昨年十一月十九日、東京馬事公苑での競技会の折、主将以下選手および部員諸君と午前午后に亘って親しく談話できたあの機会は、私の四十七年度の愉しい収獲の第一です。その場にはオリンピックに出た千葉君も顔を出してくれて、近代馬術のこゝろとか水準について、在仏時代の経験やそれに続く諸々の体験を基に、いろいろの話をし、現在自分の信念にもなりつゝあるようなあるものに至るまで惜しみなく披瀝してくれるものだから、私も吸い込まれて、若者に返って了い、時の経つのも忘れたことでした。そして、その合い間、合い間に、現役の諸君から大学での今の持

馬、厩舎、馬場、飼養管理、飼料代、宿泊当番、練習の方法、予算やそれを補うためのアルバイトの実態についてまでを、細々と聴くにつれ、のんびりしていた自分達の昔と今の四囲環境の差、時代の相違などを考え、今の部員諸君のマネははたして自分達はできたであろうかしら？　など思ったりしました。学校を出た当初、東京で役所に勤めた頃は、初めての職場での自然の制約もあり馬と語るてな機会から遠うのいたが、すると馬への憧憬や馬の幻想が募り、親から結婚の話が出ても貧馬にもせよ、一頭を持つ身になるまではいかで！などと云って、或は時間稼ぎみたいなことをしたこともあるけれども、いざ愈々結婚をして見ると、馬房よりは矢張り女房の方がいゝと思いなどし、そうしているうちに人生女房に限るなどとぬかすようになるのですから、人間のその時々の情勢など、余りあてにはならぬようです。とは云うものゝ今でも新聞でも雑誌でも競馬や曲馬は別として、馬術、乗馬その他馬にまつわる記事には妙に目が早いことは自認するので、北大乗馬会に初まって全馬術部にかけて六年の札幌での学生生活とその想出が、どうやら私の一生につきまとうことになるのかも知れません。

最後に同期生半沢道郎君の馬術部への貢献を讃え学会その他での上京を、東京で待ち伏せしていることを予告して置きます。

一九七三・一・一七

荒木伸也

賀状ありがとうございました。

部報については何も意見ありません。去年の流鏑馬の記事送ります。二の射手（写真）でした。大光水産を昨年で退社しました。鎌倉の住所変りません。今年中頃より乗船するつもりです。

御発展を祈ります。

一月二十三日

東京新聞サンデー版より

昭和47年10月22日

ことしの二の射手（二番手）に三年目で抜てきされた会社員荒木伸也さん（　）「熊本にいた子供時代から好きでたまらず、月給半減を覚悟でトロール船を降りた。アパートも鎌倉にした。精神と肉体の緊張感ー動中静を求める感じが何ともいえない」

千田哲生　　昭和31年卒

乗馬随想

学生時代から愛用していた思い出の長靴であったが、昨年の9月の或る朝、馬から降りた途端に、遂に底を踏み抜いてしまった。と言えば聞こえが良いが真相は以下のとおりである。

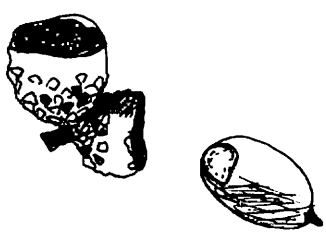
その朝珍しく、3人の子供達が、生れて始めて親父の乗馬姿を見ようと、連れだってついて来たのであった。その日は、雨天続きで久し振り運動にひき出されたせいか馬が馬鹿に張っていた。おまけに、その朝も天気がパッとしなかったせいか、何時もの仲間も来ず私1人の乗馬であった。3人の子供達は、親父の腕を過信しているのか、馬の恐さを知らないのか、柵の無い草原で乗っている親父の馬の前後にぴったりくっついてまわり、馬がはねるとわいわい騒ぐので危険この上もない。反抗する馬が子供に突っ込みそうになったので、飛び降りて足を踏んばった途端に底を踏み抜いてしまったわけだ。19年程もはき古した靴であったから無理もなかろう。が子供達にしてみれば、何が何だかわからないうちに気がついて見たら親父が地面に降り立っており、しかも靴の底を踏み抜いて呆然としているのであるから何とも間の抜けた姿と映ったことであろう。親父の株が大分下がった。

それにしても学生時代から乗馬を通して恥のかきっ放しだが、性懲りもなく足を洗おうとしない。いやそれどころか、靴が変わったのを機会にキロットも替えることにした。このキロットも、卒業と同時に作り、17年間愛用したものであるが、ドイツ式で、最近の若い人達にはダブダブで何とも無様なものと映っていたようだ。

今後も、今迄の調子で、恥をかきかき馬に乗り続けるのであろうが、靴とキロットが変わったのを機会に気分も新たにマイペースで乗馬を楽しんで行きたいものだ。

当番日誌より

9月3日　飼料庫完成。かしわ手と酒で祝う。



〃あの頃の馬たち〃

同好会幹事　佐合義弘

こゝは元北満洲、ソ満国境に程近い伊拉哈訓練所、私は第五次義勇隊開拓団の一員として太平洋戦争たけなわなりし昭和十六年の四月に祖国日本をあとにした。私達の伊拉哈訓練所の位置は、黒竜江の上流にある「黒河」の町と「ハルビン」から北に向う「チチハル」の丁度中間とも云える所だった。気候は典型的な大陸性気候、三寒四暖の差が非常にはっきりしていた。しかし、こゝは夏でも凍っている永久凍冷層があった。だから井戸は年中氷がついていた。その訓練所について二ケ月、私達は十頭の日本馬と十頭の中国馬迎えた、中隊三百余名の中から一頭に二名の馬当番が選ばれた。私もその一人として「初浪」と云う馬をあてられた。しかし、この馬、右の後腿を輸送中にけられてしかも化膿していてもうこれは廃馬かと思われる様な状態だった。それでも毎日傷の手当をしたかいがあって日毎に回復しとうとう完治してしまった。私達の訓練所は全満洲一寒いところとされていた。私がそこにいる間一番寒かったのは零下五十四度が最低気温だった。こんな日は寒いと云うよりは痛いと云った方が適切な表現かも知れない。こんな寒さの時でも丘の上の泉からは水がこんこんと湧きでていた。私達は毎日三回この泉まで水飼いに馬を連れていくのだ。厩舎から約一Kぐらいはなれているので雨や風の日、特に吹雪の時はつらい仕事だった。もちろん人間もさる事ながら馬達も大変だったに違いない、しかし、この水飼も春になると実に楽しい思い出だった。この丘の上には全満洲の義勇隊の犠牲者を祭る「拓士魂」と云う碑が立っていて丘の斜面一ぱいにシャクヤク、ユリ、キキョウなどの草花がそれぞれ我こそはと咲き誇っていた。その斜面を馬にまたがって水飼にいく、実にのどかな風景だ。又、訓練所の前は一面の草原、そしてその向うは川と沼があった。この川辺は毎年春になると雁が来て卵をうむ、私達は農作業のひまをみて馬にのってこの雁の卵をとりに行く、二頭の馬でロープを張る、ロープで草を薙ぎながら進むと卵を抱いている雁が驚いてとびだす、私達はそのとび立った所を探す、雁は一つの巣に二十個ぐらいから多いのでは三十個ぐらいまで卵を産んである。ずいぶん雁達には申訳ない事をしたものだ。春から秋にかけては、農作業で馬達はへとへとになる、私達が最も楽しく馬と過せるのは何と云っても秋の収穫が終ってからだ、馬は作業がないから張ってくる、こんな時私達の幹部だった騎兵隊あがりの松下先生が馬の正しい乗り方、馬場馬術、障害馬術などを教えてくれる、部班運動で徹底的にしごかれる、尻の皮はむくれてくるし足は痛いし大変だった。この伊拉哈と云う所は降雪そのものはそんなに多くないが、南極のブリザードの様なものが吹きあれると雪は全く乾燥していてサラサラまるで砂と同じだ、だから吹きだまりができてくる、私達は馬で兎を追ったり雉子を追ったりした、そういえば十頭の日本馬の中に「よし」と云う牝馬がいた、この馬は実に兎を追うのがうまかった。兎をみつけたらもう手綱をはなしておけば必ず前足でやっつけたものだ。

私はこの義勇隊生活が馬と切れない縁ができた、その後私は克山農事試験場に行きこゝでも独立守備隊の馬に乗ったり試験場の馬に乗っていた。しかし義勇隊の時の様な馬と人間の関係はもうなかった。昭和三十年に馬術部の馬に乗る様になった時ミス・アップテールを見て義勇隊当時の「よし」と瓜二つだったのに驚いた。咬みつく、蹴る、そして人を見る、全くよく似ていた。そんな事から私はアップが非常に好きだった。

←北凜号

北驟号
↓

←北瓔号

横山兄　西村兄　近森兄　田崎兄

有りし日の北晨号

卒業生観察録

今朝、晴れてＯＢの座を獲得された諸兄。
この諸兄の性癖、奇行が暴露されているページです。
卒業生の写真をご覧になりながら読んでください。
なお、観察者は現役部員です。

田崎拓昭　　獣医学部卒

47年度前期の主将を務め、そのせいか、女性に対しても人間的対等関係を保ち続けていた。しかし、彼も人の子、落ち葉が雪に隠れるころより、そのような態度も隠れ、さらに外見的にも変身し軟弱化していった。しかし、それを誰が責められようか。彼ももう23歳なのである。

生まれは鹿児島。初湯が、焼酒だったと言われる位酒に強く女に弱い。酒を飲む時は、遠慮という言葉を意識的に忘れ去り、果ては自分で注いで飲み出すのである。そして、酔うとスイカを切る癖がある。

そんな彼だが、普段は、いつも明るく元気な青年で、よく笑いよく話をされるのである。

また獣医学部であるため、馬の身体上のでき事に対し、良き理解を示され、注射、治療等に活躍をされた、重要な人である。

我が部の去年の主将である。獣医学部に籍を置きクラブでは人一倍動きまわった人でクラブにとって大きな存在の人だ。何でも一人でやるというような人で、強い意志の持ち主なのであろう。何でもやるという裏には、コロコロと変わり多情なのではないかと思われるがそれを感じさせない不思議な人物だ。いろいろな表情の混ざり合った、多情多恨な人物である。

近森憲助

獣医学部

いやらしさのなさと軟弱でない柔和さによって彼の対外的要素は造られ、よく漫画に出てくる四国男児そのものの体付きをしておられる。声を出せば大声で、笑えば豪快、眼は優しく、歌はプロ級、歩く時は2本足。

今年度は、今はもういない北驤といっても一緒でありました。夏のでき事でした。驤さんが、足を悪くした時、近森兄は、彼のそばにたたずみ、ホースを持ち、水を掛けて冷しておられました。別になんということもないような風景でしたが、その雰囲気が、近森兄がいかに驤さんをかわいがっていたか、さらには、近森兄自身をもお知えてくれたのでした。そうです、近森兄は、雰囲気の人なのです。だから、彼をほんとうに知りたいと思う人は彼の囲りの雰囲気をも理解する能力が必要なのです。そして、その能力を持つものだけが、近森兄の全貌を知り尽くせるのです。

大きな声をはりあげてどなると誰よりもその効き目は強く。うれしさのあまりに両手を胸の前でたたいて喜ぶ時には、誰よりもくずれた顔になってしまう。

ボサボサに伸びた長い髪が何時のまにか、すかっとさわやかスポーツがりになっていた。本人は、イメージチェンジとか言っていたのだが……

あまり変身したようには思えなかったが、考えるところあってか何時のまにか部室には現れなくなってしまっていた。

北驤がけがをして、しばらくしてからだろうか、もう北驤はいないのだからもう二度と部室には現れないのだろうか。

私の目に残る貴方の姿は、帯畜大でのスティープルコースの途中で足をくじいて、遠くの方から、破行して歩いてくる時の馬上の貴方、いかにも北驤にすまないと言うように大きなからだでまたがっていた。

人馬ともに、汗だらけだった。

それだけが私の目に残っています。

西村正二郎

農学部林学科

名にし負う北隼号、ボウズのチャンであった。小巻さんに見捨てられ心の寄り所を彼だけに見い出していたのかも知れない。この二人の関係相当なものであった。その息の合ったところ東京は馬事公苑でまざまざとみせつけられた。梅酒に酔ったお父あん背負って、孝行なボウズはがんばった。なにしろおやじの神経性下痢が息子にまでうつるという具合いだった。とにかく、ただ一人遠征御苦労さんと言いたい。非常に感受性が強く、はずかしがり屋である。野郎の中では、一人この紙面に書けぬ語句を発するが、いざ女性を前にすると顔がポッと赤く染まり、純情な好青年に脱皮する変な癖がある。そこがまた彼のみんなに好かれるゆえ

んかな？

愛するボウズと離れ、一時は伴侶に先立たれた老人のごとく、焦点が定まらない日々が続いていた。しかし今では、新馬調教に燃えてまた本来の冗談が部室をわかせている。現役は退ぞいたとはいえ、あと一年いや何年になるかわからんが、お世話になります。卒業後は営林所でキコリになると言う実に彼らしいではないか。

北隼に乗ってすばらしい成績を残し男を上げました。まるで本当の父子以上に、北隼をボクと呼んでかわいがっていました。彼がどんな美しい女性を見る時でも、あのボクに向ける顔には及ばないでしょう。将来お嫁さんを貰うことがあったとしたら、いい夫になるかどうかはわかりませんが、（つまり彼は惚れっぽいから）立派な父親になることは間違いなかろうと思います。

〃セントールはオレに似て女に淡白なんだ〃なんて言ってましたが、西村さんに関する限り移り気だということではないでしょうか。全日本大会が終わってから、ぬけがらのようになってしまいみんなを心配させています。でもそのうちきっと何かを見つけるだろうと思います。それは恋かもしれない、またもっと別なものかも……

明日のジョーと拝一刀と大山昇太をミックスしてミルクでブレンドしたような人。

横山豊昭

獣医学部卒

大阪のエエトコのボンと自ら称して居るのであるが、きっと大阪では生活水準が相当低いのであろう。でも彼は馬術部で只一人電気冷蔵庫を持っている人間である。こうして見ると（冷蔵庫があるかないかだけで判断を下すのだから、僕は定めし、相当悪しき所のガキであるのか？）彼のエエトコのボン説もまんざら嘘でもないのだろうか。

四年目のうちでは、一番スパッと出て行く人である。

言う人に言わせると、横山兄は外見上はしっかりしている様であるが、案外ボケーッとした所があって、大事な時に何か一本抜けているそう。

又、彼について忘れてならない事は、女性遍歴である。何せあたる所敵無し、「下手な鉄砲も数撃ちゃ当たる。」方式を採用して以来数十年、伝統を守り続けている彼である。大学に入って四年間に撃った弾の数だけでも計り知れない。だがここで笑ってはいけない。まぐれにせよけっこう当たっているようだ。

横山兄の部屋へ行くと、自称世紀の女たらしは、「俺の彼女見したるか」とか、時々変な英語を混ぜてしゃべりながら自分の写真を見せては「男前やろ。」と言ったりする。内藤洋子に似た女性が横山兄と一緒に写っていた。その女性はゲテモノ食いなのかそれとも人間は顔ではないと悟っているのか……。

書棚には2つのトロフィーと2つのたてがある。トロフィーは2つとも競馬場の緑地開きに千里馬で得たものである。今もはっきり覚えているが、千里馬が最終障碍を飛び、ゴールに入った瞬

間、見物人の爆笑。千里馬がゴールの目印のポール目がけて回し蹴り一発。ポールとは相当距離があったので空振りに終わった。あの小さな体で横山兄を乗せがんばって帰ってきた彼女の喜びの表現であったのだろうか。コンパには一升ビンをぶら下げて来てくれる人である。

現役部員

他己紹介のコーナー

部員同士の、おだて合いけなしあいのコーナーです。でも案外当を得た紹介です。

南部孝一

とにかく仕事熱心である。それには皆頭が下がる。さらに風ぼうとは似ても似つかぬ程に、異常な程に馬をかわいがる。これは人間の女性には相手にされなく、その結果で、フラストレーションの解決のためだという風説の真偽はいかに？

これでなかなか人情家でいて鋭い。流石現役部員で唯一の歳男だけある。だがヒョコヒョコ幼いことを発言する。言った矢先で「チャーラン」昔に比べて言葉数が少なくなった。悩み多き年頃来たとも思えぬが、マ、部の本当の悩みを背負って歩いている男である。「弱気にならないで孝さーん。キャー。」（ある一女子部員）

則近　彰　　三年目

ともかく男らしい、見方によってはカッコイイ人です。真面目に真剣に自分の思っていることを話せば何んでもとはいくまいが相当の線までは理解してそして行動してくれる先輩であります。「男一匹則近彰！」という感じです。男のやさしさがあります。ちょっとホメ過ぎました。こんなに誉めると馬に乗って居る時に・・・・呵鳴恐ろしい！　ともかくあまり気張らずに頑張って欲しい人です。

我を捨て、すべてを打ち込んだあるぬけた一瞬にみせるその笑顔、好む以上の何かをつかんだ自信なのだろうか、生まれる時代を誤まったか、やせ浪人、体臭とそれと一体になった素朴な方言からうかがえる。どちらかと言うと、高ゲタ、マント、うす汚れた手ぬぐい、といった風が似あう。

その後姿、少なからず淋しさを感じさせるものあり、一人で歩いている。独文、我が部の大黒柱である。

相川宗厳　　二年目

一見やくざ風、だが普段はおとなしい、静かに構えている。でも実はやっぱり・・・・。

夏休み東京に帰って再び札幌に舞いもどった時には、サングラスにアロハシャツ誰もが驚ろくようなスタイルで馬場にやってきた。こんなふざけたこともやるが、なんといっても恵廸男児、コンパの時には冷や酒を3バイあおってどなるのです。本領発揮といった所か。数あるコンパでもなかなか乱れない、やはり強いのかしら？仕事熱心である。こまごまとした仕事でもいやがらずやってくれる人である。

寮とモツラと一升酒が一番よくにあうんであります。相川さんは寝ている姿が一番いゝのです。洗練されているのです。常に寝ておられるからです。兄はどういう訳か、講義をほとんどお持ちにならない。従って、馬に乗る他は寝ているか、食っているか。そして暇をもてあましてと言うか、何と言うか、馬具備品の仕事に精を出しておられる。また、兄は荷車積みのオーソリィティでもあられる。昨年の秋には、遠く鹿児島まで実習に行ってこられた。兄の荷車積みの知識は広く深く、遠征の時、北大馬術部の勝利の一因となっているのです。話によると、兄は卒業後、運送業界で活躍なさるとか。

江口州志　二年目

一言で言ってまじめである。まじめすぎて困る点も多少あるが馬術部の異色人の一人である。何でも本気で考えてくれる人だ。いいかげんに話をするのが多い中で貴重な存在である。締める所は締める、しっかりしている。長崎という南の暖かい所から札幌に来ても、寒さにまけぬ。ストーブもつけずに勉強するという、現代まれなる勉強家。

現在は北勇号に乗り手こずっている。北勇と息の合った飛越を見られるのもまもなくのことであろう。高分子に行ってまじめで通っている彼でもコンパで酒を飲むとフニャフニャになるから面白い。酒を飲む場を心得ているというか、ここという時には真先につぶれる。まわりの人には、「悪い、悪い」とあやまるが、本人は腰がフラフラ、今度のコンパでもどんどん飲まそう。

あたたかさを感じる人である。

馬術部という特殊性の中では、時として、馬に対しての愛情が、極端に大になり、人に対しての愛がおろそかになりがちである。しかし、彼の場合、人への愛、いや、あらゆるものへの愛、いやあらゆるものへの愛が土台となり、そのやさしさが自然、馬に注がれている。じみではあるが、何が大事かをしっている人である。

裏話として、女子大生から、何かしらの申し出があり、クラブの連中から冷かされた一コマも見逃してはならない。

小田恭治　二年目

我が馬術部から恐れられている、その名も作業部長。九州男子らしく部活動は精一杯やってくれている。しかし、作業部長という役は、大変大任らしく彼はいつも心を悩ましている。でも部員にみせるあの迫力は、なかなか、頼もしいものをみせてくれるしアイデアマンでもあるから、これからも、この役を立派に果してくれるだろう。

この彼も、馬術部に入部したのは大学一年間を過ごしてからである。最初は変わり種として通っていたが、けっこういい奴である。しかし、冗談の時と真面目な時の彼の顔はさほど変わりばえがしなくて、こちらが冗談で話していると、彼は真面目らしくてすぐおこられることがある。でもその後にみせる柔和な顔をみるとやはり冗談だったのかなあと思って、わからなくなってしまう。けっこう温厚なタイプといえるのだが、時に烈火のごとくおこる時がある。まあ、それでいいのかもしれない。しかし我が馬術部二年目として、これから増々活躍してほしい彼である。尚、彼は工学部の応用化学にその籍を居いている。

馬術部らしからぬ姿である。Gパンははいていない、髪、非常に短いとにかく我々より数段清潔だろう。泣く子もだまる作業主任だが、公約通り作業が進まないと、自らの責任であるかのようにたいへん申し分けない口調になる。聞いている方が申し分けないくらいだ。当番で部室に泊まるとまじめくさった顔をしてお化

けの話を聞かせてくれる、真に迫まっている。よくコンパになるとはずかしそうな小声で歌うがおそらく音痴であろう。軍歌狂である。故郷が九洲だそうでちょっとやそっとでは札幌から腰をあげる気配がない。今年も越冬隊で部屋に残った彼はテレビチャンネル部長である。正月中、小田様々であった。

一口にいって、どこまで信じていいものやら迷う人だが、これからの部を背負う人として、泣く子をだまらせる作業バンバンやってもらいたい。

景山博文　二年目

「穏」「緩」この二字が彼のすべてを表わしている。この二字がなければ、彼は生きられず、また、彼がいなければ、この二字も存在しなかったであろう。彼は、中国文学を専攻し時代の先端を走る男である。また、愛馬デコに乗り走る男である。しかし、他のことでは走らない男である。だが、彼はのろまではないし、にぶくもない。あくまでも彼は、「穏」「緩」なのである。

寮生としてその名も高きこの人は、言葉数も少なく、人に接してはあたかもソフアーの如く、事に当っては「めんどくせえや」中国文学に志し、毛沢東に傾斜し・・・とは本人の弁。読んでか読まずか本の数だけは多い、恵廸寮では、恵廸睡魔の異名をとる。とにかく良く寝る。

最近は出ていた腹もいくらかひっこんだと喜んでいる。東京は中野の出身、この馬術部の中にあって清潔な人物である。どこかしまっている様でしまっていない様で、ふてぶてしい言葉もこの人が言うとふてぶてしくならないから世の中不思議。北秀号に乗り毎日闘かっております。

佐伯久美子　二年目

昨年の部報に馬術部の紅一点となってしまったと書いてあったが、亦々新入部員がワサーッと入った為紅一点でなくなってしまったことは、良いことか悪いことか知る人ぞ知ることである。彼女は母親似か気が強いというか、女の意地があると言おうか（彼女の母親は相当の女傑らしい）、そういうところがある反面、かなりそそっかしいところもある様だ。まあ兎に角よく続くものである。馬にも乗らないで当番その他雑務のみで、このあたりは女の意地という様なものがひしひしと感じられる。（本人に言わせればそんなことはないと言うかも知れないが）・・・・

意地意地と書いたが、実際見てみればそれ程のことはないのであって、伸び伸びとした実に女らしいおしとやかな（部室にスカートをはいてくる）御嬢さんである。

小忠実な体をちょこちょこ動かし我等部室のお母ちゃん、四国の女は亭主をぐうたらにするとは良く言ったもの、おのずか満ち溢れ出る母性本能に魅せられる男性も多々有りて後を断たず、誠実な彼女としては心の悩ます事多し。
酒の席での泣き上戸に手をこまねいた部員も少なからず、然し泣かれつつも相手をした後にその涙の因を然と知る者皆無なり、摩訶不思議。

柴田　好　　二年目

マネージャーとしてピッタリの人だ。顔が広い。体育会役員の中ではエース的存在。マージャンも通でよく勝つ、いや負ける？まあどっちにしてもよくする。どんなことであっても、彼にたのめば、すぐにどうにかなっちゃう。頭もからだもよく動く、やり手である。彼がいて、活動がうまくいってるようなもの。（大げさ）貴重な人だ。はっきりしないのは年に関係したことばかりだとはこれいかに。

主務としてせわしなく動いている。度胸の良さというかハレンチというか、或いは気遅れを裏返した居直りか、とにかく彼の積極性にはまったく頭が下がる。学生部の憶え目出たいのはまったく彼の涙ぐましい努力のたまもの。人当りがよく（年ガ年ダカラノウ）部員をよくススキノへ連れていってくれる。行動半径の広さでは部内随一、但し体重の軽さ故か全部をカバーできず時々ドジをやらかす。が、それも御愛敬。思いやりのあるいい奴だ。
（追伸）マージャン狂い……

花谷　　二年目

他の者がいかように申せ、彼は我等日本人の心の故郷、京都出身の日本男児である。彼の手にかかって落ちない女は、この皇国日本には存在しない。ただし米国語で言う、ぶれい・ぼういではない。言うならば彼の人間性から来る当然の帰結であろう。医学部において、オランダ医学その他の医術を学びおる。産婦人科医になるか、それとも精神病医になるか詳しくは存ぜぬところであるが、日本を背負い、また我が子をも背負って立つ迷医になることは誰もが信じて疑わぬ。彼のさっそうたる馬上姿は、それを見て女ごがひきつけを起すくらいであり、障碍を飛び越すその勇姿を見るに当たりては、女ご供が衝撃死するところである。この蝦夷地において光を放つ存在である彼は我が部、いや我が皇国日本の将来をになう人物である。

人呼んで、京のぼん。服装のセンスがよく、ダンディズムに撤している。彼の全身からは、かの光源氏の芳香が漂って来るようである。泥臭い馬術部員の中にあっては異色の存在。京のぼんも学部移行後は、相当に忙しい様子。赤字財政の馬術部の財布の口を牛耳っている。愛すべき驍さんの離既は少なからずショックだったことだろう。

吉野勝之　二年目

彼は吉野竜太郎という芸名をもっているそうな。きっと竜のように勇ましく試合で暴れ回ることを夢みているらしいが、その気迫は練習中には感じられる。しかし、普段の彼の細い目をなお細くして笑う顔を一目みれば、緊張感は一べんに吹きとんでしまう。きっと彼の育ちのよさであろう。大阪は茨木の出身で、川端康成先生の後輩だとよく聞かされる。

彼は今はやりの同棲時代を馬術部で初めて実行した。と言っても相手はひげをはやした男の子。でも最近、彼とは部屋が別になったらしくて、部内ではいろんなうわさが乱れ飛んでいる。無類の麻雀好きで、雀荘にいない時は、かの幌北荘でしこしこ料理を作っている。雀で負けたら、何か彼の手料理をごちそうになるとよい。

この方は女性に対する偏見というものを、全く持ちあわせておらず、実にすなおな、人間味あふれる見解を持っておられる。しかもそれが理屈ではなく、まさに兄の内側から、奥底からあふれ出たものなのである。この既成概念にとらわれぬものの見方、又兄自身の考え方は、すべてに適用されており、それが馬術に対しどのように表わされてゆくか・・・・！

大阪人の庶民性あふれた、ずい分愉快なひとでもある。

阿部一哉　一年目

馬術部員の典型的なカジュアルウエアーである汚れたジーパンにジャンパー、長ぐつ、それにくしを入れたこともないような頭髪それらがとてもぴったりな彼。もっとも部員はみんな似合うけど。

隠れた行動力の持主である。馬の手入れ、当番、そういうことは黙ってどんどん自分でやっていく。なんとなく怠惰になりがちな時、彼のきびきびした動作を見るのはきわめて刺激的だ。男くささを感じさせる彼である。

たくましい男です。日本のチベットからやって来ました。モサモサ頭がよくにあいます。大自然を愛する男です。酒が好きで自転車旅行が好き。自転車でのひとりたびでは山のホラ穴に宿るそうです。こまかい事は無視するタイプ。だからコンパの会計掛に向いているのです。チベットから出て来ただけあって実におおらかです。話に熱中してくると、チベット語が飛び出します。しかし彼と話していると彼の少年時代の事がよく分かります。山の中を飛びまわっていたそうです。彼の本棚には探険と冒険の本がずらり。彼は好気心の強い男です。そう言えばタイプライターなんぞの練習をしているそうです。彼の所へ行くと、生協からもって来たオワンで、お茶、ミソ汁、コーヒーからお酒まで飲ましてくれます。最後に彼のテーマソング、「アフリカダ、ジャングルダアーアアアー！」

荒川尚也　一年目

チミのそのうるんだしとみ(瞳)はどんなにわだすの心をかち乱すたことでしょう。わだすの心の中だけにあなたをしまっておくのはしじょう(非常)にもったいないのでみんなに紹介すっことにすんべ。

頭のてっぺんから足のさきっちょまで、わだすが見ておどこ(男)のように見える彼は正真正銘のおどこで、ちょらかな心は彼の全身をおおい、まるで正義の味方月光仮面の生まれ変わりではないかと思わせるほどの彼の髪型チャールズ・ブロンソンのおっちゃんみたいなあのたくましい胸。こうす戸(格子戸)を開けると見える日本の古都ちょうと(京都)に生まれ育った彼は、このようにおどこの中のおどこでごぜえます。百聞は一見にしかずとかなんとか言うように、ここに彼の写真を載っけたいところですが、映倫でカットされると思い省略しますた。

筆者に言わせれば、この男はまことに不可解な男である。現役で入ったにもかかわらず、いやに悟りきった様な所を持ち合わせておったり、そうかと思うと酒を飲めば水母の様にヘニャヘニャになったり(2回に1回はこうなる)、飄々としている様でガタガタしていたりという様にこの男は全くわからないのである。何でもこの男は京都出身だそうだで、家が大文字山の麓にあるそうだが、一見して(一聞して)京都弁もしゃべらなければ、京都的情緒というものも皆無の様に思われる。この男の口から京都について聞くと、甚だ京都もイメージダウンの感をまぬがれない。(裏話もあって面白いところも多々あるが)要するにより現代子なのであろう。

石川美也子　一年目

「私が洗ってきます。」「私がやります。」「私にやらせて下さい」これらの言葉が、部室の汚れたシーツを見つけたり、ちょっとお茶が欲しかったり、何か皆がしたくないようなことがあった時、正に反射的に口から飛び出てくるのである。そればかりではない。いつもやさしそうな微笑を絶やさず、彼女の口から湧き出づる和らかな言葉は、どんな悩みある者の心をも癒してしまうのである。さらに歩く姿は、丸味のあるそしてしとやかなそう日本女性そのものといった姿なのである。

石川姉とは、「そんなふうであったらいいなあ」と思う女性なのである。

男なのでしょうか？はたまた女性なのでしょうか？首をかしげてハテナッと考えこむような人です。一週間も男だと思っていた人が居たほどですから。ともかく神秘的というか魔訶不思議な人です。男として話しても女として話しても興味深い人だと思います。今までの書き方だと透明人間ならぬ中性人間と間違えるでしょうネッ。でも本当は実に実に本当はやさしい、感傷的な年頃の女性。

尾崎康弘　一年目

現役まるだしの青少年である。人はなぜかヤクルト少年と呼ぶ。それなのに日高の合宿からだったか、煙草をすうようになった。うぶではあるが近頃やっと学生が板についてきたようである。面白い話を聞かせよう。

彼「おいらんてなんですか」

答「遊女のこと」

彼「遊女って？」

答「遊廓のホステスのこと」

彼「わかった、プレイガールですね」

てな具合いである。幼い、でも授業だけはまじめに出席する、寝てもよいからとにかく出る。ストレートでずっと行きそうである。小樽は桜陽高出、どこか道産子に似た風ぼう。

一寸見た眼には子供
二つ見た眼にも子供

誰か君と一緒に住んでいた為か、時々シロ（馬術部の犬の名）とジャレあっています。洋煙に目がなく、学帽をかぶって英国製タバコを吸っている姿は、後ろからみれば、真面目学生、前から見れば、これまた子供であります。

いや失礼、実際は小樽桜陽高の秀才である。高校時代空手部に居たそうで、身体は柔軟なので、乗馬姿は様になっています。妹

さんがとっても可愛いらしいそうで、だれか、ねらっている奴がいるとか？

加藤良子　一年目

果していかなる人物であるか明白には判らないのである。初見においては、あの巨体から発せられる聞いている方の体が一種の怠惰を覚えるようなあの異様なる甘い且つ相手にはっきりと判るようにとの配慮からかどうか、私の推測の域を脱している、あの着実に相当の時間を要する話し方により、それだけを特に取り上げるならば、あらゆる男は心に一種の意味の判らぬ動揺を感じ得ないのです。こゝで誤解してならないのは、声だけを取り上げるならばと言うことなのです。つまり、彼女は、私供の考えも及ばぬ崇高なる域に達しているのか、はたまたこれも考えも及ばぬ低い域にいるのか判らぬような神秘の女性なのであります。これに付け加え、彼女がいかに神秘の境地にいるかの実例を上げると、北武の手入れの折前かきを見て「この人跳るな！」と言ったのは彼女のいかに崇高かという部分をまざまざと私共に感じさせたのである。私共も彼女のごとく馬を人と心の底から感じられるような深い境地に達したいものです。

我が馬術部女勇姿六人のうちの一人。さらに、大学生活一年を過ごし、我が部に入部した変わり種三人のうちの一人である。出身地は青森。東北人らしい忍耐強いのかどうかはよく知らないがいつ見てものんびりとやっているみたいである。彼女と話していても、ゆったりとしている。人が聞けばこのせわしい世の中で、彼女は生活できるのだろうかと思うぐらいである。それでも、立派に今まで生きてきたのだし、なにか大物的存在を感じさせる。これは思いすごしかなあ。これと似あって、体の方もゆったりという感じをもたせる。女性の方であるからにして、身体のことをいうのは失礼に当たるかもしれんが、我が部に存在する馬である北武号とそっくりであるというのは周知のことであろう。

現在、文学部の英文学科にその籍をおいているが、まだその才能を我が部で示してくれたことはない。（まあ、我が部は、ほとんど英語とは縁が薄いのではあるが）、しかし、これからも、のんびりとしっかりとがんばってほしい人物である。

阪上泉　一年目

若いのに全治三ケ月の胃潰瘍の診断を受け、正月に東京に帰って、何のこたあない一笑に伏せられデングリ返って「ヤー皆さん」と言いながら帰札し、少女コミック出演の麗人から「色が白くなりましたネ」と言われてにこらしげに鼻の下をのばし、それでも不安

に驅られて「女の由来。」というような本を読み、ますます不安を募る一方の磊落でデリケートな寂しがり屋の外見どうみても東京人らしくない東京人らしくない東京人の一人。

東京は秋川高校出身の一見雪男かと思われるようなゴツイ男迫力のある人物だが不器用である。おっとりとしたというのではなくゴツイのだ、自分の信ずることを思い悩んで考え込むというより体でぶつかっていく方が得意そうで、やることは雑でこまかい所がないがみていてうれしくなる様な人物である。反面気の小さい所があり人間味深いが酒とタバコが強く飲みすぎて体をこわしたというおまけつき。

笑っている児を泣かしてしまうような凄惨さと言うか凄味と言うか、とにかく人をして一廉の人物たる印象を思わせる男である。馬格の小さな馬に乗った姿はあたかも驢馬を羽交締めしているようである、12月に血を吐いて入院し継母かと見違うような格好いいお母さんに連れられて深妙に東京に帰ったものの1月になるとやおら部室に顔を出し、「もう良いの」、念願の東京女子医大に入院できず良かったのか、悪かったのか、それにしても暴飲暴食を慎んでくれぐれも体を大切に。

佐藤愁一　一年目

一見坊や風。女性の母性本能を刺激するタイプ。話して見るとなかなか男ぽい男である。馬術部水産生、三羽ガラスのひとり。長髪がよくにあう。大学祭の時、ニコッと笑って女の子にチケットを売りさばいた。部員の中では一番馬臭くない男。体育会の仕事に忙しい。

細身に長髪、眼鏡の奥なるつぶらな瞳、そのなよやかなる仕草しかして彼は男でござる。一年目では某兄と唯二人して北海道人をば代表せる男子なるも、その期待の重きに屈してか「ぼくウ…」なるか細き声は常に他勢の罵声にて掻き消し飛びちらされ、鳴々弱肉強食殺伐たるこのクラブでは彼は何時まで存命成るや、我心配なり。

柴沼俊　一年目

黒い顔に大きな目がギョロッ。短い髪はいつもぼさぼさ。今まで一度も整髪料を使った事がないとか。短かい足がよくにあう小学生のような体つき。なんとなく子供ぽい好青年。まじめな男です。料理がとくい、ニギリメシなんぞは女の子より上手。毎日、

シコシコ色んな物を作っては食っている。彼がどんなおよめさんをもらうのか楽しみ。彼は絶対に信号を無視しない。たとえ車が一台も通っていない様な道でも、赤であれば渡らない。彼はそういう人です。彼はピョンコピョンコしていて子供のようなのだが案外、大人びた考えをしているのです。

鬼の部報委員の一人、貫重面さと料理のうまさが買われています。彼のにぎったおにぎりは実においしいです。たびたび男所帯の助け舟となります。いつも静かな目つきでながめ、ぐっと落ち着いている様にも見えるが、ああ都会人の悲しさか、見える見えるなのです。ところが春になれば、オートバイを乗り回し札幌で四つ車の免許をとったという行動派でもあります。困ったことがあったら彼を頼み落しましょう。

添田昌一　一年目

朝、馬場でみるこの男の姿、いかにも馬喰のオヤジさん風である。国防色の乗馬ズボンが印象的。

そして昼さがりの午後、部室に現われるその姿は、やはり東京の人である。センスが違う。しかし彼のセンス、他人には理解できぬ不可思議なもの。「あんな服を着て・・・・」と他人は思う。しかし、彼が着れば、実に自然なのである。彼のもつ自然とは、他人には不思然な自然なのです。

東京育ちのイキなにいさん。しかしながら、彼のしゃべる言葉はどこの言葉なのか分らない。日本国中ゴチャ混ぜの感あり。恵廸寮生として一年過ごしたものの、一人レコードを聞く時間がほしいのか、三月、マンション住いへ格上げ。三流芸能人風で、夜な夜なススキノへくり出すが、スイートハートが見つからぬのが玉に傷、ホイホイと話に乗ってくるヤツだが、その話しぶりには格調高さはないけれど、地味でしかと大地を踏みしめた人生観が漂う。てな事を書くと泣いて喜ぶ。つき合いのよい男だが、酒を飲むと寝たがるのが玉にキズ。今度の部報作りでは、鬼の部報編集委員長で部員一同を震え上がらせた。腹の出だしたファイトマン。

常田和子　一年目

ピンキーの体駆と、天地真理のほほえみを持ち、北勇がめっぽう好きで、一年目では鞍数のトップ争いをし、蹴られたり、ころんだり、破行することがよくあり、そして、窓の外の雪のようなさわやかな札幌っ子です。

彼女の愛用の言葉を2つ。
「お酒飲みに行こう。ネー。お酒飲みに行こうよー。」
「チェ、チェ。」
前者は、読めばすぐわかる通り、彼女が如何に、酒豪であるかを表わし、後者は、小学生の男の子が良く使う言葉で、不満があるとすぐに連発する悪癖を示している。
そして、かわいい顔をしているものの、巨体にものをいわせ、全てを圧倒し全てを破壊する。そして、かわいさ由にか、防衛能力にも卓立した所がある。
しかし、彼女は、体は大きいが、「女の子」という感じを漂わせ、純情そうな感じを放っている。そして、彼女は、今恋をしているのである。そして、しがない私は、陰から彼女の恋の成就することを祈り続けるのである。

新野晶子　一年目

陰出さず、陽あふるる、太陽が如き、雪ん子が如き、而も、己放棄することなく・・・
具体的な　というものを所持せずして、その行動すべてが抽象化されて、といいたいところではあるが、近頃は、この晶子嬢も、さまざまな人間的症状を呈され、二次元空間を越えた世界へと、引っ越ししつつあられるらしい。このあいだも、ピザを食べつつ、思いに沈んでおられ、・・・・人間の歩むべき歴史は、くつがえされるものでは、ないようであります。

内地からくる人間の多い馬術部の中で、多くの人があこがれる土産子の一人である。いつでも笑顔を忘れない、チンチクリンのボッチャリ美人である。八方美人といった所がなきにしもあらずだが、明るい人である。
滝川高校出身の水産生、今年の夏には函館に・・・・。
馬に乗っている時はどこのイモネエチャンと思われるのですが一たび馬から下りるとアッと驚く・・・・なのです。

水野豊香　一年目

「青年団員キス暮れのミズ。」と言えば名を知らぬ者無し。産は彦根の山奥ながら、生まれついての飲んだくれ。母親泣かせの極道なれど尚更愛しい親の情。呼鳴親の心子知らず。旅に出ては北の彼方を眺めつつ見上げた空に一粒の可憐な星が輝いて、麻丘めぐみかめぐみが星か、心にゃいつも温い涙がキラリ光ってる。好もしくも優しき青年よ、しっかり勉強せえよ。（老婆）

先ず書かなくてはならないのはコンパにおいてであろう。そばに座った者は本当に悲劇の主人公となるほど酒乱の悪癖を発揮する。柔道をやってた彼のこと、手がつけられないのだが、普段は「テンチャン、テンチャン」と天竜山をかわいがっている男である。又、今年は彼女もいることだし、ドッペリの多い馬術部の中では、彼女のはげましに鼻の下を伸ばしながら、数少ないであろう学部移行をする優等生となる可能性もないことではない。

本村洋文　一年目

自他共に認める軟弱。しゃべるといったらお姉さまのことと、家のワン公のこと、犬が好きだそうである。誰かがケガをして寝ているというと必らず彼がチョコレートかお菓子を差し入れる。ナント優しいことか。

東京のボンボンといった感じ、だが事、馬のこととなると馬術部唯一の大学以前から馬に乗っていた人物、やはり上手なのである。

それに誰もがうらやむ180cmほめついでに、彼の長い足これが様になっている。旗持ちをした時は、ほれぼれとするほど絵になっていた。実力主義の運動部の中にあり、以前から乗っていたというハンデもこの軟弱でうまくいっているという感も強い。

我部で一番長い足の持ち主。東京の出身である事は一目で分かる。我部の東京出身者の中では唯一の都会人。しかし北海道にあこがれてやって来たとか。やさしい男である。しかし少々短気である。細い事によく気がつき、気がつき過ぎるのか少々色々な事に気がねするようだ。彼には東京に美人のお姉さんがいる。仲がよいそうで、彼はかわいい弟であるようだ。彼はよく東京へ帰るのだが、その度にたくさん土産を持ち帰って来て部員を喜ばしている。本村君、今度帰ったらお姉さんによろしく。

若松光子　一年目

ホモ・サピエンスが大嫌いという彼女。

ホモ・サピエンスらしくないホモ・サピエンスが集まった馬術部に入って、少しはホモ・サピエンスが好きになったかな。

無口なくせに、何時も世間の片隅で文句ありげに、したの方より皆をにらみつける。

そして、口をとじたままうなっている。

きっと腹の中では、言葉にならぬほど臓物が煮え繰り返っているのかもしれない。

そして彼女に一言、〃一年に二度や三度、大阪に帰っても、バチはあたらんけに。〃

「留年するにはどうすればいいんですか。」などと言う。恐ろしい事を平気で人に尋ねる人である。「女の子は留年なんかしたらいかん。」と言うと、「どうしてですか。」と突っかかるので「女の子は、はよう卒業して、お嫁さんに行けばいいんだ。」と言うと、ホッペタをブーとふくらます奇癖の持ち主。大阪弁まるだしで、よくしゃべる。またケラケラとよく笑う人。若松女史よ留年なんてしたら、恥ずかしいよ。

当番日誌より

10月7日　近藤喜十郎先輩、婚約者と来部、曰く「強い所とは、大いに接触すべきだ。

医　薬　品　卸

ITO ホシ伊藤株式会社

本　社　札幌市中央区南8条西14丁目1397番地

支　店　帯広・釧路・北見・函館・旭川
空知・室蘭・苫小牧・岩見沢・小樽

各種飼料取扱

渡　辺　商　店

TEL711－7034

―文芸蘭―

馬乗り文士

馬術だけが能じゃない。
部員の個性あふれる作品集

バカの考え

石頭優柔

現今、肌身に感ずることは、当然なことだが馬術部も変化してきたということだ。例えば、旧昔に於て、当然と思われたことや、問題への力点の置き方、強さが微妙に変化している。青年のもつ真理、理想という絶対的無償の精神的価値の堕落であるといえる面が、実際には殆んど無意味なものとして写ってくる時、別な現在の要求するもの、あるいは己の充実を目やすとするものの意味が多大なものとして迫ってくる。少くも一時期に於ける共通性（ツーといえばカーとくる一つながりの意識）に変化はおきている。

さて、わけのわからぬことをくだくだしく述べさせてもらうがこれ以後更におかしくなるのは、部報委員の所以である。

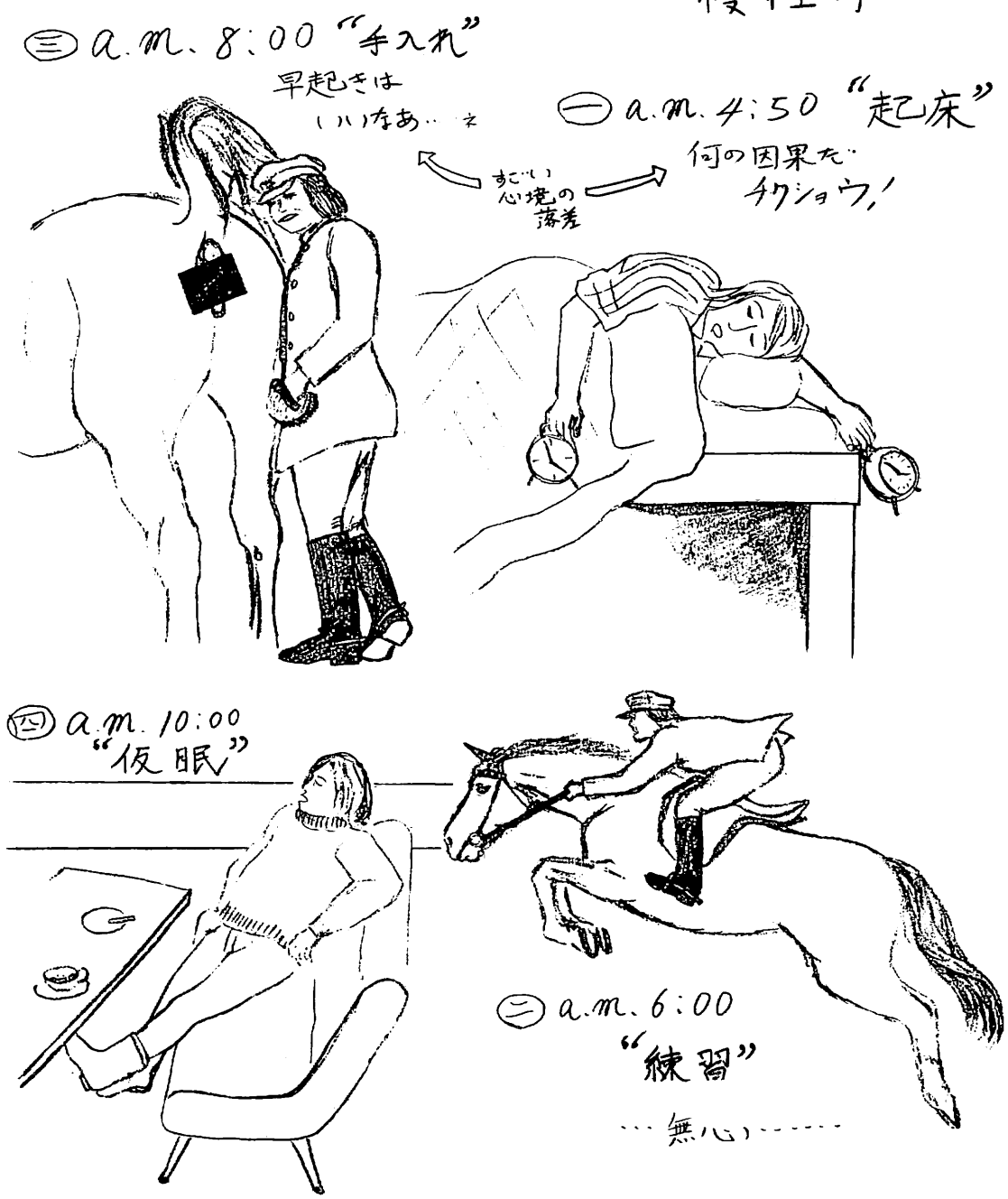
今の部は、行動の義務という一つの冷めた意識の上にある人の動きの中で、理由や意識や思想が、全き行動としてそこに生じていることに誰も気づかぬか、気づかぬふりをしている。その点は又ある立場よりすれば、実際行動のもつ反省と自負が極めて着実なふてぶてしいまでに限界線が判りきったことに到りきっており、茫漠たる意識などブチ切るか、笑いとばしてしまい得る強ジンな力を堅実な土台としていると見える。

私自身の性格心情よりすれば、（問題は実際この辺りでしかないのだ）常に（）的であろうとする所謂、王陽明や山鹿素行の思想の通俗的雰囲気と似かよったものがあって、その為には、その条件や他人の思惑等を考えることに冷めておらねばならず（順逆は判然せぬ）そのことで、如何様な形態をとろうとも何かふっきれぬ、細々とした、それでいて針のような冷めが脳髄の奥底につき刺さっていて離れない。為すことに、すがりつくように意識と思考は走りまくる。常にある具体的事柄を為さねばならぬことが目前にある限り、私の未だに青銅製の頭脳の機能では、極めて非合理であり、一つの判断をするに、他の判断の停止（エポケー）は、全くこの機に訓って感情のシ烈なまでの燃焼を呼び起こす。為に一時、この青銅製の機械を再び青銅で修理せねばならぬハメに陥る。しかしこの青銅も最近はこれでは住みづらいというようになった。彼の青ざめた意識の眼鏡から見る時の、歴史的社会的時空を忘却し絶対的個我の時空へと飛翻することの閉鎖性が、哄笑しさるある力と真ジさに、未だにその機会のとらえ方は変わらないところの憧れと、可能性を見出すことによって少くも、己に帰り来ることが少くなったというふうに変化してきたと感じるからである。

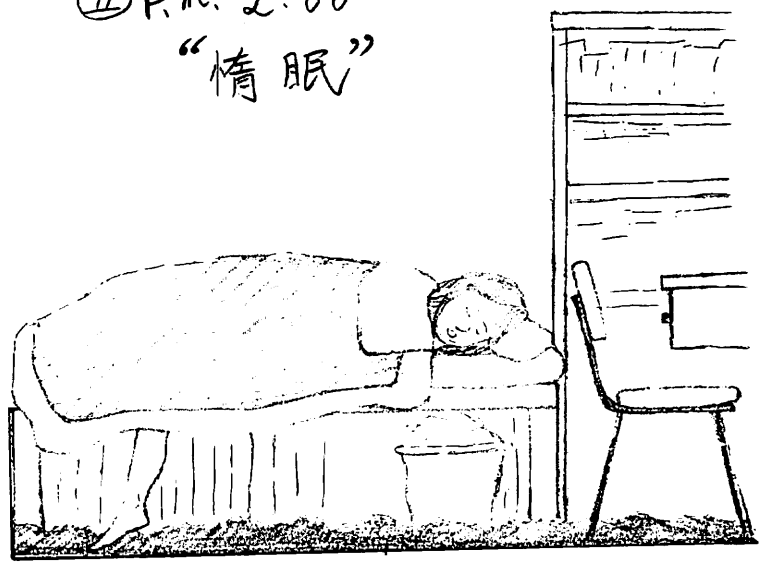
支離滅裂な文章であるけれど未だ何か足りないという感じは抜けきらぬ。しかしもうがまんしきれない。行こう。

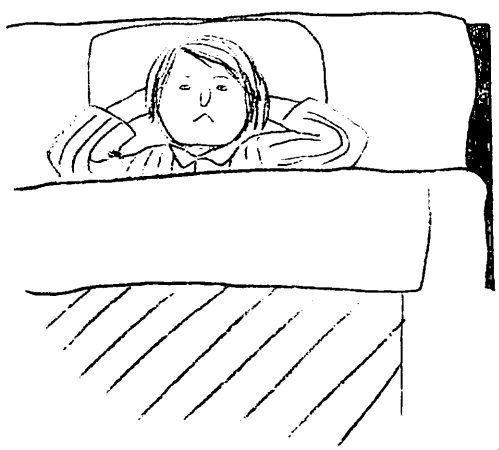
某馬術部員の(ホンノ)或る一日

慢性子



㊄ P.m. 2:00
“惰眠”





㊆ a.m. 0:30
“不眠”

なすところもなく
日は暮れる……

㊅ P.m. 5:00
“夕方の手入れ”

今晩
ボクのことを想って
眠ってネ.

生命覗き見ー「誕生」

佐伯　久美子

ここは忍路。ショロと読む。北海道小樽はずれの海岸である。私たちはここにウニの受精の実験のためにやってきた。潮の匂いの快さ。体いっぱい吸いこんでみた。

私たちの実験の犠牲となるウニが選びだされる。かんべんね。名はエゾバフンウニ。なるほど馬糞である。多少強引に卵子と精子を海水中に放出させる。さながら煙。ただただその数に圧倒される。

卵子を入れた時計皿に、スポイトで静かに精子を流し入れた。顕微鏡で見たのだが何も見えない。精子の尾も見えると思っていたこの浅ハカさ。信じられないほどの数の、何やらわからぬものが、よく見るとうごめいていた。ーもうドラマが始まっているー

ほんとうにタッチの差で生死が決まる。卵子と合体して新しい生命を生みだす精子と、受精膜のまわりでうろうろと力尽きて死んでゆく精子と。そこには勝者と敗者との残酷なほど歴然とした差がある。

そしてまた、精子をうけいれた満ちたりた卵のかたわらに、ひっそりと卵があることもある。受精膜にはねかえされ、はねかえされ、それでも卵から離れぬ精子がある。そのすぐそばにいるのに、精子の目にとまらない卵がある。

精子は走るために生まれてきたのか？生まれてきたから、生きるために走るのか？それならば死んでゆく精子はただの・・・。未受精卵もやがて、朽ちてゆく。

どこがちがっているというのだろう。単なる偶然のなせるわざか？たどりついたところにライバルが多かったか少なかったかという・・・。でも私にはやっぱり何かの個体差があるように思われてならなかった。精子の場合はある程度はっきりしている。勝者は、速かった。それが精子の能力を決めるのなら、速い精子は優秀なのだ。多くの精子をひきつけて、その中の一個体だけを選びむかえ入れ、その後も精子をはなさない卵は、もしかしたら、とびきり魅力的なのかも知れない。

してみると、そういう♂と♀とを合体させることは種族のために良いことなのかも知れない。自然が選択しているのかも知れない。

それにしても、弱いオスと魅力のないメスは哀れであった。死んでゆくしかないのだもの。

ゆっくりゆっくり両核が接近して一つになる。やっと「生命の素」ができた。大きな核がぼんやり光っている。そして時をかみしめて割れて割れて、細胞の数をふやしてゆく。

いっしょに受精した卵の中に、早くも死ぬものがある。ぽつりぽつりと死んでゆく。死んだ卵はどこかふやけて、水を濁らせ、他の卵もひきずりこむ。水を新しくしてやっても、生きているのか死んでいるのか定かでない。あまりゆっくり歩むので、生きていたことを忘れてしまった。

十二時間もたって、やっと生きていることに気がついた。ーも

う生き物ー　産毛はなんだか懸命に水を揺らせて、行動範囲を拡げてゆく。自分の力で、動いているのだ。だけど桑実胚の混沌の粒のままで、何にもなれず浮かんでいる卵もある。死んでいた。

一時間ほどで、毛のはえた団子状のものからおむすび風のものへと姿を変えた。私の眼の下で、またゆっくりと歩みはじめる。

静かに静かに細胞をよりわけて、かたよって、何かになろうとする。静と動はいつも繰り返しだ。静はやさしく時を使う。そしてある時、突如として、動に時をゆずりわたす。動は狂ったように急いで、そしてみるまに燃えつきる。

十五時間もたった今、ほとんど静止していた苦のものが、狂おしく舞っている。泡だち激しくめまぐるしく回る。私の心までつられて回る。この微小なものにして、このスピード！　どくどくと陥ちこみ、ふくれあがる。口があった。何度みてもそれは口だった。この生き物には、まだ名もない。名を得るには、ずいぶんまだ、時が要る。時の燃えかすを拾い集めるのは静の役目だ。

私の眼の下に、死骸とも言えない蛋白質のかたまりが、ぽかぽか浮かんでいる。あれからまた、死んだ。生命とは、こんなにもろい。ここまで来て、それなのに死んでゆく。

私を創った精子と卵子は、死んでゆく精子と死んでゆく卵の、恨みと羨望を受けながらいっしょになったにちがいない。そして奇跡のように私になった。私の前にも後にも母は卵を持っていた。それらはあまり違わない卵であったろうが、卵のままで死んでいった。それ以上に、信じられぬ程度の数の精子も、わが身を腐らせていったことだろう。十二の冬からずっと、私の中でも無精卵が死んでゆく。

死んでゆく彼らにはどこにも墓はない。だから、行き場のない彼らのうめきは、どこかにーホラ、例えば大気のすきまにーつまっていて、渦まいていそうな気がする。

イヤに背中が重い。

当番日誌より

10月14日　羊蹄とデコが仲良くなりました。暖かく見守ってやりましょう。

10月22日　今日HBCモーニングジャンボ録画。ビール一ダース謝礼あり。北驃号がさっそうというよりは、むしろイヤイヤ、ヨタヨタ出演。

「カク」

オキタ　ソウジ

ブホウノゲンコウノシメキリガチカイナニカカカナケレバナラナイカカナイトブホウイインガウルサイジツニカレラハウルサイカレラハマッタクオレヲクルシメルトコロガイマノオレハナニモカクキガシナイモチロンオレニモムショウニカキタクナルトキガアルカカズニイラレナクナルココロモチニナルトキガアルオレノココロニナニカタシカナモノヲカンズルニツレテオレノココロモチハイヨイヨセツジツニナツテクルシカシソノトキモマタカケナイココロノダイナルフットウノトキニハノウリニウズマクモノココロニモエルモノヲカンズルノミデスガタカタチニナラナイコレハカクニハオヨバナイデアロウスナハチカケナイトイウコトハカッコタルケイケンダイナルモノノジュウビノダンカイデアロウカクトイウコトトケイケンノフカサトハカンケイナイケイケンノジュクセイヲマタズシテイシキヲヒョウゲンニテンコウスルトキケイケンハオウオウニシテソノアユミヲトドメルノデハナイダロウカカケルコトハヨイコトデアルシカシカケナイコトハカナラズシモアクデハナイカケナイトキニカクヨリモマタホントウニカカズニイラレナイコトガナイノニカクヨリモカカナイホウガヨイコトデハナイダロウカソシテオナジカクベカラザルジョウタイニアリナガラカケナイコトノクルシミヲシラナイヨリモカケナイコトノ

ホントウノクルシミヲケイケンスルホウガマサッテイルダロウカクシテジブンハナカナカカケナイノデアル。

光陰矢の如し

江口州志

「光陰矢のごとし」この言葉がふいと頭に浮んだ。これについて別に注釈とか議論をするつもりはない。ただ、「時」が不思議だなぁと思われることである。この「時」の中に、古今の人の喜怒哀楽がつまっているような気がしてならない。

私が馬術部に入部してからもう二年近くたとうとしている。これまでにはもろもろの事があった。例を上げればきりがないが、人と人との結がりにおける悩み、個人の心の葛藤に明け暮れたような気がする。

毎朝、早く起きることがつらくて練習に来なくなる。これが続いていくと、たとえ、早く起きれても練習に出る気がしなくなる。そして、いつのまにか馬術部から縁遠くなっていくこと。又、馬術部に居ると何か他の物から自分だけとり残されていくような心の苦しみ。馬術の技術向上がみられないゆえの脱落感。私だけではあるまい。この時、私は何度も何度も、この小さな世界からのがれようと思った。しかし、現在、私はこの小さな世界に生存を残している。なんとか、乗り越えてきたのである。否、乗り越えるというよりは、苦しい時期にただまんじりとせず、部に籍を残し、なにかのきっかけで、再び、顔を出したわけである。

人は問うだろう。なぜやめなかったのか。それはいろいろあった。自分の良心。いや、それよりも、やはり、馬術部には何かがある。何か楽しいことがあると思ったからだろう。共に汗を流す、共に悩むこと。あるいは、人間関係の良さかもしれない。

過去にはやめた人は何人もいた。しかし、いいも悪いも、二度と帰ってこない「時」なのである。そして最近、よくもまあ二年間、馬術部に存在しえたなぁと思う。いろいろ心の葛藤はあった。それでも、時は動いていたのだとしみじみと思っている。

当番日誌より

10月25日

非常にいそがしい。勉強の合間をぬって当番しに来てみると、空もくもりのナミダ雨、心も晴れぬ腹いせにシロをけってはみたものの、それでもなつくは野暮な犬。鳴々、鳴々と溜息ばかりの今日この頃。

司馬

数年前、斜陽の波に抗し切れず、羽幌炭礦が閉山した。他の炭礦の例に洩れず、朝鮮人を徴用していた時代があった。炭礦は産業戦士の忠告の場と言われ、坑内で使役されている馬も軍馬と言われていたのだが、朝鮮人は、半島人と言われ、その馬よりも酷い扱いを受けていた。戦前は朝鮮人を欺き、良い働き口が日本にあると集め、九州、北海道のあちこちの炭礦に送り込んでいたが、朝鮮の農村にも、だんだんとその悲惨さが知れ渡り、強制徴用をしなければならなくなった。

そんな中で、この羽幌炭礦には自ら志願して働きに来る者が多かった。たった一頭の白い馬のせいなのである。

あるとき白い馬が現われるが匪賊に連れ去られ、村々には不幸が襲いかかる。白い馬は神の馬であり、そのもとへ馳せれば幸せを得ることができる、という伝説があった。日華事変が始まってまもなくの頃、雪の様に白い馬を首領とする野生の馬の一団が突然、出没して、そこを統治していた日本軍の厩舎を襲撃し、軍馬と一緒に逃走するという前代未聞の事件が起こった。早速、日本軍は捜索を開始したが起伏の激しい地形と村人が、その白馬だと信じ嘘の通告をしたりして探索に不利な状況であった。皇軍を半島人の神馬とやらに拡致されたという不面目なこの事件を軍は重んじ、ほぼ一個師団の全力を投入し、一ケ月程でやっとのことでこの白馬を補護した。しかし、この馬が他の馬を助けるためにおとりになって捕えられたという事実が明らかになったため、人々の神馬に対する信抑はいやましに熱烈となったのだった。

この馬を射殺すべきであるという意見も軍部で取沙汰されたが、結局見せしめのためと北海道の羽幌炭礦に送り込まれた。

他の馬を率いていたところから『司馬』と名付けられ、朝鮮人の働く切羽に配置されたのだが、半島の緑の野山を駆けていた気高いこの司馬も、トロッコを外して、坑口を出るときには炭塊にまみれ、白馬の面影も残さず痛々しい限りだった。司馬は自分の引く炭車に炭塊を積み終えると、合図なしでも歩き始め、鞭を用いる必要はまるでなかった。もっとも朝鮮人達は司馬が引かなかったなら自分達で引いただろう。この司馬の働きぶり鞭全く目覚しなかった。いたいけな司馬を見て涙ぐむ者も少くなかった。

（つづき）

当番日誌より

10月29日　コロナマークⅡTV宣伝の為馬六頭借用の儀、フロンティアのジョウバに行ってもらう。丁重に断わる。惜しかったけど練習できぬから、「オッイイジャナイカ〜」

阿保の戯言

加藤良子

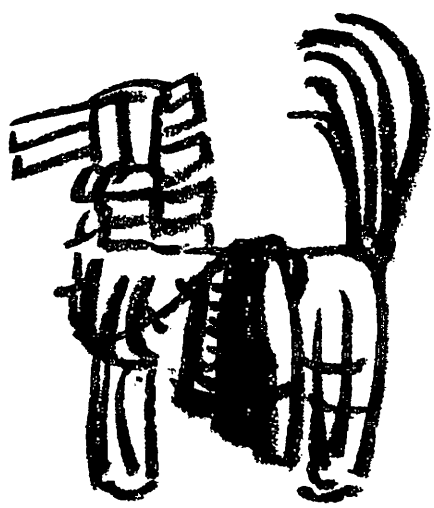
人が、離れて物事をみつめる事の重要性は、客観的にそれを受けとれるというより、その短所より長所を身にしみて感ぜれるからではないだろうか。

人の内面性を大切にしたいと思う。

友が、苦しくて、どうしようもなくなった時、――苦しい時、辛い時に、旅に出るということは、感傷的なものが含まれ、自分を甘やかしているが、そういう時は現実の生活で自らを闘わせて、もの事を考えるほうがよい。――というような著作にめぐりあって、ほっと安心した。というような事を、後日、話してくれた。いかにも彼女らしく、うれしく思った。けれども、その辛さそのものに、自分を酔わし、おのれを甘やかしの中におくことで、粉らわそうとする、人のその弱さ。感傷が入っていてもいい。人がそれに頼らざるをえなくなった時の、その〃こころ〃を大切にしたい。私には、その人間のもだえのほうが大事な事のように思える。

言葉が人を傷つけるようで、あるいは、自分の思いのほんのちょっぴりも伝えれぬ、もどかしさ故に黙り込んでしまう。それをしりながら、なぜか苦しくなるのは、どうしてかしら。

シロ、アイズビリーの絵をみてごらん。おまえも、やさしさ感じるね？



十二月

カツラカブロー

僕にとって馬術部の生活で一番辛い事は、この事は他の多くの部員諸兄も同じであるかも知れないが、朝寝床から起き上るまでの十分数間である。部室で寝ている時は、パッと起きられるのだが、我が大邸宅、幌北荘の四畳半で寝ていようものなら、あと五分と思いそれから五分後にも又、あと五分と思い、結局集合の十五分位前、寝ボケて何か口ごもりながら動き出す。

吹雪の中、顔を横に向け、しかめて、口で息をしながら部屋へ向かう。「寒いなー。寒いなー。」と一人言を言いながら何も考えずに歩く。

吹雪の静まりかける頃、明星をちらっちらっと見せながら朝焼けに雲が染まる。雪を運んできた雲故、東の空が一面に燃え上がる。その赤からは秋の夕焼の美しさは感じられず、只無気味な静寂の中で、僕は腐ったトマトを雲めがけて投げつけてやったような錯覚に陥る。腐っていても食えば良かったかなと後悔するうちに朝焼けも薄れてゆき、馬場の中の人馬がはっきり区別できる様になる。その頃私は練習に出てきてよかったなとなんとなく、心の中でつぶやくのである。

ラブレター

常田和子

はじめてあなたと会ったのは、まだ雪の深い三月でした。暖かい日差しをあびて、ものうげにじっと立たずんでいましたね。どこか遠くを見つめているようで、瞳はうつろでした。

幾日かずぎて
やっとおしゃべりするようになると、もう私の心はあなたのことでいっぱいでした。

細っそりした元気そうなからだ、すらりとのびきった足
風になびくつややかな黒髪
きりっと結んだほころぶことのない口許
長いまつげの影にきらめく大きな鳶色の瞳・・・・

どこかひよわさを感じさせ、それが女心をくすぐるのでしょうか。
でもいつもあなたは冷たいそぶり。
女の子など見向きもしない。
いつも殻に閉じこもって、心を許そうともしない。
こんなに私がいっしょうけんめいなのに、でもいつかあなたの心を捕える時が来るでしょう。

まだ尻に敷こうというつもりではないのです。ただ、いつかきっとあなたが手に入れる輝かしい栄光をつかむために、ちょっとでもいい、できる限り手だすけをしたいのです。

当番日誌より

11月11日　寮歌祭出場、くい物が悪いせいか、頭が悪くて暗唱できないせいか、声が小さい。

11月19日　万才！万才！西村兄馬事公苑を興奮のるつぼに！スティープル満点、フルゾウにてゴール。

馬についての小さな思い出と抱負

阿部一哉

ぼくが、小学校に入る頃まで、ぼくの家には馬がいた。農家だからもちろん、農耕馬です。たいていの農家がそうであったように、ぼくの家でも馬を離してしまい、牛を飼うようになった。どうしてそうなったのかわからないが、金のためだろう。その馬は、はっきりとはしないけども、鹿毛の馬で、大きくはなかったと思う。その馬が、病気かなんかして、獣医さんが来て、寝ないように、胴をつり上げたことや、大人が、駄送用の鞍を着ける動作など、ちらっちらっと覚えているが、あまりにも、馬がいることがあたりまえのことだったためか、ぼくが小さかったためか思い出がない。まして乗ったことはなかった。

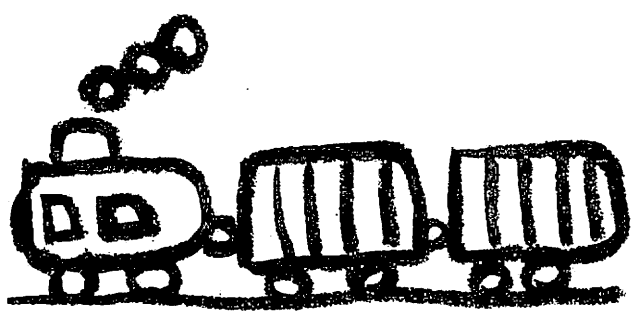
たいていの家が馬を出してしまったけれども、ぼくの前の家では、重種の馬を持っていて、山から木を出す仕事を専業にしていた。三十万とかあるときいたとき、びっくりしたものであった。また、よく近所のガキ連中が、そのうちの大きな厩に集って、寝ワラの上でプロレスごっこをしたり、鉄サイがめずらしくて、もらって帰えり、机にしまってたりした。小学校三、四年のころだ。ああそうだ、馬に関して、もう一つガキの頃の思い出がある。ぼくの村で競馬があった。もちろん競馬場がないから、田んぼでである。なんでも、すごく大っきな馬が一頭だけみんなから離れて

先にスタートしたのに、小さな馬に負けたのを見て、さまぁみろと思ったことを思い出す。そんな程度が馬につながる、ガキの頃の思い出であります。それから、今年大学に入るまで、まともに馬を見たことはありませんでした。テレビの競馬を見て、いいなぁと思うくらいのものだった。まわりに車が増えて、すっかり、ざわざわした状態になるにつれて、「馬に乗って、前に見える、堤防を思いっきり走ってみて、そのあと、北上川に行って馬に水を飲ませ、夕日の中を馬に乗って家に帰る。」というようなことをしたいなぁと思ったりするようになった。そして、北大に入学したとき、ただばくぜんと馬に乗ろうと思ったわけです。それ以来、七～八ケ月間たったが、いまだばくぜんとした状態で、それを裏書きするかのように、鞍数は少なく、へたくそな乗り方をしている。はっきりと言ってしまえば、大学生として、馬術をやるとき、いったい、どっちをとるかということになってしまう。どっぷりと馬術部にひたってしまうのはいやだし、また、勉強だけをするのもいやだし、とにかく、あいまいな状態がつづいた。いまぼくは、『出発の歌』を歌おう。とにかく、馬術というものに、とり組んでみようと考えている。ここひと月だけでもいろいろと制約されることがあったが、それでもやろう。

ぼくは、これからは、馬がまたふえていくのではないかと思っている。軍馬、農耕馬というものと別なものとして、つまり、乗馬、競馬、などのために。そっちこっちに、馬に乗ってる人がみれるならば、なんと楽しく、なることだろ。

当番日誌より

11月28日　貨車下ろし。北隼、阪上、尾崎帰札。後者二人はボロボロ、前者はピンピン。



サラニ時ヲ経、深海ノめ

若松　光之丞

実ニ深イ黒デアルノガ、
冬ノ海ノ姿デアリ、
事情説明ナクシテ、黒ノ本質ヲ持チ、
絶対ニ、ソレコソ絶対ニ、
ソノ思考ヲ止メルコトハナイ。

真ッ黒ナ、大気圏ヲ見アゲルト、
見アゲテイル間ハ、間断ナク、
ユキナルモノガ降リ続ク。

夜ノ闇ノ中、
ジット見ツメテイルト
大キナ、黒イ、
不動ナル山ノ姿ヲ、
視神経ハ、トラエ得ル。
残念ナコトニ、動カナイ。

今、同ジ様ニ、
動イテハオランノニ、
何故、山ニハナレンノカ。

停止が連続スレバ、
山ニナリウルト、信ジトルノニ、
結局何ニモヤットラン。

円山ノ黒イ影
帰レン、オノレ。

師走、22日。

当番日誌より

12月15日

この雪が今年の根雪となるであろう。昨夜よりしんしんと降り積りし雪、足跡一つない馬場で練習するのは、詩情に満ちあふれていた。

「ネル」

礼　俊

今日も腹から血をにじませながら馬繋場に帰って来た。みんなから様々な悪口を言われながらも最後まで反抗しつづけたネル。一番弱い千里馬には敗けたが、強い北騮には勝っていた「弱きを助け強きを挫く」勇者なる馬であったネル。みんなには、嫌われたが、僕にとっては、なぜか一番よく接っした馬（馬と言わない人もいるが）であった。

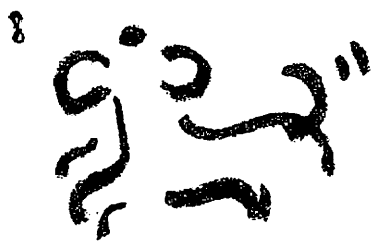
彼とのつきあいは、最初からであったように思われる。そう確か、一番最初に手入れしたのがこのネルであったように思う。それ以来彼との長くて短かいつき合いが始った訳であるが、その契機なるものもほんとうにネルが由にあるものであった。というのも、朝の手入れで、嫌われていたために、一年目がついていなかったので、僕がやるようになったからである。

しかし、ネルとの内的関係までへと築かれたのは常広においてであった。そこで毎日手入れをし、広いだれもいない所を夕方の独特の太陽の光に照らされながら二人（？）きりで一本道をいっしょに走ったり、道もない所を歩き廻ったりした。そして、そんな時の相互信頼が、それまで馬は、犬のようには親近感がわかないのではという考えを見事にひっくり返してくれたのであった。ネルは、僕にとってはそんな馬だったのである。

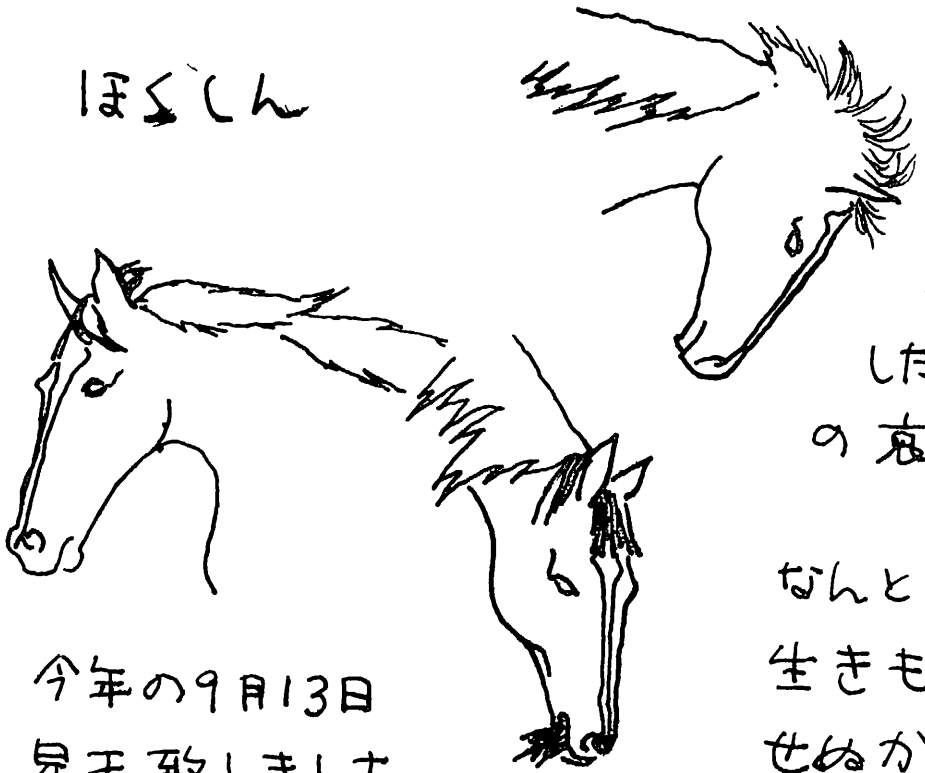
今、ネルことネルソンこと北濵は、フロンティア乗場クラブで第三の人生を送っている。そして、CMでテレビその他に出演している。今、彼は、男優なのである。

ネルのことが、このように書かれるのは、これが最初で最後かもしれない。しかし、

「いいじゃないか、ネル君」



ぼくしん



目眼を向くので
嫌われておりました
が、弱いが故
の哀しさを。

なんとも寂しい
生きものではありま
せぬか。

いしかわ

今年の9月13日
昇天致しました。

貨車積行雑話

吉野　龍太郎

朝食時、食堂にて

「西村さん、出ますかぁ。」

「うーん、出ないなぁ。」

なんとなくおかしな返事なのである。

「え？　何が出ないんです。……開会式の話ですよ。」

「なんだ、おまえ、カレー食いながらそんなこう言うから、〇〇の事かと思うた。」

明日は開会式。翌日から全日本学生馬術大会が始まる。夏の予戦で西村兄と北隼号は出場権利を獲得していた。

西村兄は試合前、神経性胃腸疾患に煩わされる。昨日から兄は、少々便秘気味だったのだ。

ここはどこだ！　眠っている間に中空をさまよっていた僕の魂は軽い深呼吸と共に体内に復帰した。おっと、あぶない。貨車の扉の隙間から、膝から下が外へ飛び出しているのではないか。おー、あぶない、あぶない。眼が覚めたら、膝から下が無かったなんて笑い話にもならない。テメェ、サッキマデ食堂デ、カレーライスヲ食ッテタンジャナイノカ。そう言えば、さっきまで東京農業大学の生協食堂に居たのである。北隼号を貨車に積み込んで桑園の駅を発ったのは、それよりも前の事である。しかし、まあ、いいではないですか。時間の経過という物は直線的に存在し得るものじゃないんだし。過去は僕の頭の中に渾然一体となって存在するのですから。だれだ！　「僕の前に道は無い、僕の後に道はできる……。」なんて詩を作った奴は。こんな詩を作るからみんな、過去というものを規則正しく並べたがるんだ。馬鹿め。例えばだ。野原に僕は一人ポツンと、たたずんでいる。その僕の頭の中には、地球誕生以前の、気の遠くなるような過去から、地球破滅後の、それでも混沌たる宇宙が存在する無限の未来まで、そして現在とが、渾然一体となって存在し得るのである。そも、時間を直線的にしか考えられないからこそ、過去は無限であり、未来も無限であるとしか表現し得ないのである。昔、地球は平面だと考えられていた頃、人間は地の果てにはそそり立つ岩壁があるだとか、海の果てには大きな滝があるだとか考えた。しかし地球はまるい玉であり、大地はその球面であるという事が無いと言う事が証明された。人間は時間についても同じような間違った解釈をしているのではないだろうか。まあ、それはそれとして、とにかく僕はその時、貨車の中に居たのです。レールの上の、むっとするような密室の中に居たのです。そして、その密室は絶え間無く振動していたのです。そして僕は又、空間という物も直線的に規則正しく並べられないものだという事をその時感じました。なぜというに、僕は確かに桑園の駅でこの密室に乗り込んだのですが、それがいつのまにか、五稜郭にあるのですから。

五稜郭に停車中、隣りの貨車からおもしろい人がやって来た。

牛を十一頭東京まで運ぶそうである。小柄だが線の濃い顔をしている。このおやじ、我々の貨車に入るなり馬の口に飛びついた。ボク（北事号の愛称）は嫌がって必死に抵抗している。するとこのおやじ意地になって、短い体でボクの口に飛びかかる。朝っぱらから大人気ない。歯を見て、「この馬は十二〜十三才だね。」だって。御苦労さん。酪農大学のダイナナホウシュウも同乗していたのだが。おやじ寝ワラの山の中でタバコをふかしながら、あぶないっちゅうに。

「この馬は、ドサンコの血が混じってるね。」

「いや。そんな事無いですよ。競馬を長くやっている人ならみんな知ってる有名な馬ですよ。純粋のサラブレッドですよ。」と、酪農大学の人。おやじ、それには耳も貸さず。

「いやぁ、そうじゃないですよ、これを純粋だと言うとったら、あんた、笑われますよ。書類の上では純粋だと言う事になっていても血統なんてのは、あてにならないんですよ。あんた。……耳立ちの具合いからしてどうもそんな気がする。」

「はぁ……。」

「純粋だいうても、昭和二十年代には、ドサンコが、日本中の馬の種つけに使われとった時期があるんやから。わしら、小せぇ時からそんな事ばっかしやって食うて来たんやから、よう知っとる。ちょっとわかった人なら、これを純粋のサラブレッドやなんて言いませんよ。書類なんて、後から細工できるんだから。牛を売る時だってそうですよ。一応書類を見ても、売り買いする時は現物ですよ。」

馬の血統の話から、大学や交通事故についてと話はエスカレートしていった。

「肩書きなんて、ええ加減なもんだ。あんたらだってそうでしょ。大学を出たという肩書きがあっても、実力が無ければダメでしょう。」

おやじ日頃の鬱憤が爆発したのか。

「交通事故が無くならないんだってそうだ。事故を起こした者は、すぐに免許証を取りあげてしまえばいいんですよ。それで飯が食えなくなったらもう一度取りなおせばいいんだ。」

おやじ、そのくらいで気が済んだのか。週刊紙を読み出した。ペラペラとめくるだけであるが。「僕は字、読めないから絵を見るだけですよ。」「気の毒に。どことなく関西訛りがあるので尋ねると、案の定このおやじのおとっつぁんは大阪出身だそうである。

血統と言えば、おもしろい話を思い出した。白土三平作の「カムイ伝」である。徳川家康が賤民の出であるという設定のもとに物語は展開されていく。その秘密を知った忍者カムイはあまりの恐ろしさに抜忍となるのであるが。徳川家康が賤民の出であるという事が真実なら、幕府のひいては天家国家の支柱は根本からくつがえされる事になるのだから。士農工商穢多非人という身分制度を確立した当の人間が賤民の出であるというのだから事は重大である。一人の人間の身分＝血統がこれ程大きな問題を持つのだ。今では、人間は生まれながらにして自由であり平等であると憲法にも謳われている。しかし広く世間を見渡すと今でも人間の間に血統というものが息吹いている事を痛感せざるを得ないだろう。あんがいごく身近に血統という物を意識せざるを得なくなるのではないか。

貨車は函館から貨物線に積み込まれ、四時間余の後、青森に着いた。夜の十時頃だった。操車場に入り出発は明朝だそうだ。僕とおやじは街へ飯を食いに出る事にした。おやじは定食、僕はカレーライス。カラーテレビが歌謡番組をやっている。四人の若い女の子が足をまる出しにして、「マンボウ、マンボウ、マンボウはバカで、ランランラン……。」とかいう訳のわからない歌を歌っている。

「ゴールデン・ハーフか。」とつぶやくと。

「ゴールデンなんとかって、どういう意味ですか。ゴールデンというリンゴがあるけどねぇ。」

「ゴールデンというのは、〃金の〃っていう意味だけどー……別に関係ないんで、ハーフってのは、あいの子、二世って意味なんですよ。」

「ほう、ハウスってのは二世って意味かい。」

「ハウスじゃなくて、ハーフですよ。

「ハーフか。ホウ。……

実はね学生さん、僕もハーフなんですよ。」

「え！　なっなっ……。」

「アイヌ人のね。アイヌ人じゃなきゃ、こんな仕事しないですよ。エヘヘヘヘヘ。」

と、言っておやじは味噌汁をすすった。

血統とはかくも恐ろしきものなり

貨車は、翌朝青森を発ち三沢で停車、さらに一頭積み込んで深夜出発した。貨車の中は猛烈に寒く一日中寝袋にくるまって寝ているので昼も夜も無い。暗いので本も読めないし字も書けない。暇つぶしにコマイばかりかじっているものだから口を切ってしまった。なんで僕はこんな事をしなければならないのか、いったい僕はなんのために生きているのかなんて考え出す。馬は暇があれば乾草をモグモグやっている。それでもヒマな奴はゲップ、ゲップと空気を飲み込む。それでも暇な奴はユッサユッサと体を左右に振っている。わかるなぁその気持ち。僕なんかコマイをかじって口を切りそれでも飽きずに、かみ続けているもの。

僕はここで、後れて来たる青年のために貨車積に関する注意事項を述べたいと思う。まず、貨車の中で一番困るのは自然の欲求である。“Naturalcalls me.”である。母なる大地に対する環元作業をいかにして行うか。グッドタイミングに貨車が停車してくれれば良いが、貨車という物はデタラメに進行するもので、じっと止って動かない事もあれば、五時間も六時間も走り続ける事もある。起き抜けに特に自然の欲求は強いものだから、その特に貨車がいつまでも止まらなければ非常事態が発生する。貨車という日常生活から隔絶された異常な世界にあっても、それはあくまでも日常生活の延長であり、日常生活に通ずる物だから、人並みの羞恥心を持った人間なら、他に人がいる場合、やはり貨車内での還元作業は、はばかれる。では、そういう時いったいどのようにすればいいのか。恐慌状態に陥いる前に落ち着いて考えればすぐにわかる事で、やはりこの異常な空間が世間に通ずる唯一の窓である所の扉の隙間から半身を乗り出して作業をするしかない。ところが、時は起き抜け＝早朝である。貨車は山間部やトンネルの

中ばかり走っているわけではない。途中にはあまたの駅があり、朝のラッシュアワーの時にはホームに大勢の人間が居るわけである。つまりその人数の倍だけの目の玉が、レールの上の通過物に向けられている訳だから、作業中に突然貨車がそのホームに、スウ――と入って行くような事があっては困る。この作業だけは途中で中止する事ができないから。そこで注意して頂きたい事は、貨車のトビラの隙間から世間に向って用を足す時は、まず進行方向をかなり遠方まで見つめ、駅が無い事を見定めてから、行うようにして頂きたい。これは先人の知恵である。ところで自然現象の小の方はそれでいいとして、大の方はいかにすべきなのか。僕はこの事について書こうか書くまいか、相当に悩んだが、後れて来たる青年のために、清水の舞台から飛び降りたつもりでデコの尻から飛び乗りをしたつもりで敢えて書こうと思う。大の方について非常事態が発生した時は、どうすればよいのか。実際はどうしようも無いんで、恥も外聞も見栄も意地もかなぐり捨ててするしか無いんで、そんな事はわざわざ書く必要も無かったみたいですね。ただ、恥も外聞も見栄も意地も捨て去る快感というものは、排泄のそれを凌ぐものであろう事は想像にかたくない。

次に貨車の扉はある程度の隙間を保持すべく金具が取り付けてあるが、急停車した時や連結の時の衝撃でそれがはずれガチャーンと閉まる事がある。貨車の扉は相当に重く、閉まると内側からは要易に開けられない。隙間から外界を眺めていたり、先程の還元作業を行ったりしている時に、ガチャーンと閉まり、頭や首をはさまれると生命にかかわる程の怪我をする。実際に過去にあった事だし最初からロープで扉を固定するなどの注意を要する。

三沢を夜発ち次の日の夜はどこやら訳の判らない所に放り出され、翌朝はもう東京に入っていた。♫楽し都、恋の都、夢のパラダイスよ花の東京♫へ来たのである。一台一万円という法外な金額を学生から搾取する所の運般業者の馬運車で馬車公苑へ直行。かくしてようやく、貨車という異常空間から解放されたのである。

ここで僕の記憶はようやく冒頭の東京農業大学の食堂に連結されるのである。ガチャーン。

西村兄との楽しい朝食の一時である。晩秋とは思えぬうららかな陽光が、四角い窓から蒸気の如く室内に漂い入り、そこかしこのテーブルの上に遊んでいる。ところがその光の束にも負けじ劣らじ、食堂の一隅から天照大神の如くまぶしい光を放つ物がある。かいがいしく味噌汁をよそい、ほのかな微笑をそえて御飯を盛り、一皿のおかずと共に御盆に並べている。味噌汁をお椀によそう女性がかくも美しく見えるものとは。「可愛い人ですねぇ、西村さん。」と言うと、西村兄は、「あれが可愛いてかァ、御前おかしいんでないの、やっぱり好みが違うんだなぁ。」と、おっしゃる。あの天照大神のどこが可愛くないのか、栗原小巻さんのどこがいいのかとしばし黙考。結論。やっぱり可愛い人は可愛いんで、他人がなんと言おうと自分が可愛いと思った人は可愛いんで、やっぱりあの天照大神は可愛いのである。

西村兄は試合前も、あいかわらず胃腸の調子が勝れない様子。太田胃散の効きめも無い。そこで兄に逆立ちをする事を勧めてみた。ところが兄はこの逆立ちの効用を頭から信用せず実行されな

い。曰く、逆立ちをする気力も無いそうだ。だまされたと思ってやってみればいいのに。この逆立ちというのは、ヨガの行法の中でも最もオーソドックスなものでかつ即効果のあるものだが。要するに日常あまり使わない筋肉を運動させる事により、神経の緊張をほぐし正常又はそれ以上の体の機能を取り戻す事ができるのである。ヨガにおいては理論的にも実践的にも証明されている。このように〃逆〃という事を実践する事は非常に効果的な事なのである。馬についても同様である。後日馬車公苑の千葉さんがおっしゃっていた事だが。ー左の方が固い馬は、右手前の運動を多くする事により柔かくしていく。左手前でばかり運動するから左が固くなるのであって、固くなればその逆の事をより多くやればいい訳である。ーこのように、〃逆〃の効用は日常生活にも非常に多いのではなかろうか。ここから僕は、口から泡を吹き飛ばさんが如く、とうとうと論じなければいけないのである。

麻雀をやる事と馬術をやる事について。

馬術という物はコツコツと地道な努力を積み重ねていくスポーツである。努力を積み重ねていくものに取っては〃運〃などという考えは寸分も導入されてはならない。失敗すれば努力の不足、成功すれば努力の賜物である。ここに〃運、不運〃、いわゆるツキという考え方が導入されたら、自分の努力の無きを、〃運、不運〃で片づけてしまうような事になりかねない。かくして馬術家という努力の積み重ねによって、ある成果を得ようとする者には〃運、不運〃という考え方の導入は厳禁である。しかるに麻雀はどうか。麻雀は、〃運〃という物を本当に感じさせる。腹ワタにしみて感じさせる。ではなぜこの麻雀を、馬術＝努力の積み重ねを重んじる者がやるのだろうか。

ここで目を広く世間に転じてみたい。広く世間を見渡した時、はたして〃運〃という物の存在を認める事が出来るであろうか。巷には自分の生来の不運を嘆いている人が多い。例えば家族の幾人かが次々と交通事故で死んでいったとしたら。偶然以上のなにものかを感ぜずにはおれまい。それが〃運〃である。確かに〃運〃は存在する。もし〃運〃など存在しない、運命は自ら切り開いていくものだなどと言ったら、少くともあのアイヌのおやじと僕は、にが笑いを供う冷ややかな目付きで君を見なければならないだろう。それでは御前は人生において運命という物に甘んじ、自分で自分の運命を切り開こうとは思わない運命論者か。と言われると、それはおそらく間違っている。僕は運命などというケチなものにこだわらない壮大なる思想を打ち立てねばならないと考えているだけの事であるから。運命が主で、僕が客だなんてとんでもない。例え僕が、運命という流れに押し流されていく一片の木の葉であろうと、僕が主であり、流れは客であるのだ。話が脱線しました。さて、確かに人間の力ではどうしようもないような力が世の中にはある。機動隊の力だとか核爆弾の力だとか、そう言った力ではないおかしな力が。

はたして麻雀は人生の縮図であるという。なぜか。そこには運・不運という物が存在し、プレーする者がちゃんとそれをわきまえているからである。麻雀は運だと言ったら、柴田の野郎がうるさいだろう。御前のはツキ麻雀だとかなんとか言って。と言って

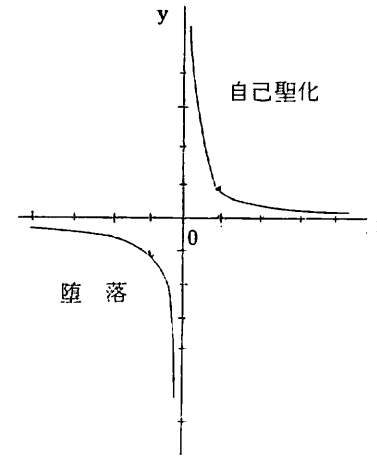
も、それで麻雀には運なんてものは無い、ツキなんてものは無いと言っているのではないだろう。あいつはつまり、「ついていない時に、いかにして被害を最少限に食い取めるかというのが問題だ。」という事が言いたいのだろう。それにしてもあいつは、よく負けるが。麻雀は決っして実力のみではない。実力が伯中している者同志がやっても勝つ双と負ける双とが出来てくるのである。

結論を急ごう。なぜ麻雀をやるのか。僕は馬術部という組織の中で寸分も〃運・不運〃という考え方を導入してはいけない部活動をしている。馬術をやる上においては徹底的に〃運・不運〃という考え方を排斥し、他方麻雀という物をやる事により、馬術という努力の世界はより明確に打ち出されるのである。しかし、ここで僕が馬術という努力の世界を明確にせんがために麻雀をやる事についての単なる自己弁護に他ならなくなるが。

とにもかくにも僕はようよう努力（？）の甲斐あって今では〃運・不運〃という物をさながら塩と砂糖の如く使いこなし、雀卓を調理台と化し、雀パイを自在に味付けする事が出来るようになった。これで、僕が麻雀に強い訳が判ったでしょう、柴田くーん。イヒヒヒヒ…。しかし〃運・不運〃を使いこなす事は非常な精神的重労働である。だから僕は麻雀に没頭している時、学生ではなくなり、馬術家ではなくなり、単なる一個の人間と化す。母なる大地・無限の宇宙の凝縮体である所の一個の人間と化す。これが恐らく僕が強いもう一つの理由でしょうなぁ、柴田くーん。昔、俳句という物は酔客の言戯であったらしい。それ芸術の城にまで高めたのが、かの松尾芭蕉である。要するに何事をしていても心の持ちよう如何で、芸術にでも何んにでも成り得るのである。四人の人間が囲む雀卓の中に突如として万物宇宙の神秘が顔をのぞかせる事だってあり得るんですよ。

「逆」の実践という事を麻雀をやる事と、馬術をやる事について述べました。しかし、ここにもっと凄い人が居ます。紹介します。坂口安吾その人です。彼はしばしば〃偉大なる落伍者〃という形容をもって紹介されるが彼は生来のアマノジャクであり自己聖化の道を堕落に見い出さんとした人である。堕落の世界と自己聖化の世界を融合統一すべく、自らの人生を巨大なる実験室と化した人である。西田哲学言うところの絶対矛盾の自己同一である。明らかに相矛盾する二つの事象が、自己の内では矛盾なく存在し得るのである。彼は醜悪の極致に到る事により、美の極致を見いだそうと言うのである。彼は非常なアマノジャクにもかかわらず、明らかに本当のものを見抜いている。悪童の中にこそ美しい魂の流れを発見するという。彼は一時期、薬の長期間多量服用により、多量の覚醒剤を飲んでは眠り、多量の睡眠薬を飲んでは眠気を追っ払うという風に、薬本来の持つ効能を逆転させてしまった。もちろん意図的ではなく、薬を常用し、量が増すにつれて神経がズタズタになってきたのである。しかしこの薬の効能の逆転は彼にとっては痛快であった事だろう。朦朧たる意識の中にあっても冷静に自己を見つめる自己が、いわゆる主中の主と言われるものが、にが笑いをした事であろう。自己聖化と堕落は、確かに相矛盾するものであるが、ともに正常からの離脱であるという点において、なんら変わりはないのであるが。

堕落と自己聖化。なぜ堕落しなければならないのか、意志的な



堕落などあり得るのかという事は後回しにして、僕流に堕落と自己聖化という物を説明してみたい。ここで中学の頃に習った

$y = 1/x$ というグラフを思い出して頂きたい。y座標を、その人間が現在到っている精神的境地・x座標をその進行度と考える。ここで $x > 0$、$y > 0$ の第一象限を自己聖化の世界、$x < 0$、$y < 0$ の第三象限は堕落の世界である。つまり自己聖化は正の世界、堕落は負の世界である。そうすると、自己聖化と堕落と言う物を良く把握する事ができるだろう。それは双曲線であり所栓交わる事の出来ない悲しい定めの物なのである。ところでもう少し注意してこのグラフをながめると、おもしろい事に気づくでしょうか。進行度 $x \to \infty$、$x \to -\infty$ において、近づく所はいづれも $y = 0$ という妙ちくりんな境地なのです。自己聖化も堕落も行き着く近は同じなのではないか。しかし $\lim_{x \to \infty} \frac{1}{x} = 0$ であっても $1/x$ は決して0には成り得ないのであって、それは生身の人間として当然の事なのである。而して堕落と自己聖化は限りなく接近し合うが正と負の世界の相違の定め $x = 0$ とは成り得ず、違った世界にしか存在し得ないのである。

僕は堕落と自己聖化について、もう一つの例えを用意している。矢で的を射る事である。つまり、矢を引き絞るのは負の行為、矢を放つのは正の行為である。それぞれ堕落と自己聖化に例えたい。そして、矢を引き絞る状態も、矢が飛んで行く状態もともに、的に当たるための前段階であり、矢が的に当たるという事が $y = 0$、つまり究極の目的なのである。

ところが、この弓矢の例えと前の $y = 1/x$ の例えには微妙なる食い違いがある。弓矢の例えでは矢を引き絞る事はあくまで矢を放つための前段階であり、その意味で堕落は自己聖化への前準備であるという事である。然るにグラフの例えでは、堕落によっても自己聖化によっても $y = 0$ に近づき得るのである。この坂口安吾の堕落を説明する場合どちらが適切なのか。思うに彼は堕落という物に意味を見いだしていても、堕落そのものには意味を見いだしていないように思われる。彼は人生という巨大な実験室の中で何をしたのか。堕落という負の世界から $y = 0$ に（それは自己聖化の正の世界からも近づき得るが）近づこうとしたのではないだろう。恐らく彼は、矢をギリギリと引き絞るだけ引き絞り、生涯放ち得ず世を去ったのだ。

堕落は自己聖化の前準備などと言う事になると、これから堕落をしようとする人に取っては自己聖化などという言葉を用いる事は、非常におこがましく感じられるだろうから、ここから自己聖化などというおこがましい言葉はやめて、進歩という言葉を使おうと思う。では堕落は退歩かなどという意地の悪い事は言わないで下さいよ。

堕落する、堕落すると言ってもなんとなく判然としないでしょ

う。町に出れば堕落したアンチャン・ネェチャンが大勢居るではないか。なにをいまさら川端ヤナギ。ところが堕落といってもそこに本人の意志が働かないとなんの意味も無い。堕落をせざるを得なくなって堕落をする、これでは意味が無い。堕落は意志的ならばこそ苛酷であり意味があり進歩へと転化せしむる事が可能なのである。意志的ならばそこに甘さがあるのでは、そうせざるを得なくして堕落する方がよっぽど苛酷なんではないか。意志的な堕落なんて甘いんではないか、というのはとんでもない話である。かの矢吹丈が、キム・イルと対戦した時の事を覚えていますか。キム・イルは先天的に減量の要易な体であったが、力石徹がジョーと同じバンタム級に留るために行なった苛酷なる減量は彼の強固なる意志力によるものであったと言う事を。

ではなぜ堕落をせねばならないのか。一言にして曰く、虚無の感得である。進歩をするにはまずしっかりした基礎・地盤を築かなくてはいけない。さもなくば進歩も上べだけのものとなる。いかなる進歩も砂上の楼閣となる。まず堕落により己れの虚飾を排し、己れという素材を無に帰し、人生の根底に、〃虚無〃という不動の岩盤を築かなくてはいけない。ここで〃虚無〃という言葉に惑わされてはいけませんよ。これは単なる虚無主義　ニヒリズムではないんですから。実際は虚無という言葉より単に〃無〃という言葉を使って無・無的・無主義とした方がいいんでしょうが、それでは語呂が合わないでしょう。とにかく僕は人生の根底には〃虚無〃という不動の岩盤を築かなくてはならないと思います。この虚無とは、いっさいを否定するものか？　イエスともノーとも言えます。つまりこの虚無はいっさいを包含するのです。だからニヒリズムはヒューマニズムと矛盾する事は無いのです。虚無イコール無限だから。

虚無。かって自転車で一人旅をした時の事。降りしきる雪の中、天の橋立から日本海を臨み、日本海独特のあの薄暗い空の下で、ドォドォと打ち寄せる波を見つめていると、我知らず涙が出てし方がなかった事がある。まったく打ちのめされたような気分であった。あの時、自分は何を感じたのか。虚無だろう。自分は天と地の間に存す。ちっぽけな点景であると感じた時の、一種名状し難い　しさのような、寂しさのような気持ちである。自然の無言は人間を完膚無きまでに叩きのめす。虚無を人生の根　に据える事は、自然に対する壮大な居直りであるのだ。

進歩を望むなら。まず自分をズタズタに分解しなくてはならない。再帰不能なまでに、完膚無きまでに叩きつぶさなければならない。あらゆる屈辱を味わい、あらゆる挫折感を味わなければならない。積極的に、勇猛果敢に。己れ自身を見失った時、自己喪失を感じた時、それはきっと自己創出へつながるものであるはずだ。また、そう転化せしめなければならない。分解に次ぐ分解の後、ホンモノが見えホンモノをつかむ事ができ、ホンモノになる事ができる。このホンモノとはどんなものか君には判るでしょう。

三好達治が坂口安吾を評した文章におもしろい物がある。「彼は堂々たる建築だけれども、中へはいってみると畳が敷かれていない感じだ。」というものである。彼の許容量は無限である。弓矢ならいつでも放てる状態にある。中国のことわざに「龍の深淵

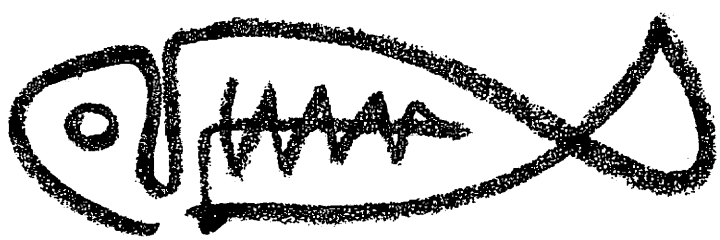
に潜むはまさに昇らんとするがためである。」というのがある。龍の昇天の勢いもさる事ながら、深淵に潜み昇天のためのエネルギーを蓄積する龍の迫力は常人には測り知ることのできないものであろう。彼はまさに深淵の龍である。

シカシ、オマエハバカダネェ。キョムトハナニモナイトユウイミダゼ。ナニモナイモノガナンデムゲンナンダ。オカシナヤツダ。ダラクトハ、オチルコトダゼ。ソレガナンデシンボニナルノヨ。バカダネェ。ホカニカンガエルコトナイノカ、エッー。ムダメシバッカリクイヤガッテ。

はいはい、わかりました。わかりました。あんまり執こく言わないで下さい。今日は疲れましたから。また今度にして下さい。

チョットマテ。ダイタイオマエトユウオトコハ……

また今度にして下さいよ。明日はね、西村さんが中障碍に出るんですよ。だから北隼に朝早く飼付けをやらないといけないんですよ。だからもう寝ます。眠らせて下さい。おやすみィ……。



もう寝ます

汗臭い道着から馬臭い学生服へ、畳ずれの傷から　ずれの傷へ大きく変わった。

〃カッコーの啼く朝、馬にユラユラ、昨年とは似ても似つかぬ世界だ〃と母に便りを出してもう久しい。

練習の終わったあと汗が顔から呼吸に荒く波打つ胸に伝わる、正座した足がむくみ感覚がうすれる。雨滴をうけるがごとくポカンとあいた口、そんな感じが、むかしむかしあった。運動部にはあったはずなんだが……したたる汗をもう青畳の上では感じられず、作業に求めるに他なし、少し淋しい。

運動部常なるものを否定され、果して生きて行けるかと考えこむことしばしば、でも、可愛いい瞳の友がいた、その臭気もうわしかから離れなくなった。彼のフン、小便の臭い、それに酔ったように、ふらふら練習に行く。

夏の青草が恋しい、今は根雪になっている。雪を前肢でかきわけ必死に草をさがす彼が、いじらしい。そんな季節になってしもうた。

高校時代、柔道をしていた。考えて試合をしたことなど一度もない、あったのはねじふせてやろうと思う気だけ。あとは無意識に出る技だけだった。今年は相手が障障になった、一人ではない。馬と共に戦う。協力せんとあかん。でも人のなすこと通ずることはある〃飛んだるぞ〃の気持ちは大切にしたい。制限時間が近づく、両者優劣はなし、ここで決めるか、決められるかはもう技以上の域だと信ずる、人の熱だと信ずる。

闇から始まった練習、恵廸ですするコーヒーのうまさ、フトンの暖かさを夢見て、それもやっぱし夢だと分かるころ、オレンジ色の太陽が上ぼる。人間の生活がこれから始まろうとするのに、わしの一日はもうすぐ終わるような気がする。実にきれいな夕日だと思う。

作業でしか、胸のすく汗を流せないが、いつか馬上で彼と共に勝利の汗を流せることを願って、多少いやいや非常に切進したる所を求めて、また馬フンの臭いをつけに行く。幾重にも、幾重にも。

当番日誌より

12月19日

今朝も非常に寒い。朝トレセンから駆けてくる部員のかけ声が、札幌の朝まだ早き寒空にこだました。

夏の京都で

今日汚床

私の京都の家は、東山三十六峰の内、大文字の送り火で有名な如意ヶ岳の麓、鹿ヶ谷にある。鹿ヶ谷の変で知られている所である。京都には、清水寺などの多くの桜の名所があるが、このあたりは春に洛中から東山を見ると、ほんのりと桜色をしているので桜谷と呼ばれている。又、この近くには寺が多い。銀閣寺や、湯豆腐で知られる南禅寺、その他法然院など静かで美しい寺が多い。近ごろは四季に渡って観光客が訪れている。南禅寺から銀閣寺の間には、琵琶湖から京都へ水をひいて来た疏水にそって桜の木が植えられて、哲学の小径と呼ばれる散歩道がある。その昔、京大生がこの径を哲学に耽けりながら歩るいた事からこう呼ばれるようになったと言う。しかし北大生がぼけーと雑種の犬などつれて歩くのにもよい径である。七月の下旬に一週間ほど、京都へ帰った私は、久し振りにこの径を歩いた。ちょうど夕方で人も少なく、蟬時雨の中に一人でぼんやりと煙草をふかしていた。疏水の東側は山が迫っており、その山の松の木に夕陽があたり、幹を赤く染めていた。西には夕陽を背にした黒谷の三重の塔が黒くシルエットを見せていた。流れを見つめながら私は幼さなかった頃の事を想っていた。幼稚園の帰りに、流れに面した崖に上った事、その崖は今は異様に小さく感じられる。流れに入って魚やザリガニを取った事、イカダを浮かべた事。久し振りに心がゆっくりと落ちついていた。その時、向こうからカラカラと林をひきづりながら老人がひとり近づいて来た。頭にチラリと五十年後の自分の姿が浮かびそうになったので、私は立ち上がり、行こうとした。すると、「あんたは何処から来られたのかな？」と、老人に声をかけられた。私は旅行者ではなく、ここで生まれて育った者である事を言った。私は自分が旅行者と見られたのがちょっぴり嬉しかった。いつもは、私が駄犬をつれて、この辺をうろついていると、旅行者が「あれがここの原住民なのか、なんとなくムサイ感じがする。」などと珍らしそうに見て行くからである。それはさておき、これを聞いて老人は、嬉しそうな目をして言った。「そうすると、この流れも木々も、そして鳥や花もすべてあんたの物です。あの流れの中の魚を見なさい、あれもあなたの物なんですよ。」あまりの突拍子もない言葉に驚いた私は、老人をもう一度ながめて見た。こげ茶色のベレーに、シャツ、桜のステッキ。痩せてわいるが日に焼けた顔からは、つい最近まで、山を歩るき回っていた様子がうかがえる。しかし何かインテリジェンスを感じさせる日をしている。たづねてみると、この近くに住んでいると言う。しかし私はこの老人に会ったのは初めてのような気がした。老人は「ぞんぶんに散策を楽しみなさいよ。」と言って、杖をひきずり歩るいて行った。私は散策と言う言葉のひびきを変に感じた。ここの景色と、散策と言う言葉と、あの老人とはしっくりゆくのだがそこえ私が入るとどうもしっくり行かないと思えた。私は煙草を靴の底でもみ消した。そしてすいがら入れが見つかるまでスイガラをつまんで歩るいた。そして散策する時に相応しい考えと

は何んであろうかと言う考えに恥けりながら歩るいた。空はもう紫色に変わりはじめていた。

水産学部視察記

佐藤愁一

去年九月、体育会の公務で函館へ行った小生が、今年水産学部へ移行する予定の者として、見聞してきた学校の様子は別として、の状態、社会状態（主に大門通りについて）を体験のそのまま忠実に書きたい。

まず社会状態は、薄野につぎ悪名高し大門通りについてしか体験せし所はあらずして、おのずから、そこしか書けないのである。私しが、行った時ではなく、金がないのは周知であるから、連れて行ってもらったことを白状するのが、遠洋漁業に出ていた折であったので、人はまばらであった。漁民が居るときは、飲みに行くのはできぬとか、皆様、気をつけて。ところで、まず行った所は水産生のたまり場「かすり」。その名の通りかすりの着物を着たおねぇちゃんガスタンドに立っているのであるが、店内の様子は洋風であり、出すものは洋酒である。なんか奇妙な感じ。水産生ならさぞかし酒豪が多かろうと思いきや、一番飲んだのは　とは、さすがの私も驚いた。さて次に行った所は、北辰　の側の小さなスナック、その名もジャンボでありました。そこでは、ブラック一本出て来たが、さすがの　も、そこでは水割二、三杯。まあ、函館へ来た時は、　の所へ来てくれ。金さえ持ってこいば、いくらでも飲ませてやる。ちょっと顔が大きすぎた。

の事など書くつもりであったが、こも　で原稿用紙一枚がいっぱいになりそうなのでこれでやめとく。最後に一言、　を室にかん詰めにして原稿を書かした部報係をうらむぞよ。読者に一言、こういう次第であり、内容が貧弱であることは作者も否定できないのである。つまり、作者としては、この文章を読み作者の人格なりを疑ってほしくはなりのである。やっと原稿用紙がいっぱいになったのでこれで修了。

当　番　日　誌　よ　り

1月6日　快晴で気温は非常に低かった。寝ワラはカサカサになるし、馬達はすべて外に出て夕方のボロ出しはないし、当番にとっては、極楽であった。

けんか相手

木村洋文

小学校低学年頃までは姉が一番のけんか相手であった。しかし高学年にもなると僕の力が強くなっていき、とっ組み合いもできなくなってしまった。ここで新しいけんか相手が当場する。ケンちゃんである。

初めてケンちゃんに会ったのは、僕の中学の入学式の日であった。入学式を終えた帰り道、小鳥屋の店先で柴犬が遊んでいた。手のひらの上にのる位の大きさで、鼻の所が黒く、全体にむっくりした可愛いい小犬であった。その日からこの小犬はケンと名づけられ、僕の弟となったのであるが、けんか相手のなかった僕にとっては絶巧の相手であった。今から考えてみれば可わいそうなことをしたと後悔しているが、当時の僕は中学生のやんちゃざかり、いろいろな不満のはけ口はすべてケンに向けられた。

まあ一例を紹介しよう。

まずコートを着る。つぎに厚手の手袋をはめ、ヘルメットをかぶり、足には長靴をはく。完全武装をしたあと手にほうきを持ち、攻撃開始。二人とも興奮し、最後はいつもおふくろが仲裁にはいる。「二人ともいいかげんにしなさい！」

悪いのはいつも僕の方であった。それをケンはいじらしくたえてくれた。

そのケンももうすぐ満八才。もうジジイである。今や彼は本村家の主である。居間のいちばんいいソファを占領し、一日じゅう動かない。食事も後輩の犬達がメシに味そ汁をぶっかけたのを食べているのをしりめに、鳥のスープを下味にした歯のためによいやわらかい肉などをごく当然のような顔をし、それでもまずそうに食べている。しかし、それでもいい。ケンにはいつまでも生きていてもらいたい。

当番日誌より

1月16日　北沢家麻雀談義

よし、今日から麻雀おぼえるぞ（南部）

授業料は高いぞ（西村）

勝つ麻雀を教えてもらわにゃあかん（桝井）

身をもちくずすもと（江口）

鳩と馬と僕

添田昌一

僕はかって、中学高校を通して鳩に情熱を傾けてきた。それは動物を愛するが故といえば聞こえはいいが、最初は確かにそうであったがレースをやるようになってからはそうとばかりはいえなかった。血統のよい親鳩を買い、その子を作るのである。そうしてその子に自分なりの訓練をする。鳩の場合は訓練なのである。そして訓練を積み鳩が本能として持つ帰巣能力にみがきをかけレースに出場させるのである。レースに勝つためには良い親鳩を選び世話をして居心地を良くしてやらねばならぬ。鳩は憶病な動物だ。慎重さを欠いてはならぬ、だが時には鳩の嫌らう赤旗をふって飛ばせ体力を養なわなければならぬ。もう鳩がかわいいからだけでは飼えなくなる。そのようにたんせいして育てた鳩でどれほど人間が自信を持っていても、レースになればあなたまかせにならざるを得ないのである。何しろ鳩と人間とを結ぶものは鳩の帰巣能力だけなのである。そのきずなを信じつつ自分の育てて来た鳩の帰りを待つのである。そのように僕は鳩にいろいろなことを教えられた。鳩の世話をするには鳩を愛することが必要でありそれがなければできないことだ。僕は鳩舎の中が生活の場のようであった。鳩は犬などのように、人をわかったり、感情らしきものなど持ち合わせてはいないのだ、だがいつも見ていると、気持ち

が良い。居心地が良いというのはわかるものだ。生き生きとしているというともっともらしいが本当に鳩が生きていることを実感しているようでもある、そんな時出口を開けてやると体をひねりながら遠くの空に飛んでゆくのだ。動物の本来の美しさは自然の中にある時見られるのだ、僕は常に思っていた。自然に近い状態で帰巣本能をみがこうと。それは考えてみれは不可能であった。鳩の能力を人間が利用している以上そこに自由はないし、自然でももちろんないのである。だがそうわり切ってしまっては鳩のことを考えることはできなくなる。帰巣本能は自然から生まれてきたものだから。鳩のことを心から思い（鳩をやめた僕にはそんなことはいえないかもしれぬが確かにその時は好きで好きでたまらなかったのである）残酷にさえ思える位遠くからはなし、きたえなければならぬ。この時鳩のことを考えずに無茶をすれば鳩は帰ってこない。こういう風に書いてくるとなにもかも頭でこねまわしてきたことであり僕が鳩を飼っていた時の感情とは大いに違うことも白々しく感じられる。僕は今馬という鳩とは違った動物に教えられこんどは馬と一緒に勝利の味を味わってみたいと思うのである。又馬はそれに答えてくれるものがあるような気がしてならぬ。動物が人間に与えるものは実に大きく深いものであるようだ。そして今、思うのは馬を通して自分の意志ーちがう自分の感情、それは自分が理性など持ち合わせない動物＝馬が僕に与える感情＋自由な楽しいものであろうか、そんなものにすなおに自由にやっていきたいと思うそれは練習の時に感じるちょっとしたいらだちの基であるのではないか。人間はこれを忘れると、それを忘れたと気づいた時、後悔せねばならないのではないか。

何となく思うこと

新野晶子

北大馬術部、それは実に不可思議な動物たちの集団である。少しばかり変質犬的な〝シロ〟。

もちろん馬がいて、その飼の残りを整理するハトがいて、近頃では、その背中でのうのうと日なたぼっこをするカラスが来る。ドブネズミにハツカネズミ。実に頭がいい。ネズミ取りをしかけておけば、エサを食べてフンを残し、戸を閉めて去っていく。それらの動物たちのなかでも、最も奇妙な存在が人間という動物。実に、不思議な集団である。そして、ふと思うこと。ひょっとしたら自分もその仲間では。ふいに、何か一筋の不安が胸をつきぬけていく。街を歩くとき、授業を理解できなくてもいかにも解った様な顔をして聞いているとき、自分は、ごくごく普通の人間のつもりである。まともな行動をしているつもりである。

しかし、一歩馬術部の敷地内に足を踏みこめば……。恐しいことである。

部外者からみれば、実に奇妙であると思うような行動を何くわぬ顔でする。

そして自分はその行動をおさえることはできない。そしてまた、一歩外に出ると不思議な行動をとった自分を不思議に思う。

そして反省。

しかし、何時の間にかその内と外の行動に対する思考が変る。まったくの逆になる。
習れるということは、恐しい。
また時折、不安がよぎる。
そんな中で今、必死に何かをつかもうとしている自分。
人一部の努力と苦労をし、エネルギーを消耗したとしても。

当番日誌より

2月11日　今日、三越に行ってネ、馬具展を見に行ったらネ、オリンピックの選手だった影山祐三さんと井上喜久子さんがいてネ、バナナとミカンとお菓子があってネ、ジュースをごちそうになったヨ。

創作

相川宗厳

桑園を出たのは真夜中だった。彼の心は今倦怠感と不安でいっぱいだ。彼は初めての長い旅と、全くの他人とその期間を一緒に過ごすことに嫌な感じをもっていた。彼は生れつき憶病というか、人見知りをするというか、赤の他人に接するのは非常に苦手だった。だから彼は端から見れば、全くつまらないことに心配ばかりしていた。例えば話をしないわけにはいかないから、どのように話を切り出すかとか、馬の世話を一緒にできるかどうかとか等々緒々の事に気をつかっていた。貨車の中は真暗だ。この無限の闇が彼のすさんだ心を少しは癒してくれた。時々開け放たれた出入口からサーチライトの様にサッと光がさし込んでくる。その光に照らされて馬の顔が反対側の壁に大きな幾何模様を描き出す。彼は闇の中からそんな光の悪戯を見たり、外の黒々とした景色を眺めながら寝袋の中にもぐり込んだ。

翌朝目覚めてみると、貨車は朝靄の中をガタゴトと可成りの速さで進んでいた。昼をかなりまわった頃ようやく海の香が臭ってきて函館へ着いた。貨車は大きく口をあけた連絡船の倉庫へと入って行く。まるで鯨に飲み込まれる小魚の様に。やがて小きざみな振動と共に船は出てゆく。今日は波が静かな様だ。海の荒れている時船に乗るのは全くつらいものだ。彼はその数十日後その様

な目に合う運命にあったのだが。この頃になると彼が内心非常に心配していた、もう一人の人間とのやりとりもスムーズに行く様になった。彼はほっとし自分もまんざら人づき合いが不得手ではないなという自己満足にさえ陥り始めた。

青森での長い停車の後、貨車は彼の思惑とはうらはらに、裏日本方面へと向かい出した。そういえば桑園の駅で聞いた時に裏日本を通ってゆくと誰かが言っていたのを思い出した。あーあ裏日本とは（名前から察するだけでも）うらぶれた所を通ってゆくものだなぁと思いながら、彼は野坂昭如の文庫本をひっぱり出して読み始めた。このころになると、桑園で買い込んだ鉄道弘済会向けの週間雑誌などは全て隅々まで読み尽くされてしまい、二、三度読み返して憶えてしまったものもある程であった。要するにその類の如何わしい本には飽きてしまったのである。それでも又、時間が経てば買ってしまうことも分かっているのであるが……。

やがて海が見えて来た。日本海だ。彼は初めてまじかに見る日本海に親しみを覚えた。海は彼の心と同様にけっして晴れ晴れとはしておらず灰色に沈んでいた。親しみを覚えると同時に彼の重い心は増々沈んでゆくのであった。日本海の荒波と夕焼、彼は何か思い当るものがある様に思った。彼は必死に思い出そうと考えた。やがて、はたと何か思いついた様に二、三度うなづいた。何のことはない、彼が小さい頃よく行った銭湯の壁絵にもそれらしきものがあったというだけであった。彼は自分の想像力の貧しさと、知的程度の低さを今さらながら思い知らされて、ひどい自己嫌悪にかられ、ふてくされてしまった。

佐渡が見えてきた。夕暮れの日本海に浮ぶ佐渡。霞んだ島影の中で燈台の光だけが周期的に光る。これも絵になる景色だなぁと幾分感傷的になりながら横になると、何だか眠けが指して来てうとうととまどろみ、眠り込んでしまった。貨車の揺れと馬の鼻水ではっと目を覚ましたところ、ずいぶん眠った様に感じたが、大して時間は経っていなかった。ほんの二、三十分の間であった。この短い時間の間に彼は様々な夢を見た様に思った。夢がどういうものか明らかではないが、何だかとてもいい思いをしている様な夢であった。まあそんなことはどうでも良い、現実の自分の心はすさんでいるのだと思いながら、外を見ると、佐渡はもう山の影になってしまって見えなくなってしまった。汽車はそんな沈んだ心の彼を乗せて、夕闇の中をくねくねと曲りながらトンネルの多い北陸道を進んで行った。この北陸ではまるで各駅停車のごとくよく止った。これは乗っている者にとっては、何とも歯がゆいものである。何時間経っても以然として北陸にいるのである。おまけにこの日の北陸地方は滅方冷え込んで、駅の乗客を見ても皆物々しい防寒具を身につけているのである。人の吐く息、馬の吐く息共に白かった。彼は寒さと飢えに耐えながらも初めて見る北陸の景色を眺めていた。この時程彼は暖い御飯とみそ汁の有難さを思い知らされたことはなかった。せめて暖いお茶と弁当が欲しいと思った。が貨車の故に小さな駅には止るが、大きな駅には止らず、操作場に止るだけであった。人間塊が減って寒い時には誰でもそうであるが、彼も又非常にみじめな気持であった。彼は暖い御飯とみそ汁に思いを馳せながら寝袋のチャックを上までしめた。明朝には大阪に着いているだろうと希望をいだきながら……。

大阪から南へ下る時の貨車は速かった。彼はかって一、二度

乗ったことのある新幹線に乗っている様な気さえした。明石の天文台が矢の様に後方に飛び去り、白鷺城が視界から消えて無くなった。風景がどんどん変わっていった。空も晴れて暖い日差しが貨車の中にも差し込んで来た。この空の青さと、風景の変化の速さに彼の心は前日とはうって変わって晴れ晴れとしていた。

関門トンネルを抜けていよいよ九州に入った。何だかどでかい煙突ばかり並んでいる空のよごれた町に出た。彼はこ汚ねぇと思いながらも自分の故郷にもこんな所があったんだなぁと彼の故郷東京のことを考え、ぼんやり外を眺めていた。そこを過ぎるとあとはもう広い田畑の田園風景ばかりが続いた。太陽もやはり今までとは少し違い、かなり暖かかった。彼は暖い日差しにいい気持になって一日中うとうととしていた。

あくる朝起きてみると、もう貨車は止っていた。彼が外へ出てみるとようやく太陽が差してくるところであった。どこであろうか、聞いてみた。何と鹿児島ではないか。そういえば何となく日差しが強いではないかと思いつつ駅周辺を物色した。そのうちみる間に日差しが強烈になってきて、とても厚着などはしていられない状態になった。まるで札幌の夏の太陽みたいだった。暑い暑いと思いつつ朝食に食べたチャンポンの油気に気分を悪くしながら歩いていた彼は、ふと桜島のことを思い出した。周囲を見まわしたが幾分背の高い建物にさえぎられて見通しがきかない。そうだ海に行ってみようと思い、あちらこちらぼっつき歩いているうちに海の香がしてきた。何だか少し霞んでいるような大きな島が海をはさんで向こうに浮かんでいる。青黒くややぼんやりとしているが、空の青さの中に浮き出ている。その姿に見とれながら彼はまた感傷的になり、裕次郎の歌などを唄いながら故郷の家のこと、友達のことを思い浮べた。しかし感傷的になっても彼の心はもう以前のようにどんよりと沈むことはなかった。それどころかこの桜島の姿を見ていると喜びが湧いてきた。どっぷりと錦江湾につかって鹿児島市を見降している。あの安定感のある姿を彼は好きになってしまった。まさに足が地の底についている感じであるとも思った。

彼はいよいよ目的地に着くんだなぁと思ったが、彼の常として実感が伴わなかった。長い旅であった。単調な、わらまみれの旅であった。髪の毛も鼻の中も胃袋の底もわらぼこりで汚れたような気がした。早くふろへ入りたかった。もうすぐ旅の終りがくるが、仕事はまだまだ残っていて、これからであった。それを思うとうんざりしてきたが、彼は雇われ人を強く意識していたので、それ以上の感情は湧いてこなかった。それから数時間後国分駅のホームに馬を洩く彼の猫背ぎみのいじけた姿があった。

当番日誌より

2月20日　馬場カチカチ、速足、駆足、全然できず。
皆さんボヤクことしきり。

北海道大学馬術部名薄

歴代部長

氏　名	住　所	郵便番号	電　話	勤　務　先	電　話
永井　一夫	初代部長　札幌市南2条西12丁目	060	011 211−2435	北大名誉教授	
高松　正信	第二代部長　東京都世田谷区松原6丁目36−8	156	03 322−6752	玉川大教授	
黒沢　亮助	第三代部長　札幌市北1条西22丁目	063	011 611−1057	酪農学園大教授	
太奈　康光	第四代部長　函館市湯川町2の8	042	0138	函館高専校長	
松本　久善	第五代部長　物故				
半沢　道郎	現　部　長　札幌市北6条西12丁目	060	221−2286	北大農学部教授	

特別後援会員

氏　名	住　所	郵便番号	電　話	勤　務　先	電　話
野間口英喜	東京都杉並区永福2−36−19	166	(03) 321−7617	太田区羽田空港2の8の1　東京航空食品㈱ 日航ホテル社長　川崎日航ホテル社長	571−4911
染谷　五郎	札幌市豊平区豊平5条9丁目	062	811−8456	染谷商会社長	811−0628
滝沢　政雄	旭川市パルプ町1条4丁目国策パルプ第一クラブ内	070		国策観光開発㈱取締役社長	24−5431
原島　つる	札幌市北2条西27丁目	063	011 621−1451	原島洋裁院院長	
庄内　貞夫	〃　白石区中央53の3	062	011 861−2504	歯科医	
武田　忠幸	〃　南6条西20丁目	063	011 561−3286	北都ハイヤー、北都バス社長	711−7214
小野　忠	〃　北18条西5丁目	065	011 721−1526	北大モータース社長	
片寄　馨	〃　北18条西6丁目　静山荘	065		北大農学部大学院	
富樫　英治				退会	
佐合　義弘	〃　琴似8軒3条東3丁目651	063	011 631−5744	札幌市民生協同組合理事	
高橋留次郎				日本中央競馬会	
加藤　和男	東京都太田区南馬込6丁目29番−1号	143	03 751−4601	フシマン株式会社	
田中　昭志	札幌市琴似4条5丁目　国鉄宿舎7号	063	011 731−8489	札幌鉄道管理局	
岡沢　大	（在カナダ）				

氏　名	住　所	郵便番号	電　話	勤　務　先	電　話
沢田　八衛	物故				
酒井　保	札幌市北２７条東３丁目	065	721−4040	北大獣医学部教授	内 5227

後援会員（卒業生）

氏　名	卒業年度	住　所	郵便番号	電　話	勤　務　先	電　話
中野友二郎	昭4 農農	東京都多摩市桜ケ丘３丁目33の４	192−02		科学教育研修センター	
平山　常介	4 工機	横浜市鶴見区獅子ケ谷町 1222の19	230	045	日本海事業興業	
中谷　勝紀	5 工機	東京都杉並区桜井１−１５−２３	167		ヤンマー船舶機器㈱	
間　克一	6 農畜	千葉県鎌ケ谷市初富 522	273−01		地方競馬全国協会参与	
岩垣　駛夫	6 農農	神奈川県川崎市多摩区生田 6983 − 173	214	0557 48−9530	東京農工大農学部教授	
河崎　秋三	6 農畜	八王子市高倉町 1552	192		千葉県小林牧場	
藤居金太郎	7 農化	（在ブラジル・サンパウロ）			漁業	
永松　四郎	7 農畜	東京都太田区北千束１−５８−９	144	03 717−3484	永松商事	
半沢　道郎	8 理化	札幌市北６条西１２丁目	060	011 221−2286	北大農学部教授	
武田　朝男	8 農畜	東京都品川区旗ノ台６−１−２	142	(03) 781−1097	日本製酪協同組合	264−8421 〜4
東園　基文（7主）	9 農農	東京都目黒区五本木３−３０−１	153	711−8877	宮内庁待従職参事	440−0451
久葉　昇	10 農畜	岐阜県各務原市那加織田町 148	504	0583 82−5632	岐阜大農学部教授	
田畑　武夫	10 医	札幌市南５条西２丁目	060	511−3733	田畑産婦人科医院院長	
植村　勘一（8主）	10 農畜			0427 51−7299	久保田建設 kk 顧問 世田谷区大原１丁目 13−6	467−2361
本田　恒康	10 工機	東京都港区六本木７−２−２−402	106	405−6867	プレス工業 kk 常務取締役	044 26−2580
加藤　英夫	11 医	清水市下野字大坪 290−126	424	0543	清水簡易保険診療所 清水市入江町１丁目 14−12	66−1279
脇田代子郎（10主）	11 農化	神奈川県藤沢市辻堂西海岸 6366	251	0466	三菱化成工業常務取締役	212−1570
大迫　明徳	11 理化	東京都狛江市覚東 320−6	182	428−4817	大迫技術士事務所	480−9717
高杉　直幹（9主）	11 理化	札幌市北７条西13丁目	060	251−3720	北星大教授	
吉見　一郎	11 農教	東京都狛江市小足立 620	182	489−0491	雪印乳業 kk 常務取締役	353−3111
渋谷　周平	11 農畜	東京都渋谷区代々木１−２２	151		日本アイスクリーム協会（社）	

氏　　名	卒業年度	住　　所	郵便番号	電　　話	勤　　務　　先	電　　話
森山　武雄	12　医	青森県南津軽郡浪岡町　国立岩木療養所	038-18		国立岩木療養所所長	
滋賀　秀明（11主）	12　医	東京都港区白金台５－３－２０	108	441-7844	大同製鋼kk 東京診療所所長	901-4169
小村　達夫	13　農生	岡山県吉備郡足守町足守861	701-14		岡山大理学部教授	
前川　静彌	13　理化	室蘭市新富町1の6番14号社宅番外14号	051	0143	日本製鋼室蘭製作所研究所副所長	
山下　正亮（12主）	13　農畜	札幌市白石区本通８１８－１３５	062	861-5667	酪農学園大教授	
石井　昌長	13　農化	千葉県船橋市夏見台町夏見台団地 14-10	273	0433 62-9785	アルコール海運倉庫kk	
小笠原義顕	13　工電	川崎市多摩区宿河原２２２８	214	(044) 82-3609	旭電気工業kk	
桶本　勝登	13　農経	東京都杉並区西荻北2の27の8 ライオンズマンション西荻第2D－608	167	395-3548	中央技能検定協会理事	
松平　悌	13　農農	神奈川県秦野市鶴巻 963-18	257	0463 77-2116	サッポロビール	572-2381
黒沢　良雄	13　農経	茅ケ崎市浜竹４－６－３０	253	(0467) 70-8676	日本長期信用銀行	211-5111
小田　昇	14　農畜	東京都目黒区上目黒3の44の19の104	153	715 2107～8	秀興不動産社長	
池内　武夫（13主）	14　農畜	東京都世田谷区若林４－２２－５	154	414-0361	日本中央競馬会理事	591-5251
中尾　敦司	15　工鉱	船橋市習志野台１の９６４－８	274		大日本鉱業kk	211-2671
西村　雅吉（14主）	15　理化	函館市松陰町１－３	040	0138 51-1624	北大水産学部教授　函館市港町（水産化学科）	41-0131
木谷清喜貞	15　農実	金沢市片町２－２　２０号木谷ビル	920	0762 21-5041	瓦土建	
石井　和彦（15主）	16　農畜	鳥取市湯所町１の３０７	680		鳥取大農学部教授	
河原　清作	16　工土	小樽市忍路町塩谷村	048-25		自営	
熊沢　洸	16　農実	河東郡士幌町　士幌農協	080-12		士幌農協	
関　義人	16　医	秋田県湯沢市西松沢３９２	012		関内科小児科医院	
高木　史郎	16　工鉱	茨城県東茨城郡茨城町大字駒渡１２４４	311-31		波崎高等学校校長	
中曾根　賢	16　農実	札幌市菊水上町４６	062	841-1034	北海道農務部酪農草地課	
林　健爾	16　農実	札幌市手稲福井４９－１３	063	661-9707	ホクレン米穀事業部	
半沢　宏	16　工機	札幌市北６条西１２丁目	060	261-7455	北大工学部教授	内 2191
伊関　悦郎	16　工鉱	函館市宮前町２１３	040		函館水産高校	
門池　正夫	16　農実	名古屋市千種区丸山町３－２４	464		旭化学工業kk	
秋吉　照忠	16　農林	札幌市真駒内曙町１－１－１	062	581-0415	北海道合板工業組合	241-5845

氏　名	卒業年度	住　所	郵便番号	電　話	勤務先	電　話
福光　幸彦	17　医	札幌市南7条西4丁目	060	511−1843	福光延寿堂院小児科	
岡田　光夫（16主）	17　工木	札幌市南7条西22丁目	060	561−4750	札幌市役所建設局長	281−3750
石川　恒	17　農畜	札幌市北24条西16丁目	065	721−0052	北大獣医学部教授	内 5281
白取　善三	17　農実	弘前市大字薬師堂熊本19の2	038−03		大成軽ブロックkk社長	
小林　五郎	17　工電	神奈川県中郡大磯町東町2の64	255		沖電気工業kk特殊機器開発部次長	
山根　乙彦	17　農畜	鳥取市湯所町2の422	680		鳥取大農学部教授	
前田　正義	18　農実		467		雪印乳業名古屋マーガリン工場長	
大戸　進	18　農林	千葉県市川市菅野2−21−21	272		三井木材kk習志野工場長	
小池　栄一	18　工土	札幌市藻岩下475	060	581−2290		
平井　宏和	18　工電	東京都町田市玉川学園8−18−9	194	0427 26−6231	日本電気衛星通信開発室	044 41−1111
安部　孝	19　工電	東京都小金井市貫井北町3−19−5	184	0423 81−4100	高見沢電気製作所	
坂井　弘	19　農化	Hydenabad−30A.P.,India（在インド）			AICRIP−Rajendranagen	
田口　暢茂	19　医	札幌市北22条東18丁目	065	781−3621	市立千歳病院	
稲葉　恵一	19　農化	大阪府高槻市天神町2の16の15	569	0726 5−2759	日本油脂kk	
福岡　邦泰	19　農農	岩見沢市6条西5丁目	068	01262 2−0124	空知支庁長	
大手　英夫	19　理化	東京都新宿区西大久保2−219	160	365−4523	東邦シートフレームkk	272−2811
富塚　治郎	20　農畜	東京都青梅市新町都立種畜場内	198		東京都立種畜場	
岸田幸三郎	20　農化	大阪市東淀川区山口町145−1	533		自営	
羽島　栄治	20　土木	名古屋市千種区朝日ヶ丘29	464	(052) 771−3513	日本鉄道建設公団名古屋支社	(052) 211−1451
小林　正英	20　農畜	東京都杉並区阿佐ヶ谷北3−26−10	166	337−3196	東京都経済局農材部畜産課長	212−5111 内 2883
木全　幹雄	21　農化	東京都杉並区清水1の6−8	167		自衛隊陸上幕僚監部	
山崎　治雄	21　工治	東大阪市西堤623狩勝工業	577		狩勝工業kk大阪市城東区放出町2179	
宇津見千之助	21　農畜	栃木県小山市横町2206	323			
上野　新次	22　農農	新潟県東蒲原郡津川町2区 県立津川高等学校	959−44			
和田　晴	22　農畜	東京都渋谷区富ヶ谷2丁目2−13	151		北海道東京事務所参事	
宮崎　利昭	22　工機	東京都港区白金台3丁目12−3−401	108		三井物産事業部 港区西新橋1−2−9	

氏名	卒業年度	住所	郵便番号	電話	勤務先	電話
武田 祐幸	22 理地	横浜市磯子区洋光台1－28－6	235		国際航業kk 地質部長	262－6221
田之上家久	26 農水	三鷹市牟礼2の14の10の104	181		日本放射線同位元素協会	
後藤 義英	28 農獣	札幌市円山西町2097	063	621－0962	札幌市環境衛生事業所長	
斉藤 善一	28 農畜	弘前市若党町79	036		弘前大農学部教授	
鈴木 敏夫	28 農畜	虻田郡洞爺村字洞爺町四町内公住	049－58		洞爺高校	
渡植貞一郎	28 農畜	名古屋市千種区不老町 名古屋大学農学部畜産科	464		名古屋大農学部	
鳶野 保	28 農畜	札幌市豊平区羊ケ丘北農試宿舎G－5	061－01		北海道農業試験場草地開発第1部第5研究室長	851－9141
永井 重翁	28 農獣	水沢市新小路2番地雪印乳業kk水沢工場	023		雪印乳業kk水沢工場	
梶谷 晴男	28農水産	大阪府生野区新今里町5の17	544	(06) 753－0387	大蔵エンジニアリング㈱ 西宮市津門西口町9－15	(0798) 33－5008
吉本 正	28 農畜	千葉県松戸市定元648	271	0473 63－1221	千葉大園芸学部	
古谷 昌司 (26.27主)	28 農畜	浦和市別所3－38－10	336	0488 61－5073	古谷製菓kk 技術部	(0488) 31－5873
下飯坂 隆	28 農畜	東京都中野区白鷺2－17－3 和田方	165	385－3269	日本軽種馬登録協会	429－5101
佐藤 厳	28 農畜	川崎市岡上510－28	215		雪印乳業kk 技術部	268－8111 内線588
福島 務	29 医	福島市三河南町7－17	960	0245 34－7223	福島医大産婦人科教授	0245 23－1111 内360
阿部晃一郎	30 工鉱	愛媛県越智郡宮窪町四坂島 堂の端26	792－01		住友金属鉱山	
鎌田 正人 (28.29主)	30農畜獣	浦河郡浦河町西幌別	057	01462 浦河3－284	kk鎌田牧場	
田中 浩	30 工冶	大阪府東区北浜3 大阪神鋼ビル内 神戸製鋼溶接棒技術サービス課	541		神戸製鋼kk	
正富 宏之	30 理動	美唄市東5条南7丁目	072		専修大学美唄農工短大	
斉藤 成俊	31 農経	札幌市北1条西30丁目 円山公宅3号	063	621－4770	北海道信用農工連	
佐伯 和夫 (旧石塚)	31 獣	白老郡白老町萩野第三石山	059－08		昭和工業kk	
大久保利彦 (30主)	31 獣	札幌市東区本町1条3丁目	065		雪印乳業kk 北海道支社酪農課	741－1111
加藤昌太郎	31 理物	国分寺市西町4－1けやき台32－103	185	0423 741－1111	(財団法人)日本総合研究所科学部次長 千代田区平河町2－16－15(北野ビル)	(03) 265－2371 内線356
加藤 元	31 獣	東京都杉並区久我山3－7－27	168	334－1286	ダクタリ動物愛護病院	344－8536
千田 哲生	31 獣	世田谷区弦巻5－26－3－302	182	425－3462	中央競馬会競走馬保険研究所 研究二課長	429－2311
岡本 洸	31 農生	草加市草加松原4丁目D58－204	340	(0489) 23－9407	十条製紙kk 東京事業所	
荒川 清	32 経		060	561－4672	札幌トヨタ自動車kk	261－3211

氏名	卒業年度	住所	郵便番号	電話	勤務先	電話
榎本 幸人	32 理植	兵庫県津名郡淡路町岩屋 神戸大学理学部岩屋臨海実験所	656-23		神戸大理学部岩屋臨海実験所	
岡部 満雄	32 農畜	札幌市西区琴似八軒5条東5丁目 道公宅 206	063		道農務部畜産課肉牛振興係長	231-4111
斉藤 実	32 経		930		不二越鋼材工業kk	
宮沢 亨 (31主)	32農林産	逗子市山ノ根3-12-10	249	(0468) 71-2487	日本揮発油建設部	(045) 731-1261
伊藤 亮	33 獣	岩手県岩手郡滝沢村巣子岩手種畜牧場巣子牧場	020-01		農林省岩手種畜牧場巣子牧場	
池田 瓔	33 医薬	札幌市中央区大通西28丁目円山ビル601	063	621-4251 円山ハウス		
乾 直道	33 理勁	藤沢市辻堂新町2丁目4-22	251	(0466) 36-9162	癌研究所病理部	418-0111 内472
栗原 康	33 工鉱	東久留米市大門町2-3-6-403	180-03	0424 72-9064	中小企業庁鉱山石炭局	511-1511
渡辺 俊弘	33工応化	上尾市大字上字堤下359 上尾シラコバト公団アパート17-401	362		北炭化成工業kk	
柴田 久男	34 工電	札幌市手稲町西野937	063	661-8709	北海道電力火力部火力工事課	
今田 哲	34 農化	兵庫県西宮市甲東園2-85 武田薬品研究所	662		武田薬品kk	
生田 勝一 (33主)	34 経	習志野市袖ケ浦3-4-5-202	275	0474 74-5206	読売新聞社地方部	242-1111 内3333
菅原 照雄	34 文哲				毎日新聞社北海道支社地方部	
土井 敬	34 農畜	札幌市北2条西27丁目	063		ホクレン牛乳課 北4W1北農会館 牛乳共販課	251-1805 261-8525
山本 智	34 水	斜里郡小清水町七区 北海道小清水高校住宅内	099-36		小清水高校	
粟津健太郎	34 水	札幌市西区発寒834	065	661-1092	銀座屋(製パン業)	
村山 哲	34 経	埼西県新座市道場1丁目3-10	325		本田技研工業	
樋口 正明 (32主)	34 法法	東京都世田谷区上馬5-23-8	154	424-9496	東京都衛生局医務部	212-5111 内2582～4
千葉 幹夫	34 獣	東京都世田谷区弦巻5-26-4-206	158	426-1858	中央競馬会馬事公苑普及課長	429-5101
中村 美幸	34 経経	東京都中野区鷺宮6-31-9	165	999-2443		
佐伯 雄二	35 農畜	群馬県館林市大字成島2544 森永住宅	374		森永乳業kk	
本橋 幹久	35 農畜	(在サンパウロ)				
奥野 静子 (旧片山)	35 文英	札幌市北2条西23丁目 片山方	063	661-8414		
小長谷普高	35 水	長崎市西坂町1番地 NHK長崎放送局	852		NHK長崎放送局－TV放送部	
田中 紀介	35農林産	静岡県清水市江尻宮代町6	424		富士合板kk研究所	清水 34-1271
長谷川邦夫	35 法法	立川市栄町5-28-1 公社250	190	0425 35-7461	岩崎通信機kk経理部	

氏　名	卒業年度	住　所	郵便番号	電　話	勤務先	電　話
門奈　駿	35 医	茅ケ崎市旭ケ丘13－4	253	(0467) 82－5746	国際興業航空サービス部	265－3661
森本　悌次 (34主)	35農林産	埼玉県八潮市8条1567　八潮団地18－504	340	0487 95－0751	自営	600－5330
稲垣　修一	36 理化	愛知県知多郡阿久比町白沢みのかけ10の10	470－22		大同製鋼kk	
佐藤　典子 (旧佐藤)	36 医	(在アメリカ)			北大病院第2内科	
高林　嬉子 (旧高階)	36 医	横浜市磯子区岡村町238	235	045 751－4431	虎ノ門病院	583－6871
河原　紀夫	36 理地	八王子館町1821－148	192	0426 61－4382	アジア航測kk	429－2151
湯浅　正之	36 農畜	船橋市坪井町600－59	274	0474 65－3742	伊藤忠商事kk畜産課	662－5111
吉田　享	36 工衛	八王子市打越町715－203	192		高砂熱学工業kk技術部	251－7121
千葉　祐記 (36主)	37 農畜	小平市喜手町860－1 小平団地2－4－405	160		雪印乳業kk販売促進部調査課	
広岡　暢夫	37 農畜	保谷市ひばりケ丘2－11－9	188		全販連	279－0411
森　弘津	37 工精	名古屋市北区辻町2の36大隅鉄工所第一寮	462		大隅鉄工所	
四柳　智久	37 医薬	(米国留学中)			東京大大学院(薬学部)	
木塚　信次	37 農畜	横浜市戸塚区名瀬町784－10	244	045 531－5468	湘南倉品kk研究室主任	045 891－1921
伊藤　公一	37 医	虻田郡倶知安町北4条東1丁目倶知安厚生病院	044		倶知安厚生病院	
大場　善明 (35主)	37 文史	東京都足立区栗原町2－6－14－104	123	883－8245	読売新聞広告部	242－1111
鶴見　好博	37 理化	東京都葛飾区金町5－19－3	125	600－2186	三菱瓦斯化学kk	600－2131
小島　杏介	37 水	横浜市神奈川区菅田町2872	221		淀橋保健所	368－6186
小山　毅	37 教	世田谷区南烏山2－6－8－136	157	300－4775	専修大文学部	044 95－7131 内2691,5427
市川　瑞彦 (37主)	38 理物	札幌市北区北31条西6丁目藤美ハウス	065	731－1634	北大教養部物理学教室助手	
小出　秀通	38 医	大阪市阿倍野区美専園1－8－24	545			
宮崎　健	38 文露	横浜市北区日吉町128産経日吉住宅	222	044 63－2501	夕刊フジ	
玉沢　一晴	38 医薬	埼玉県南埼玉郡白岡町大字上野田1013の2	349－02	(0488) 82－3436	山之内製薬kk中央研究所	460－2171
岡田　征至	38 法	札幌市中央区大通西27丁目拓銀円山アパート	063		北海道拓殖銀行事務部	521－4111
志水　一允	38農林産	横浜市港南区日野町5791藤ケ沢住宅6－408	222	045 841－5479	農林省林業試験場	711－5171
清水　洋	38 農畜	(在オキナワ)	233			
原　重一	38 農農	北区赤羽台4－17－18－1103	228	908－0503	交通公社調査部	内3575 211－3211

氏名	卒業年度	住所	郵便番号	電話	勤務先	電話
堀川　芳男	38　農畜	東京都中野区上高田2－16－9	164	385－8685	kk ソニーオーデイオ　ビデオ取締役	
実吉　峯郎	38　医薬	（在カナダ）	150			
新原　輝久	38　理地	東京都北多摩郡狛江町泉1284	182		国際航業 kk	
中村セツ子（旧田中）	38　農工	東京都世田谷区奥沢6－24－14	158	702－1365		
恩田　正臣	39　農畜	群馬県勢多郡富士見村小暮2425 群馬県畜産試験場	371－01		農林省群馬畜産試験場	027288－7又12
横沢喜美子（旧大江）	39　薬	東京都杉並区清水3丁目15の2	167		退会希望	
小林　則子（旧寺江）	39　農畜	札幌市北36条東6丁目	065		天使女子大	
高木　佑太	39　農畜	横浜市港北区南綱島町500－4	222		台糖フアイザー kk	
小島　武	39　医薬	神戸市兵庫区山田町上谷上字上の開地42の30	651－12		鐘ヶ淵化学 kk	
荒木　伸也	39　水	鎌倉市十二所98十二所アパート	248		自家営業	
三浦清一郎	39　教	文京区根津2の18の5	113		国立社会教育研修所	03－823－0241
田村　雅英	39　工合	立川市柏町4－51－1柏町団地9－306	190	0425 35－1670	小西六写真工業 kk 日野工場管材課	0425 83－1521
八木　正己（38主）	40　理生	札幌市白石区もみじ台北3丁目2の1 N2の306	061－01	897－2109	札幌市役所公園課	211－2532
野田　行文	40　獣	多摩市諏訪2－1－5－808	192		中外製薬総合研究所	987－7111
大木　誠示	40　理数	埼玉県入間郡富士見町大字鶴馬2824	354		ユニツク kk	
吉田　賢一（旧御坊田）	40　工治		241		日本揮発油 kk	
守屋　正	40　工精	東京都太田区田園調布2－40 第一桜ケ丘寮	145		三菱重工 kk 東京製作所	
萩原　雅典	40　経	八王子市小安町2－32、B－202	192	0426 42－9974	日立製作所中央研究所	0423 23－1111
滝沢南海雄（39主）	40　理植	旭川市北門町16丁目 北海道立林産試験場公宅55号	070			
松永　武彦	40工電子		187		日立製作所武蔵野工場	
水野　佑彦	40　理化	札幌市北29条西5丁目　めぐみ荘	065	751－1303	北大結核研究所助手	内 5536
横田　鑫	40　農化	東京都東村山市栄町3－31－8　渡辺荘	189		明治乳業 kk 研究所	
菅原　弘	40　農畜	室蘭市幸町119　胆振支庁	051		胆振支庁農務課畜産係	
大沢　龍子（旧　牧）	40　薬薬	新潟市関屋町2－42	951			
滝沢　廸子	40文独文	（在ドイツ）			北大文学部助手	
松尾　英彦	41　水産	高松市太田下町2677の3	583		日魯漁業	

氏名	卒業年度	住所	郵便番号	電話	勤務先	電話
八木多賀子（旧八木）	41 文哲	札幌市白石区もみじ台北3丁目2の1 N2の306	061-01	897-2109		
黒沢 道雄	41 工機	千葉八千代市八千代台東1の20の2 藤倉電線八千代台アパート402号	351		藤倉電線	
高野 文彰	42 農農	（在アメリカ）				
小栗 紀彦（40主）	42 農畜	札幌市北21条西13丁目 合同宿舎新川住宅518-53	063	741-7335	北大農学部助手	内2576
近藤喜十郎	42 文史	名古屋市中央区大須3丁目31-23	460		経営コンサルタント産業社会学研究室	(052) 732-0335
高橋 昭夫	42 獣	野付郡別海村中西別別海農共中西別 家畜診療所	086-03		別海農共中西別家畜診療所	
八木沢守正	42 理生	東京都目黒区大橋1-8-5 目黒第5コーポラス2FL 205号	153	462-1854	協和醗酵(財)微生物化学研究所	491-3341
山村 勝	42 農林	山形市緑町4-9-5 布施方	990	(0238) 22-8010	山形県農林部林務課	
加藤 正昭（41主）	42 工衛	帯広市大通り8丁目10	080		加藤家具店	
田中 [illegible]	44 医					
阿部 勝彦	43 農林	東京都杉並区阿佐ケ谷北5丁目11-19 安楽方	166	337-7735		
五十嵐 章（42主）	43 法	旭川市南4条24丁目	070		モービル石油kk	
池田 統洋	43 工機	埼玉県上尾市原市6の965	362	0487 74-2051	東京芝浦電気KK原子力技術部プラント技術部プラント技術第一課 東京都千代田区霞ケ関3-2-5 霞が関ビル4階	581-7311
入江 圭	43 工衛	東京都世田谷区成城町2丁目6番地13号	157	416-7531	東京都庁	212-5111 内4722
高倉 宏輔	43 獣	横浜市磯子区原町11-1 動物検疫所磯子寮	253		農林省動物検疫所	747-0267
降旗 正忠	43 工電	千葉県船橋市山手2-3-34 三菱電機船橋寮	273	0474 31-5320	三菱電機kk	
狩野 和子（旧仙波）	43 教	小樽市桂岡274	047-02			
山本 紘明	43 経	大阪府交野市大字私部2206-63	576		三洋電機審査部鑑査課	
浜岡 秀洋	43 工機	大阪市寝屋川市東大利6-5 浜明男方	572		三洋電機kk	
斉藤 勝雄	44 農機	札幌市澄川12	062	831-6281	ホクレン農業機械課	
田中 力	44 獣	岩手県花巻市高木第20地割屋田促進住宅1号棟303中山競馬場第一寮	025		雪印乳業kk花巻工場	
春田 恭彦（43主）	44 農畜	市川市若宮3-41-7	272	0493 35-0504	中央競馬会中山競馬場	0473 34-2222
村井 弘一	44 農畜		090		協同飼料	
山本 進	44 水化	河原郡音更町中音更東士狩	080-04			
寺崎 弘恭	44	大阪府豊中市刀根山町4-98 近藤方	560		大阪大学在学中	
今井 雅子	45 農化	札幌市北3条西15丁目	060	631-1621	日本てんさい研究所	

氏　　名	卒業年度	住　　所	郵便番号	電　　話	勤　務　先	電　　話
小野　政則	45　農林				永大産業	
加藤　公敏	45　理化	札幌市北１８条西５丁目　五月荘	065	711−6844	北大理学部	
高口　庸	45　医	札幌市北１８条西５丁目　五月荘	065	711−6844	北大医学部学生	
本田　徹	45　医	札幌市北２０条西７丁目　藤見荘	065	731−0667	北大医学部学生	
(44主) 太田　清澄	46　農農	茨城県土浦市中貫２５ 日本住宅公団職員住宅３の１号	300		日本住宅公団研究学園都市開発局	
堤　秀世	46　獣医	札幌市北２７条西１１丁目	065		北大獣医学部学生	
中寺　清久	46　工機	東京都三鷹市下連雀４−８−１９ 川崎重工三鷹寮	181		川崎重工	
松井　亮	46　医	札幌市北区北24条西３丁目　加藤方	065	711−5461	北大医学部学生	
今井　敏郎	47　理化	札幌市北３条西１５丁目	060	631−1621	北大理学部学生	
大見　太一	47　文英	福岡県北九州市八幡区久喜町１丁目 陣山２丁目１０−２９	806			
梶村　哲世	47　獣	江東区亀戸町７−４９−３ 第一製薬江東寮	136	681−8326 682−9667	第一製薬	
中村　慎一	47　水産	椎内市北洋埠頭東部物産貿易 椎内営業所気付				
桝井　明	47　工鉱	札幌市北２０条東４丁目　北沢方	065			
田崎　拓昭	48　獣医	札幌市北区北２４条西３丁目　加藤方	065	711−5461	北大獣医学部研究生	
近森　志助	48　獣医	札幌市東区北12条東2丁目　森田登美男方	065	741−1753	北大獣医学部学生	
西村正二郎	48　農林	札幌市東区北２０条東４丁目　北沢方	065	741−3753	北大農学部林学科	
横山　豊昭	48　獣医	香川県高松市屋島西町字成久1864−14			自宅	

現　役　部　員　名　簿

氏　名	学年	学部学科	現　住　所		帰　省　先
南部　孝一	3	畜産化	東区北２０条東４丁目 北沢方	（741－3754）	北九州市八幡区祇園原町八番一号
則近　彰	4	文独文	北２０条西７丁目 登別荘６号室		岡山県岡山市西大寺邑久郷1691
相川　宗敏	2	理類	北２０条西７丁目 幌北荘	（711－3413）	東京都練馬区早宮１～４４～１８
江口　州志	3	理高分子	北２０条東４丁目 北沢方	（741－3753）	長崎市若竹町１－１１
小田　恭治	3	工応化	北２０条西７丁目 登別荘	（721－2926）	大分県日田市田島本町４－５
景山　博文	3	文中文	北１８条西９丁目 北大桑園学寮	（711－3413）	東京都中野区丸山１－１４－８
佐伯久美子	2	理類	北６条西１３丁目 北大女子寮		香川県丸亀市塩屋町８１２
柴田　好	2	医進	北１５条西３丁目 中村マンション	（241－3776）	愛知県東海市富本島東才道１番地
花谷　繁	3	医	北１８条東５丁目 高田方	（721－9352）	京都市左京区浄土寺下南田町７４
吉野　勝之	2	理類	北２０条西７丁目 幌北荘	（741－5814）	大阪府茨木市大池２丁目１９－２１
阿部　一哉	2	文類	北２３条西４丁目 清和荘		岩手県一関市弥栄字茄子沢１２３
荒川　尚也	2	理類	北１７条東１丁目 銅道アパート	（731－0716）	京都市左京区鹿ケ谷桜谷町４０－５
石川美也子	3	理生物	江別市緑町東２丁目 王子アパート１号		同左
尾崎　弘康	2	理類	北２０条西７丁目 幌北荘	（741－5814）	小樽市緑１丁目５番４号
加藤　良子	3	文英語英米文	北１７条西５丁目 ゆり荘	（731－7806）	青森県弘前市田町５４－１００
阪上　泉	2	水産類	北２６条西８丁目	（731－5673）	東京都千代田区飯田橋３－２－５
佐藤　愁一	2	水産類	澄川６条９丁目	（831－5735）	同左
柴沼　俊	2	理類	北１５条西２丁目１２番地 奥村方	（711－3973）	東京都渋谷区恵比寿３－３８－２２
添田　昌一	2	理類	北１７条西５丁目 ゆり荘		東京都稲城市矢野口３７
常田　和子	3	工応化	南２５条西１２丁目	（561－5779）	同左
新野　晶子	2	水産類	北１８条西３丁目 清野新一方		樺戸郡新十津川町中央
水野　豊香	2	理類	北１９条西４丁目 彌永方	（711－2575）	渋賀県彦根市正法寺町２３１
本村　洋文	2	理類	北１５条西２丁目１２番地 奥村方	（711－3973）	東京都中野区野方１－７－３
若松　光子	2	理類	北１６条東１丁目 クラブ荘内		大阪府羽曳野市南恵我荘１－６－３

広告

亭北軒

モツラ

札幌市北16条西4丁目

TEL (711) 6450

世紀の名馬ノースクイン号に
御期待下さい。

札幌陸運局認証工場

北大モータース

小野　忠

くらしと健康を守る

市民生協

札幌26店・小樽3店・旭川4店

乗心地よい北都ハイヤーをあなたのおともに
快適な道内観光の旅は
北都バスのエアーサスパノラマ展望車で

北都交通株式会社

取締役社長　武田忠幸

本　　社　札幌市東区北30条東1丁目☎751－1631
ハイヤー部　札幌市西区琴似8軒10条東5丁目☎711－4181
バ　ス　部　札幌市東区栄町7☎751－2821

日本中央競馬会

札幌競馬場

札幌市北14条西19丁目
ＴＥＬ (721)0461～5

場長　西　村　　勲

庄内歯科

院長　庄　内　真　夫

札幌市白石中央　五三の三

TEL（861）2504

最高技術と親切をモットーとする

乗馬靴の御用命をどうぞ

堤製靴店

名古屋市中区丸の内３の１

TEL(231)2323

馬　具　鞄
製造販売修理

安くて丈夫

中野馬具店

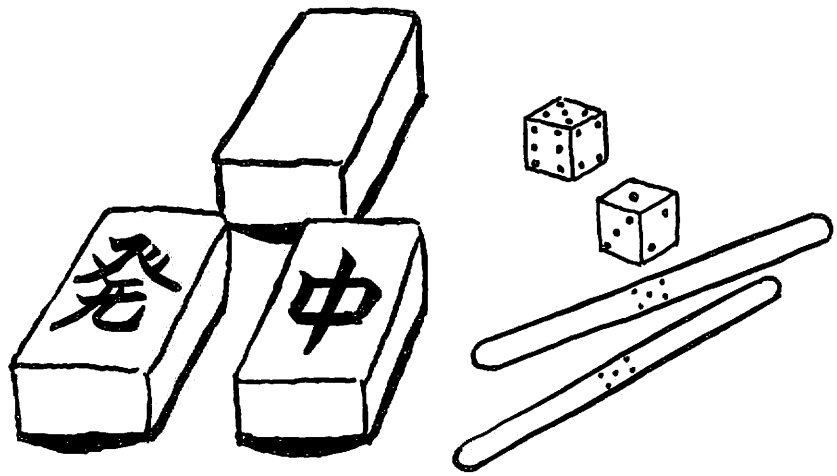
札幌市北13条東1丁目石狩通
TEL 711－8876

太田装蹄所

札幌市菊水北十二
TEL（八一一）〇八五一

江戸前
政寿司
割烹　一品料理

本店　小樽市色内見附畔
電話③〇〇二　②〇〇一一
支店　札幌市南七西三千両小路
電話（511）〇〇八〇　（511）二〇三七



麻雀荘 瀧

札幌市北区北17条西11丁目
TEL741－9726

COFFEE SHOP

SHARII

SAPPORO S 2 W 2
TEL 251－4368
261－9952

喫茶
シャリー

新鮮な材料の板前料理

家族的な雰囲気

とりね

南６西４　Ｇ４ビル４Ｆ
(531)5101・5164

coffee shop

エリイナ

北30条西４丁目

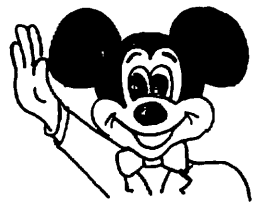
乗馬用長靴
スキー・スケート・登山靴
各種靴製造と販売

札専加盟店　**三浦靴店**

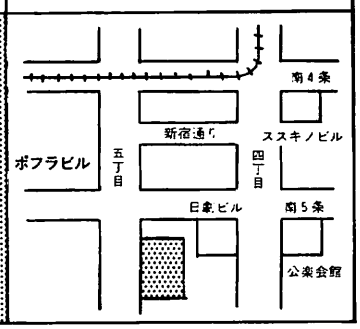
札幌市南一条西八丁目八番地　T代 (231)ﾚ 0901

ジャングル
ススキノに楽園を探そう！

小さな小さな空間で充分
小さなイマージュをかきたてよう。
急がしい日々の疲れを癒やし
瞬間に過ぎ去る「時」を共に
楽しく過ごそう。



スナック
ジャングル
南6西4ポプラビル3F
☎511－4213



暮しの中の小休止
コーヒーのある生活

画廊
喫茶
タマキ

北18西4 ☎731－4890

酒・たばこ・食料品・塩

土野商店

北18条西5丁目

TEL711－2575

ー編集後記ー

遅れながらも今年も無事部報が出来上がりました。御協力下さった先輩諸氏、及び部員諸兄には感謝致します。先輩の苦労が身に浸みて分かりました。

この機会に御手紙を下さった卒業生諸先輩の御言葉も無駄にしない様、これからもこの部報を発展の礎として頑張りたいと思います。

何に対しても意欲を持ち得ないこの頃の自分にとって、部報の製作は、少しは刺激になったことであろう。

多くの努力を払い得なかったが、部報編集の一端を任えたことは、嬉ばしい限りである。

頭の中のことを、言葉に表わすことが、いかに重要なことであるか、よくよく言って聞かせても、宿題を忘れる人がいっぱい、困まった、困まった。

新天地、札幌の地にも重き伝統は根をおろした。だがこの地とても日本。昭和元禄狂い咲き、我らが世代の部報です。心ならずも、鬼となり苦しめまくってしまいました。先輩諸兄、御苦労さまでした。

部報委員

鬼の　添田昌一
小鬼の　柴沼俊
遅刻の　水野豊香
なまけの　荒川尚也

部報　第一八号

昭和四十八年四月発行

発行者　北海道大学体育会馬術部
（札幌市北区北十七条西六丁目　北大体育会内）

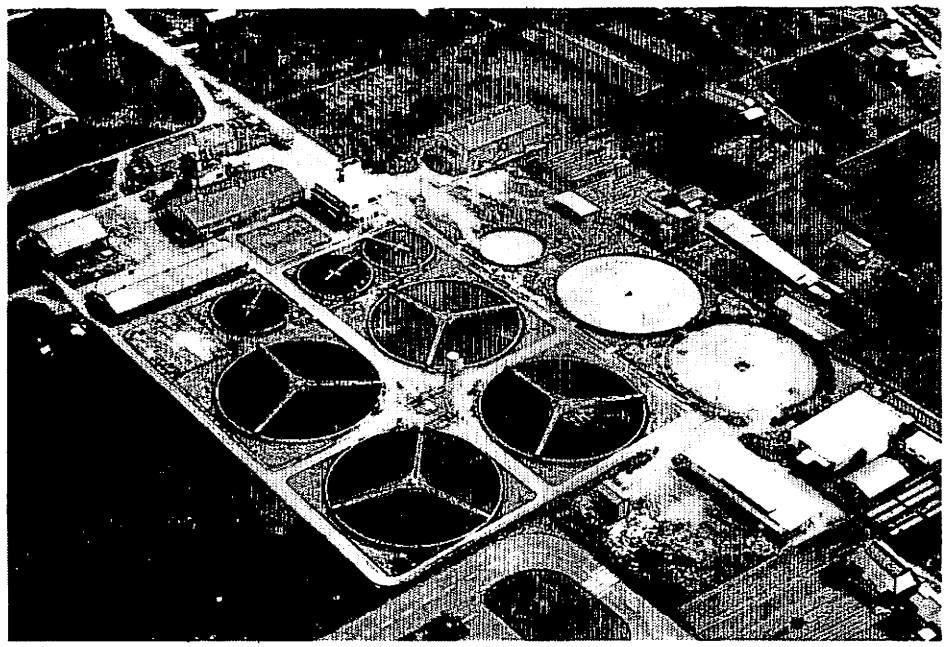
編集者　部報編集委員会

印刷所　北大生協プリント部

非売品

保健食品

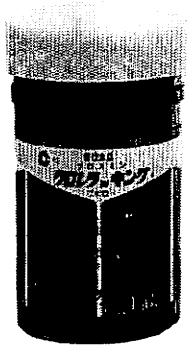
✚印 クロレラ



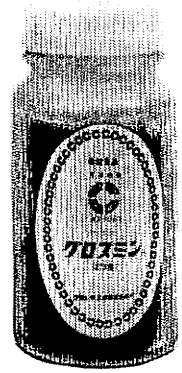
〈九州工場　クロレラ培養プール―増設工事中―〉

クロレラでアルカリ体質に!!

自然の植物、水中の緑藻であるクロレラは、その半分が良質の蛋白質であり、ビタミン・ミネラル・葉緑素をバランスよく含んでいます。そのうえ、動植物の細胞成長促進作用のあるクロレラエキスを豊富に含有して居る価値ある天然のアルカリ性食品です。若さと健康を保つ✚印クロレラをおためしください。



クロレラキング
240粒　￥1,800



グロスミン
270粒　￥2,000

類似品が出廻っています。✚マークにご注意の上、デパート、食料品店薬局、薬店にてお求め下さい。

発売元 三井物産株式會社

製造元 クロレラ工業株式会社

本社／東京都港区芝大門2丁目4番6号TEL(03)436－0901(代)
工場／福岡県築後市、愛知県豊田市